

第 3 回

新 四 国 創 造 研 究 会

平成 19 年 8 月 22 日 (水) 13:30～15:30
高松サンポート合同庁舎 低層棟アイホール

－ 議 事 次 第 －

1. 開会

2. 議事事項

(1) ワーキンググループの検討結果報告

- ・四国の特性を活かした地域の形成
- ・コンパクトな地域構造を活かした四国の一体化
- ・四国外との活発な交流促進

(2) 意見交換

- ・四国内の連携・交流による四国の一体化
- ・四国外との活発な交流の促進
- ・四国における国土形成のコンセプト

3. 閉会

[資料一覧]

- <資料－1> WG会議検討結果概要(A4 横)
 - <資料－2> 新四国創造研究会における提言に向けた議論のポイント(A3 縦)
 - <参考資料－1> WG会議における検討結果のまとめ(A3 横)
 - <参考資料－2> 四国が誇る日本一・世界一企業アンケート・ヒアリング概要(A4 横)
 - <参考資料－3> ライフスタイルに関する行動・意識調査(A4 横)
 - <参考資料－4> 地域構造分析に係るエリア設定について(A4 縦)
 - <参考資料－5> 研究会でのこれまでの意見の整理(A3 横)
 - <参考資料－6> 新四国創造研究会 WG 会議検討結果概要(A4 縦)
-

平成19年8月22日

第3回新四国創造研究会 委員名簿

新四国創造研究会委員名簿 (50音順・敬称略)

◎委員長

	氏 名	所 属 先	備考
出席	秋岡 榮子	経済エッセイスト・経済キャスター	
	伊藤 宏太郎	西条市市長	
	井原 健雄 ◎	北九州市立大学大学院教授	
	今井 義典	NHK解説主幹	
	梅原 利之	四国観光立県推進協議会長	
	岡村 甫	高知工科大学学長	
	小川 全夫	山口県立大学大学院教授	
	柏谷 増男	愛媛大学大学院理工学研究科教授	
	竹内 麗子	香川県各種女性団体協議会副会長	
	西村 幸夫	東京大学大学院工学系研究科教授	
	本庄 里恵子	瀬戸内海放送アナウンサー	
	丸山 力	徳島県最高情報統括監	
	望月 秋利	徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部教授	
欠席	川勝 平太	静岡文化芸術大学学長 (国際日本文化研究センター客員教授)	
	残間 里江子	(株)クリエイティブ・シニア代表取締役社長	
出席	井原 理代 ○	香川大学大学院地域マネジメント研究科長	WGより出席
	山中 英生 ◎	徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部教授	WGより出席

WG座長◎ 副座長○

第3回 新四国創造研究会 会議資料

～WG会議検討結果概要～



平成19年8月22日

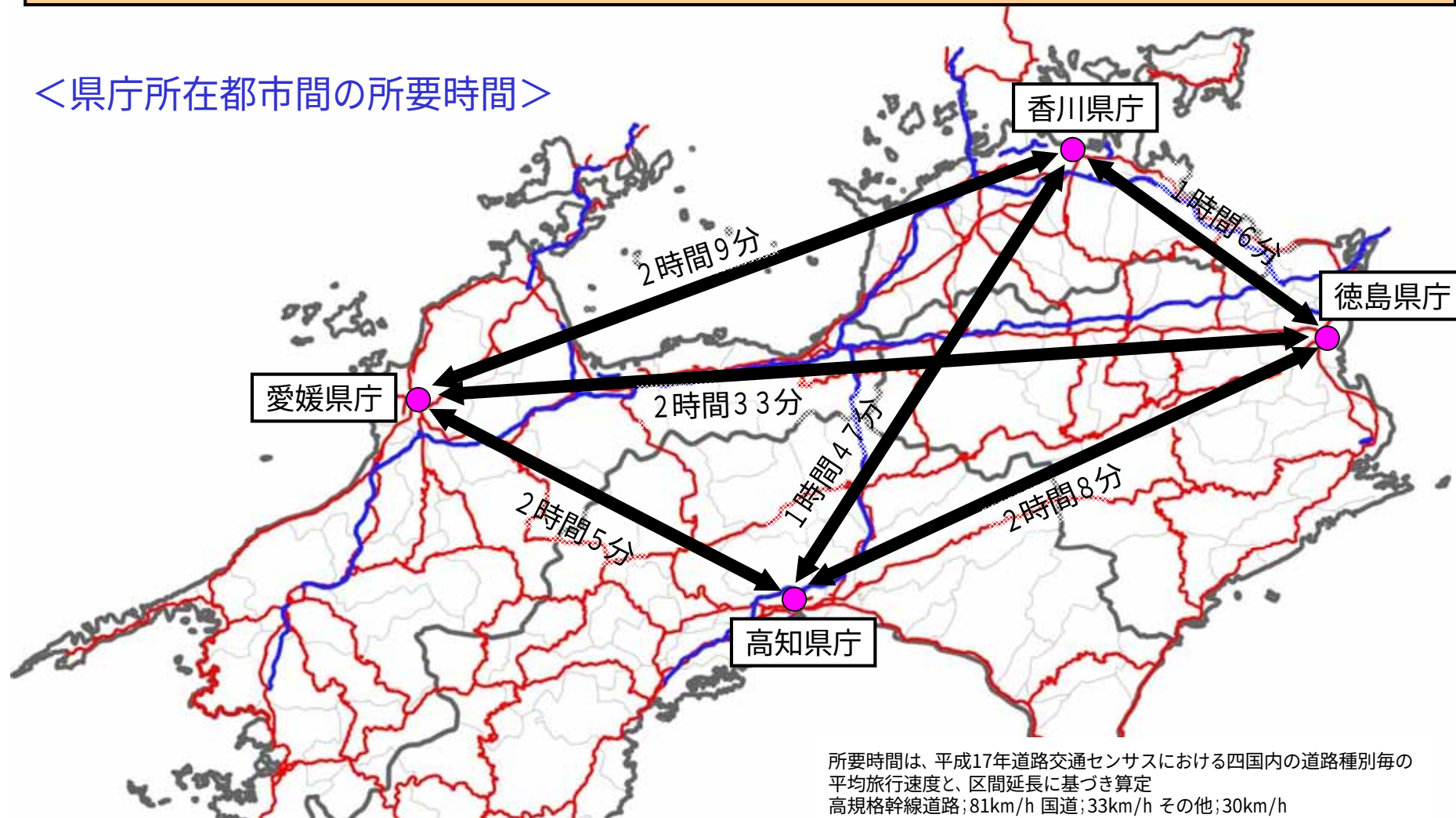
四国地方整備局

1.四国の特徴

1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ

- ・四国には、高度集積（100万都市）は存在しないものの、瀬戸内エリアと南四国エリアにおいて、個性的な5つの30万人都市圏が存在する。
- ・高速道路網により、県庁所在都市間の交流が2時間程度で可能となっている。

<県庁所在都市間の所要時間>



1.四国の特徴

2) 美しい自然と農漁村など人々の営み

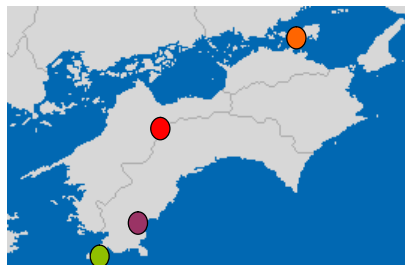
- ・中山間地域の集落における美しい景観や歴史・文化の存在し、日本の原風景が残されている。
- ・一方険しい四国山地が存在し、急峻な地域に暮らす人が半数以上。



● 石鎚山 (愛媛県西条市)



● だるま夕日 (高知県宿毛市)



<美しい自然景観>



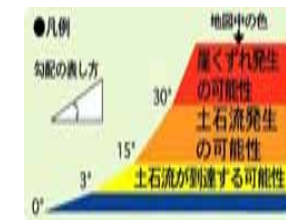
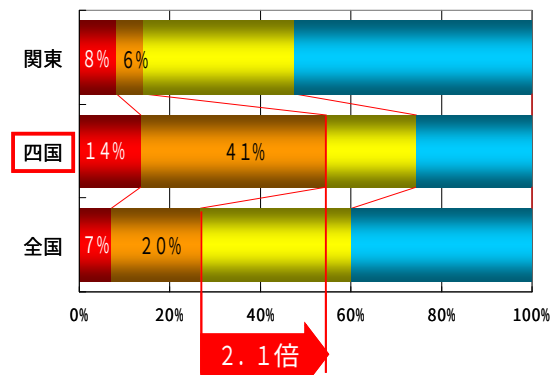
● 四万十川 (高知県)



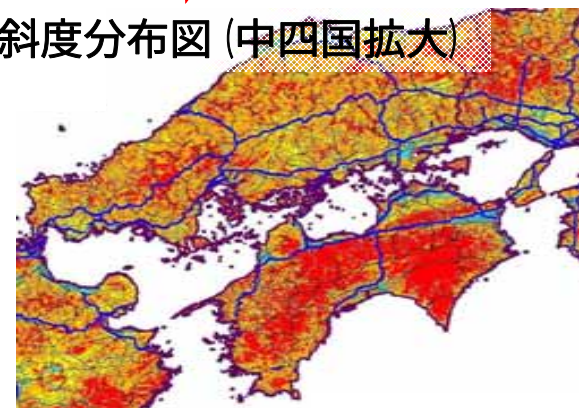
● 小豆島エンジェルロード
(天使の散歩道)
(香川県土庄町)

<険しい四国山地>

■ 傾斜度別 人口割合



■ 傾斜度分布図 (中四国拡大)



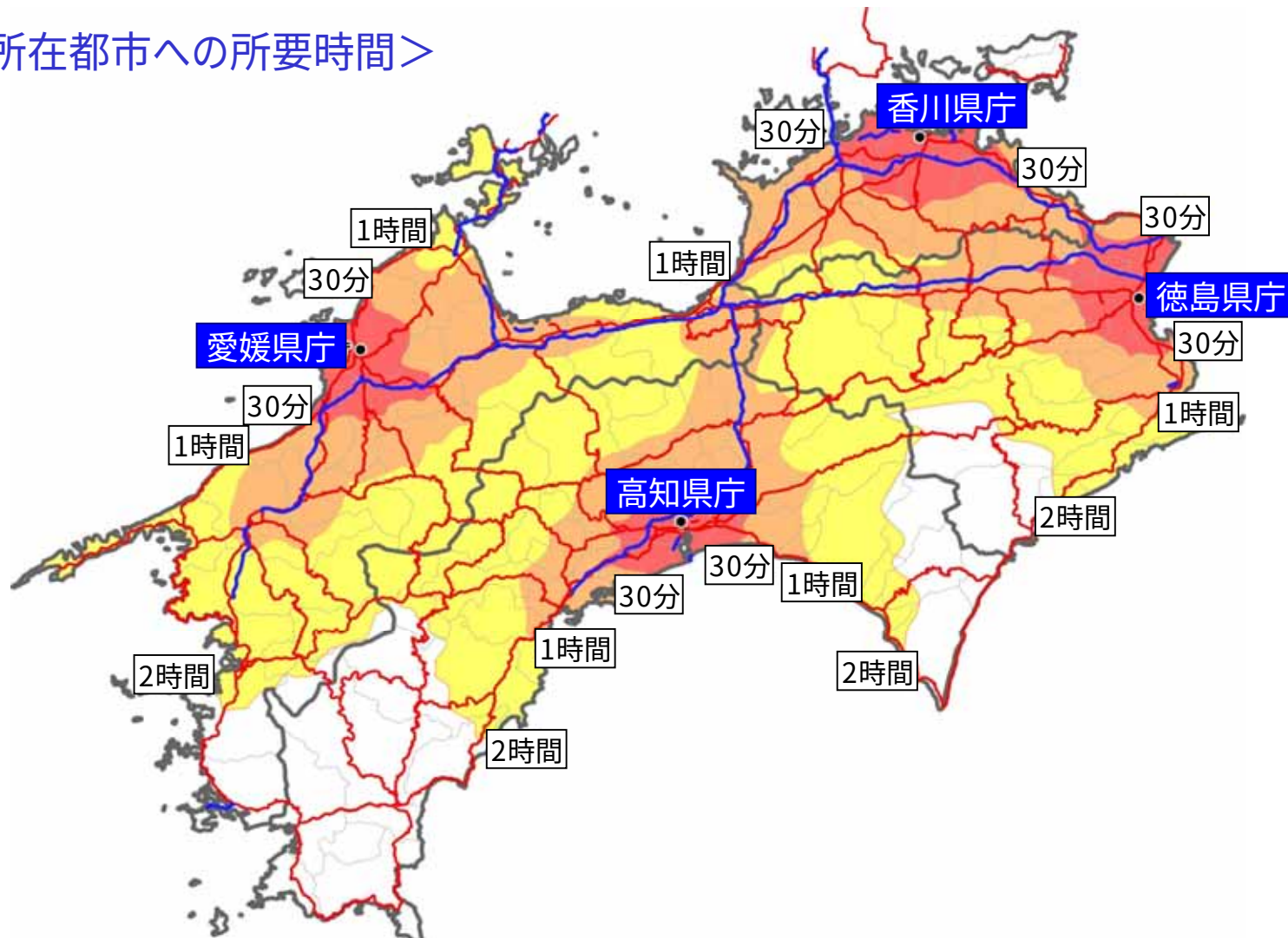
出典:「昭和57年度国土数値情報作成調査」による「地形、傾斜度別面積」
傾斜度分布図:四国地方整備局作成

1.四国の特徴

3) 都市の田舎の近さ

- ・中山間地域の集落から、概ね2時間以内で県庁所在都市まで交流が可能となっている。(ただし、南四国の半島部からは遠くなっている)

＜県庁所在都市への所要時間＞



1.四国の特徴

4) 独自の歴史、文化の存在

- ・お遍路やお接待文化等の四国共通の歴史・文化に加え、ボランティア活動も盛んである。

<四国伝統の普請やお接待の精神>

- ★古来より四国では、満濃池普請など、地域の人々が勤労奉仕により、地域の共有財産の普請活動を行ってきた。
- ★さらに、1200年を誇る文化遺産である遍路文化があり、その底流にある“お接待”の精神も“普請”の精神と共通点を持っている。
- ★現在も、地域のボランティアの手で遍路道の修復が行われ、今も“普請”の精神が受け継がれている。



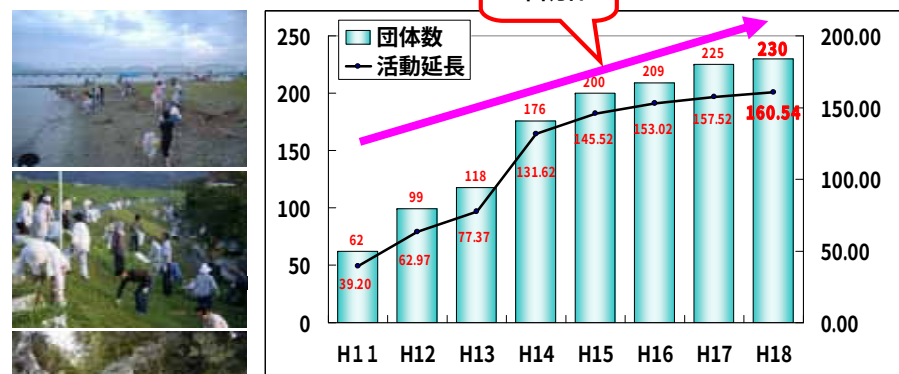
四国伝統のお遍路文化とお接待の精神



遍路道修復のボランティア作業

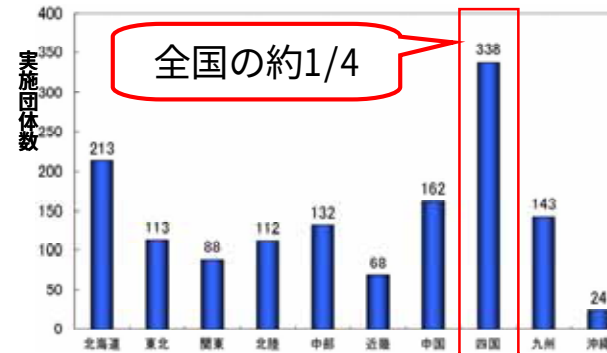
<四国ボランティア活動状況>

■河川アドプト活動状況



四国地方整備局 (H18. 12月現在)
H18の場合＝ $\frac{\text{河川アドプト延長 (160.54km)}}{\text{直轄区間における左右岸延長 (570.2km)}} = 28.2\%$

■ボランティア・サポート・プログラム 地方ブロック別の実施団体数

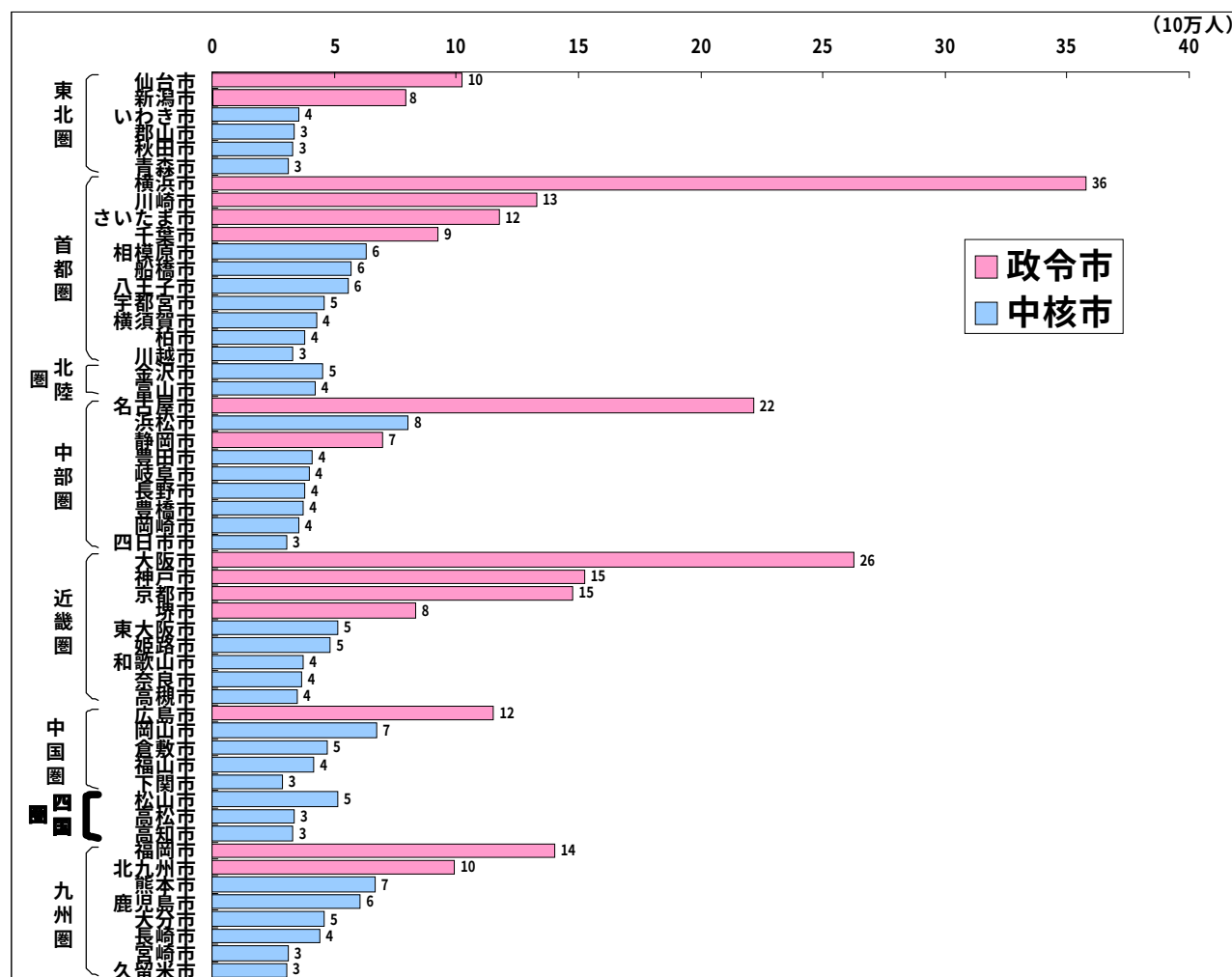


2.四国の課題

1) 高度集積(100万人都市)の不在

- ・四国には、100万人都市が存在せず、高度集積のメリットを享受できない。

<全国の主要都市の人口>



〔政令指定都市〕
地方自治法第252条の19(大都市に関する特例)で「政令で指定する人口50万以上の市」と規定されており、大都市における行政運営を効率的に行うために創設された制度で、一般市とは異なる取扱いがなされている。

〔中核市〕
政令指定都市以外で規模や能力などが比較的大きな都市について、その事務権限を強化し、できる限り住民の身近で行政を行うことができるようにした都市制度。
中核市の要件は、人口30万人以上、人口50万人未満の市は、面積100平方キロメートル以上。

資料) 平成17年国勢調査

注) 東京都特別区部(848万人)は除く。

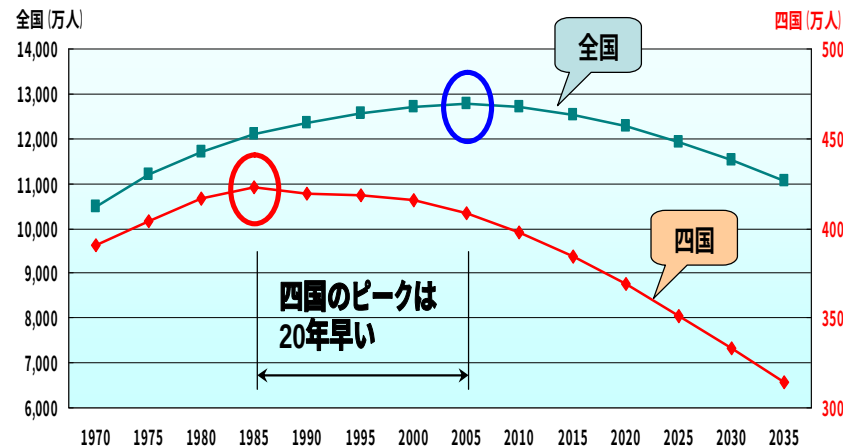
2.四国の課題

1) 人口減少と高齢化の進展

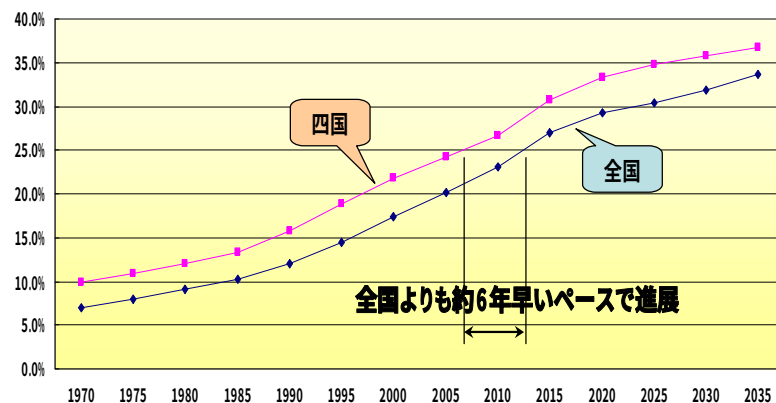
- ・全国に先駆けて人口減少、高齢化が急速に進展している。
- ・内陸部を中心に、消滅集落や秘匿集落などの限界集落が存在している。

<人口減少と高齢化>

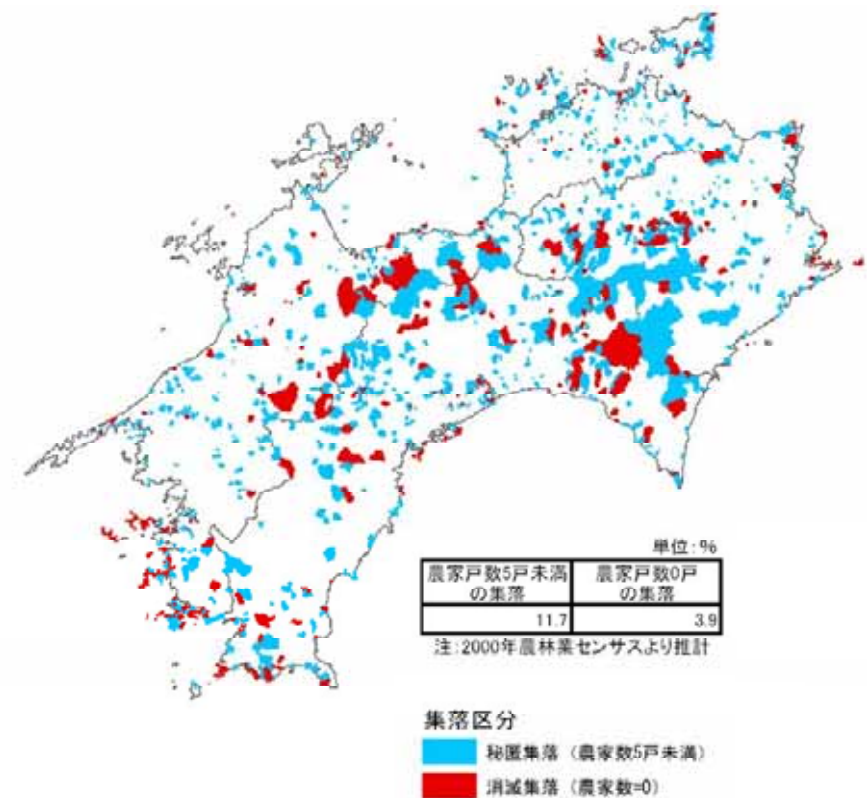
■人口減少の推移



■高齢人口(65歳以上)の割合の推移



<消滅・秘匿集落の分布>



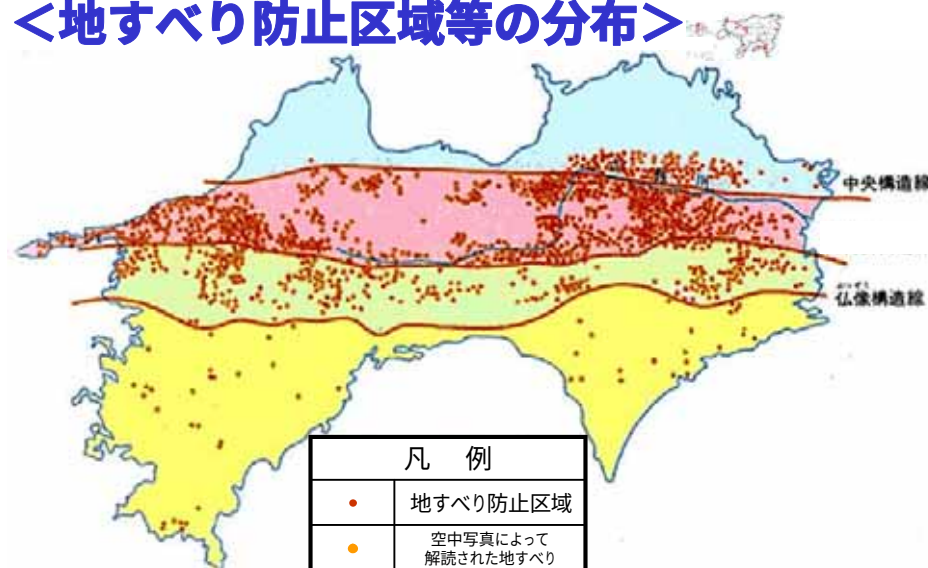
資料) 国立社会保障・人口問題研究所「都道府県の将来推計人口(平成19年5月推計)」

2.四国の課題

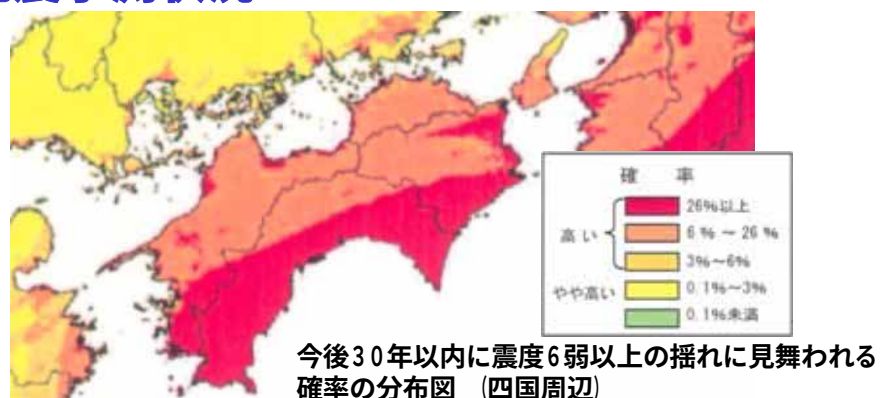
2) 厳しい自然環境

- ・台風による土砂災害などの自然災害や渇水被害が発生しやすい。
- ・東南海地震に対する不安がある。

<地すべり防止区域等の分布>



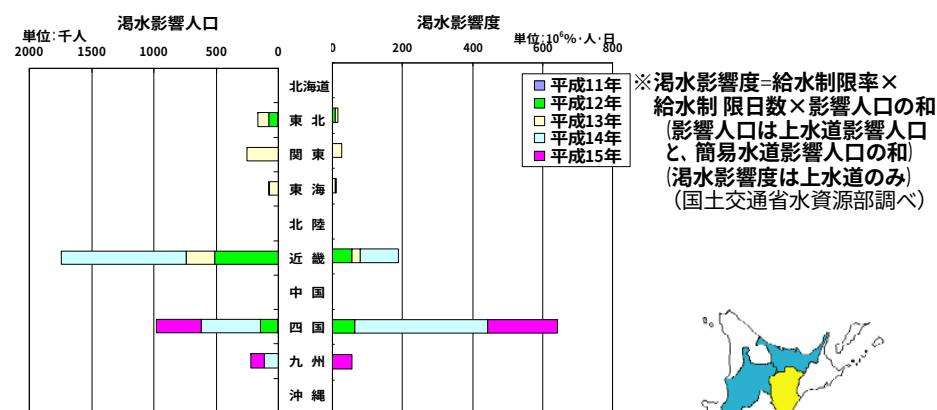
<地震予測状況>



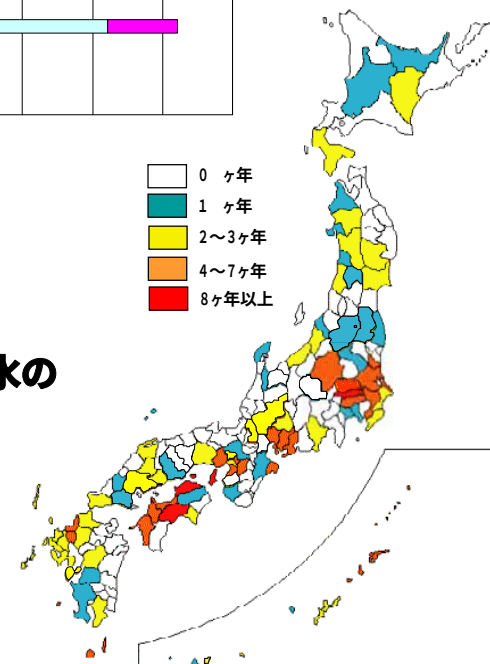
出典)「全国を概観した地震動予測地図報告書」(地震調査研究推進本部:平成17年3月23日)

<渇水被害>

■過去5年の被害状況



■最近20年で渇水の 発生した状況

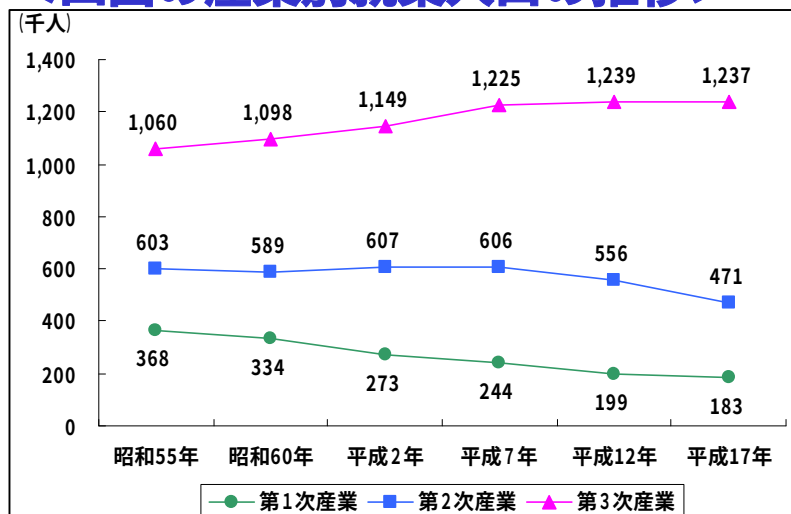


2.四国の課題

3) 地域活力の低下

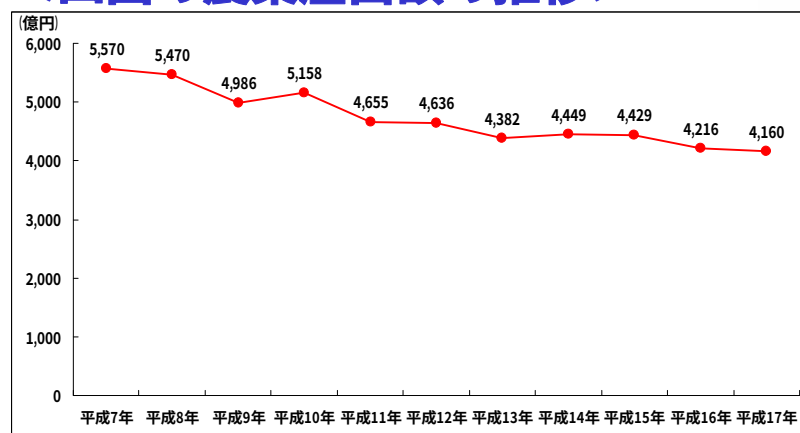
- ・就業者の減少や後継者不足など、第一次産業を取りまく状況は厳しい。
- ・工業などの好調な瀬戸内側と集積の少ない南四国との地域格差が拡大。

<四国の産業別就業人口の推移>



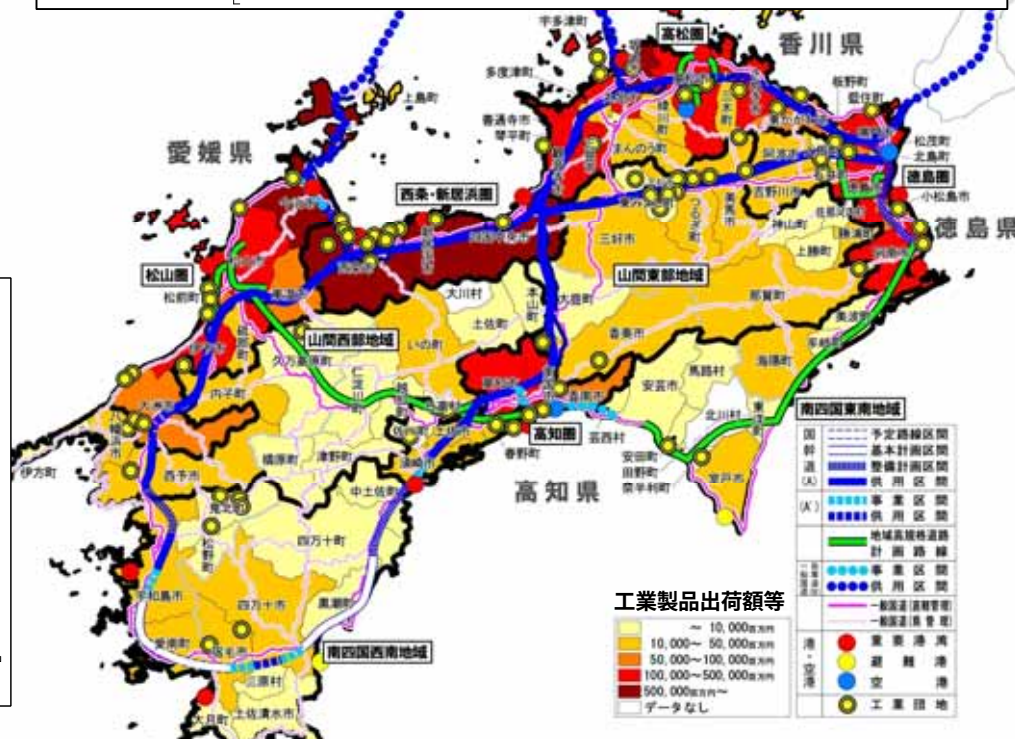
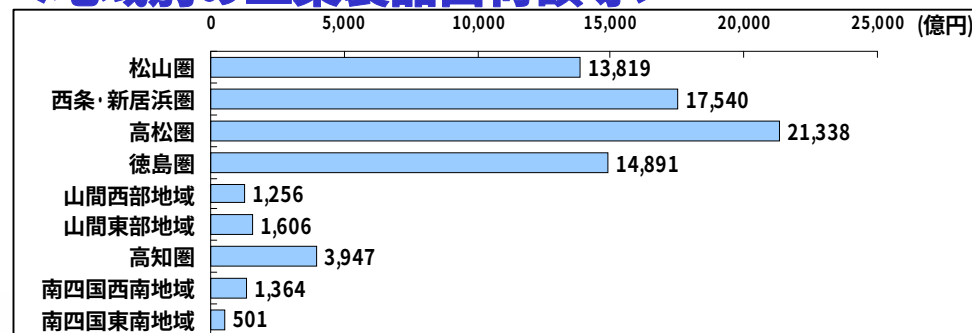
資料) 国勢調査

<四国の農業産出額の推移>



資料) 中国四国農政局

<地域別の工業製品出荷額等>

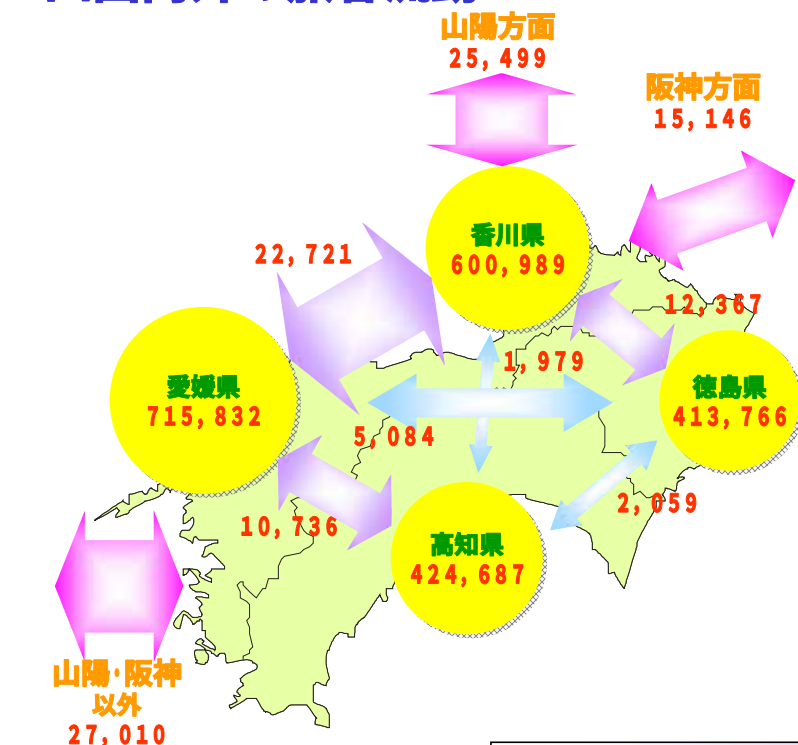


2.四国の課題

4) 四国内の結びつきの弱さ

- ・旅客流動は県内が9割以上を占め、四国内県間よりも四国外流動が多い。
- ・貨物流動についても、四国内県間よりも四国外流動が多い。

<四国内外の旅客流動>



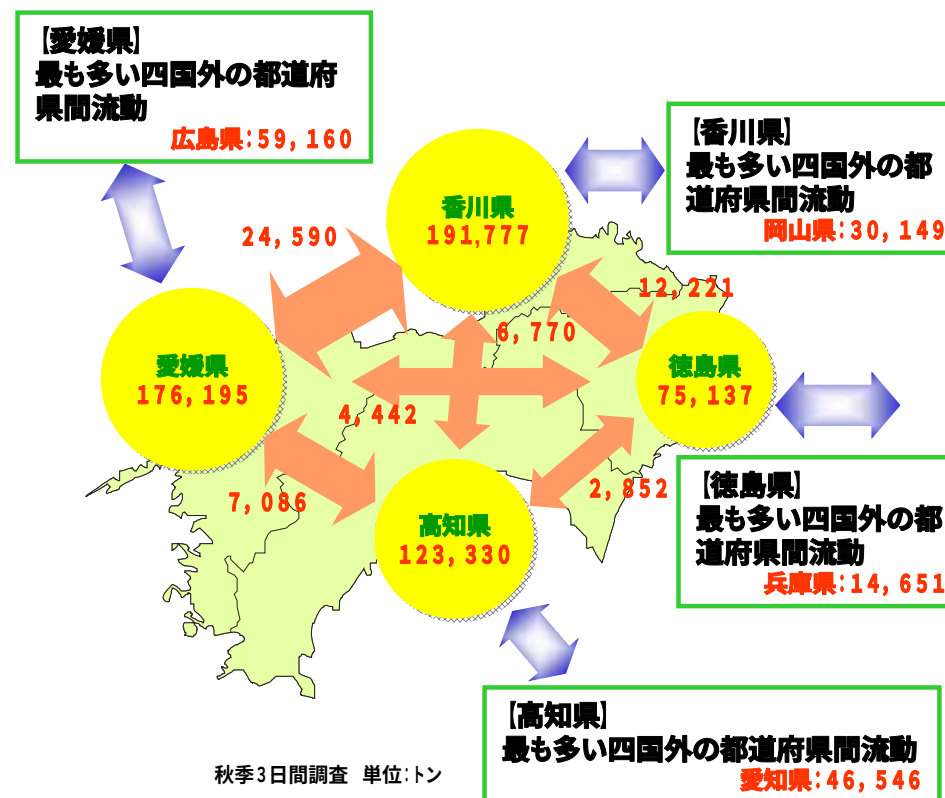
	流動 (千人)	割合 (%)
県内	2,155,273	94.6
四国内県間	54,945	2.4
四国外流動	67,655	3.0
合計	2,277,873	100.0

- ①旅客流動の95%が県内流動
- ②四国4県相互の県間流動よりも四国外との流動の方が大きい(3%)



四国4県は、四国内より
四国外を向いている

<四国内外の貨物流動>



秋季3日間調査 単位:トン

資料) 「旅客地域流動調査(国土交通省/H7~12年度の平均)より作成(単位:千人)

資料) 国土交通省 第7回全国貨物純流動調査(物流センサス)(2000年)

3.四国各地域の特徴

1) 5つの都市圏(30万都市圏)とその他の中山間地域が形成。

< “生活”、“経済(産業)”の視点から見たエリア設定 >

<四国における活動圏状況>

・国勢調査(通勤・通学流動)、道路交通センサス等の交通流動を踏まえて、日常的な活動圏域を把握

<通勤・通学流動(市町村別第1位流動)>



・日常的な活動圏域から9つの単位的な地域区分を設定

●5つの30万人都市圏*

・松山圏
・西条・新居浜圏
・高松圏
・徳島圏
・高知圏

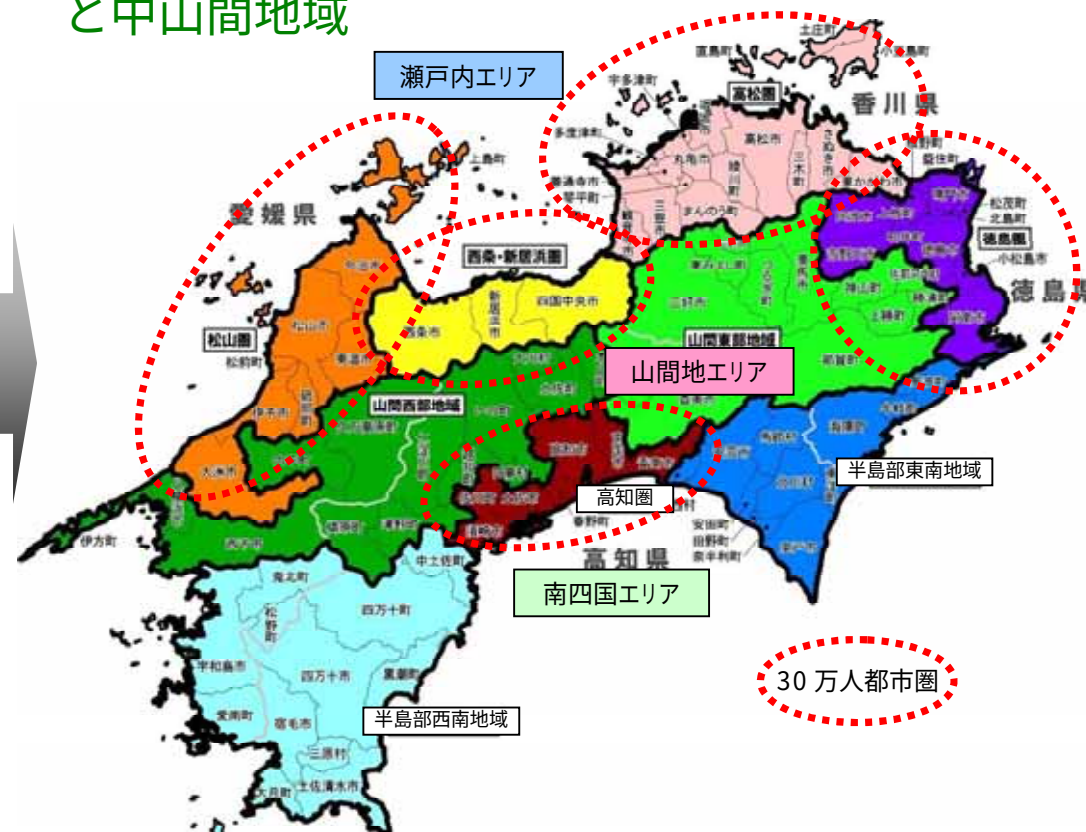
●4つの中山間地域

・山間西部地域
・山間東部地域
・南四国半島部西南地域
・南四国半島部東南地域

※30万人都市圏は、通勤通学の県庁所在都市への依存率の高さ(概ね30%以上)等を勘案して設定

(通勤通学の県庁所在都市への依存率=県庁所在都市への流出者数/他市町村への流出者数の合計)

5つの30万人都市圏 と中山間地域



3.四国各地域の特徴

2) 個性的な3つの地域と今後のあり方

エリアと地域区分		検討対象		地域の今後のあり方
		生活	経済 (産業)	
瀬戸内 エリア	松山圏	●	●	・ 4つの30万人都市圏が連たん ・ 高速道路等のインフラが整備され、都市集積や産業集積が高く、既存ストックを活用した、競争力向上が求められるエリア
	西条・新居浜圏			
	高松圏			
	徳島圏			
山間部 エリア	山間東部地域	●		・ 急峻な地形により小規模な集落が存在 ・ インフラ整備や、人口・産業等の集積が難しいため、集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア
	山間西部地域			
南四国 エリア	高知圏	●	●	・ 高知圏（30万人都市圏）と半島部が存在 ・ 現状では、高速道路等のインフラ整備が遅れ、産業集積が低いため、高知圏においては、インフラ整備とそれを最大限に活かした地域活力の向上が求められるエリア ・ また、半島部において、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア
	半島部東南地域	●		
	半島部西南地域			

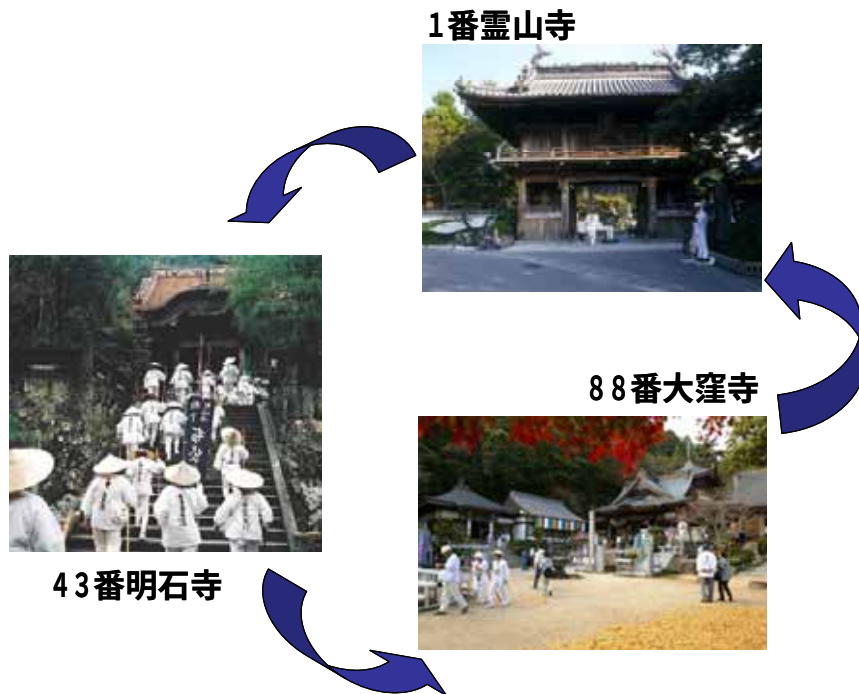
4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

① 文化的、歴史的な一体性を活かした連携

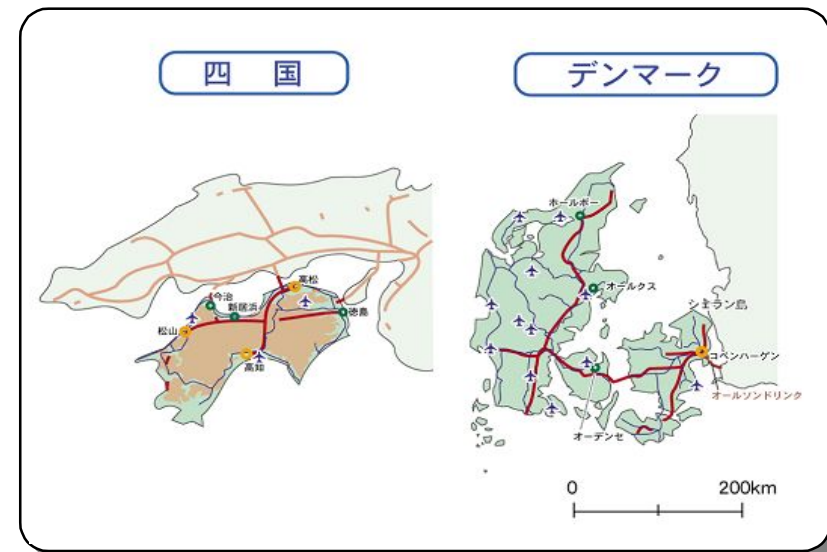
- ・遍路によるつながりや歴史上のつながりなど、独自性の高い文化を内包しており、これらの資源を活かした交流・連携により一体性を高める。

遍路道でも四国がひとつ



＜四国の人口・経済規模＞

四国は、一国家規模の人口・経済規模を有している。



● 30万人以上都市
● 10万人以上都市
✈ 空港
— 高速道路
— 鉄道
■ 標高200m以上の高地

地方・国	人口 (1,000人) 1997年	面積 (km ²) 1997年	GDP (100万米ドル) 1999年	地形的特徴
四国	4,217	18,801	118,107	狭い平地と急峻な山地
デンマーク	5,284	43,094	174,283	ほとんど平地

「Road Atlas Europe」等より作成

4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

② 多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進

- ・既に活発なボランティア活動などの住民活動をさらに広げ、「自らの地域のことは地域で取り組む意識・姿勢」を醸成し、地域づくりを牽引する人材を育てる。
- ・多様な主体の活動・連携・協働を支えるインフラ整備や仕組みづくりなどによって、地域の豊かな資源を活用した個性的な地域づくりを推進する。

<これからの地域づくりの方向性>

○価値観、生活様式の多様化

★「生産・仕事・会社」から、「生活・趣味・家庭」へ地域づくりのキーワードは、「産業・企業」から「生活・暮らし」へ

★「ものの豊かさ」から、「心の豊かさ」へ
如何にして心の充実した暮らしを実現するか？



○「住んで良し、訪れて良し」の地域づくり（住観調和）

★自分たちが気持ちよく生活できる場所こそ、訪れる人にとっても魅力的



○豊かさの原点

★いかにして心の充実した暮らしを実現するか？

⇒安心して日々を過ごせること、自分の土地を愛し、誇りに思えること



○個性と特色のある地域づくり

★全国一律・画一的な整備から、多様な主体の参加と連携による地域の自発的な取り組みへ

4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

＜元気な取り組み事例にみる活性化の成功要因、課題・要望等＞

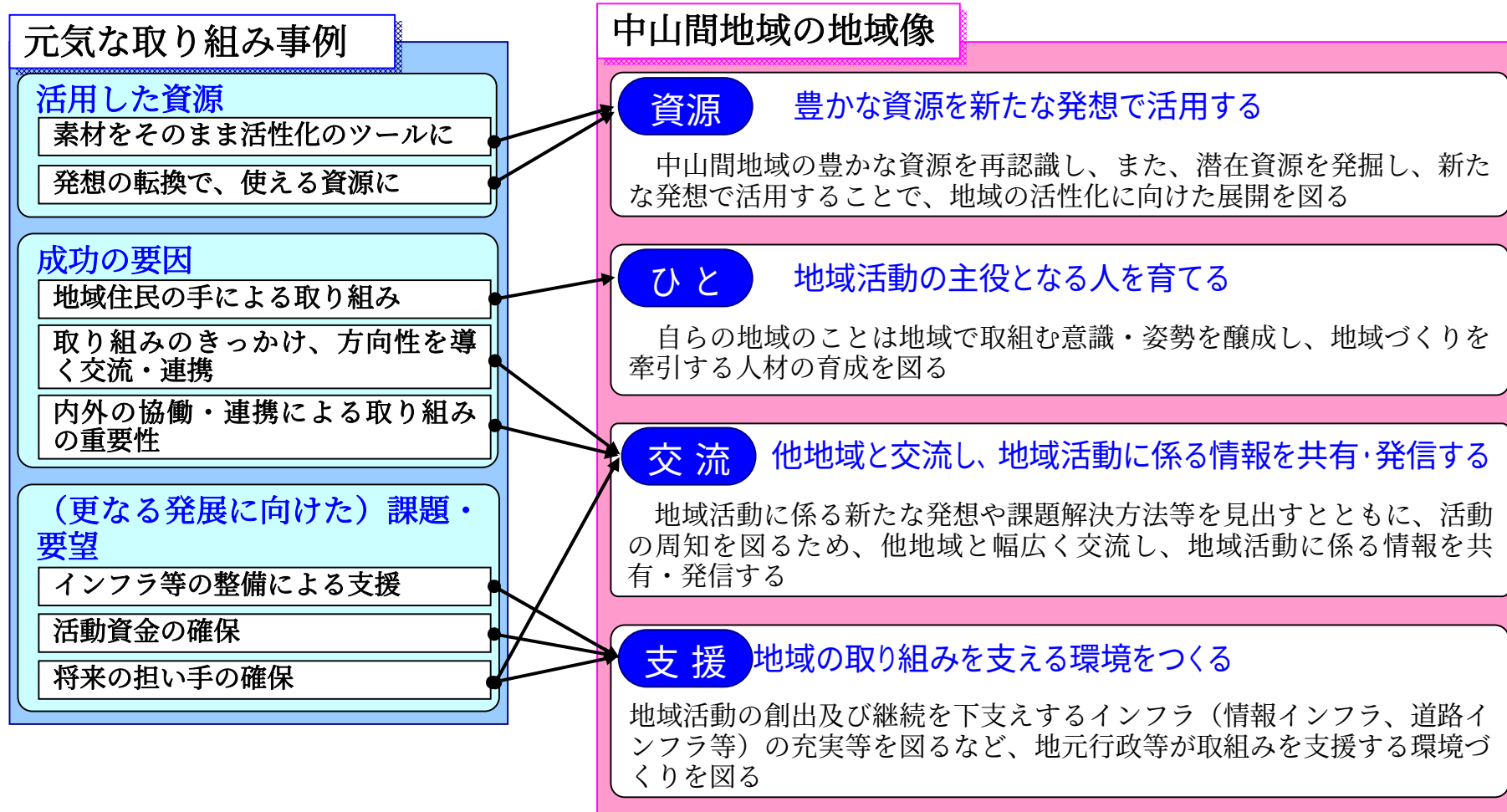
元気な取り組み事例	活用した資源	成功の要因	(更なる発展に向けた) 課題・要望
砂浜美術館構想：黒潮町	素材をそのまま活用（砂浜）	・人材（県外からの事務局長となる若い有望な人材、住民・職員によるボランティア、優れたデザイナーの存在） ・他団体等の協力（行政からの委託、県外企業からの人的・資金的協力） ・きっかけとなるイベント（全国松原サミット） ・その他（NPO法人化による社会的地位の確立、町長からの支持）	・人材（会員の増加） ・資金（財源（収入）の確保） ・インフラ等（道路整備の推進、情報通信網の充実） ・連携（行政とのパートナーシップ）
夜桜音楽会：大月町 （山桜（アツギリサクラ）のライトアップとコンサート）	素材をそのまま活用（山桜）	・きっかけとなるイベント（風景を活かした地域作りフォーラム） ・他団体等の協力（活動費助成、自治組織の協力）	・資金（財源（収入）の確保） ・インフラ等（広域交通網の整備） ・連携（他の活動との交流・連携の必要性）
彩事業：上勝町	発想の転換で活用（木の葉等を妻物に）	・人材（農家の継続的努力、町外の人材からの視点・発想の活用） ・インフラ等（防災無線の活用）	・人材（高齢化への対応、人材の確保）
ふれあいの里さかもと：勝浦町 （廃校の小学校を拠点とするグリーンツーリズム）	素材をそのまま活用（自然資源）	・人材（50人以上のボランティア；先生役は、近所のおじさんやおばさんたち） ・インフラ等（小学校廃校の活用、インターネットによるPR）	・人材（高齢化への対応、人材の確保） ・インフラ（景観に配慮した基盤整備）
ゆずビジネス：馬路村	発想の転換で活用（ゆずを様々なブランド品に）	・人材（リーダーシップとネットワークを持った地域リーダーの存在） ・他団体等の協力（補助金） ・インフラ等（インターネットによる販売） ・その他（宅配業者との契約による輸送効率化）	・人材（高齢化への対応、人材の確保） ・インフラ（道路整備の推進、情報通信網の充実） ・その他（原材料（ゆず）の確保）
鷹取キムチ：梶原町 （韓国の大学との交流をきっかけにした私の製造販売）	その他（交流がきっかけの取り組み）	・人材（積極的なリーダーの存在、女性を中心とする実行組織等） ・他団体等の協力（自治組織、家庭の協力）	・人材（高齢化への対応、人材の確保） ・インフラ等（道路整備の推進、情報通信網の充実） ・連携（行政、教育機関、企業等との連携強化）

資料) 元気な取り組みアンケート(四国地方整備局)

4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

<望まれる地域像>



4. 望まれる地域構造の考え方

＜四国の「元気活動」とそれを継続・発展させていくための基盤整備へのニーズ＞

・元気な取り組み・活動を行っている多くの中山間地域等の町村では、活動を継続・発展させていくために、交流人口の拡大に資する道路や情報・通信に係る基盤整備が必要だと捉えている。

【梶原町】～鷹取キムチ 等～

・韓国を始め地域外との「交流」をベースとした活動により地域振興を図ることが重要。
・時間力を縮めるための道路整備とPR用の通信基盤の整備は不可欠。

【上勝町】～彩事業～

・特になし

【勝浦町】～ふれあいの里さかもと～

・基盤整備の遅れが、人口減の大きな要因だが、グリーンツーリズム事業については都会と違う不便さも一つの魅力。

【馬路村】～ゆずビジネス～

・交流人口拡大を図ってほしい。
・高速通信網の整備や、安心して商品を届けられる道路整備が必要。

【黒潮町】～砂浜美術館構想～

・道路設備、通信設備の基盤整備は必須。
・デジタルデバインドが深刻。
・交流人口の拡大に、道路の未整備は大きな障害。

【大月町】～夜桜音楽会（コンサート）～

・高知市、松山市から高速道路を使っても気軽に花を見に来られる時間距離にない。
・高速道が早く延伸し、大きな都市からもっと近くなれば多くの集客が見込まれ、新たな観光産業が成り立つ。

	元気な取り組みアンケートにおいて、基盤整備に対するニーズのあった町村
	元気な取り組みアンケートにおいて、基盤整備に対するニーズのなかった町村

【用語の解説】

デジタルデバインド (digital divide)
パソコンやインターネットなどの情報技術を使いこなせる者と使いこなせない者の間に生じる、待遇や機会の格差。

＜その他の声＞

【橋原町 中越町長】

・道路と情報網を整備することで、庁内の集落を結んで福祉・経済の活動を支援すべき。

【安芸市の農家】

・道路整備により、農作物の傷みが軽減され、新鮮なまま出荷を行うことで、作物の価値を維持することができる。

資料) 元気な取り組みアンケート (四国地方整備局)

注) 元気な取り組みを行っている自治体の声

中山間地域等では、地域の様々な活動のニーズに対応することにより、道路と情報のインフラ整備が活かされる可能性が高い。

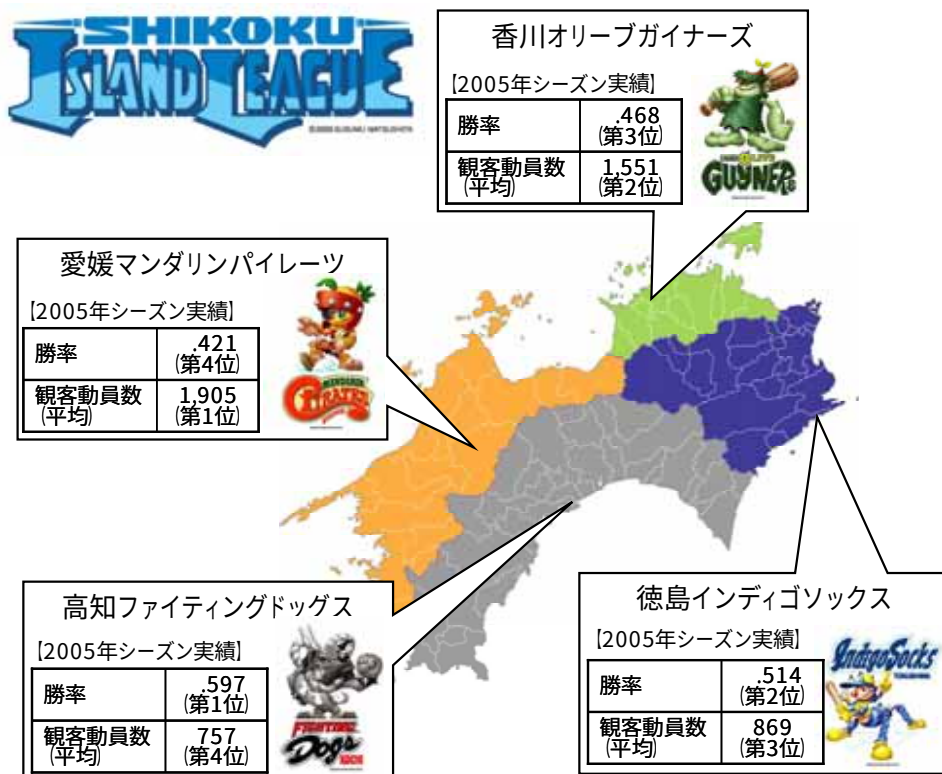
4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

③ - 1 都市相互の近さを活かした地域連携の強化

- ・隣接都市間における機能分担等による地域レベルでの機能強化を図る。
- ・都市圏相互の経済・産業面での結びつきを強化するとともに、アイランドリーグなどの新たな文化の創造による交流・連携を促進する。

<新たな文化による結びつき> (アイランドリーグ)



資料) 四国アイランドリーグ公式HP
球探・日本プロ野球史探訪倶楽部 HP

<「四国はひとつ」4県連携施策の取組み>

分野	平成19年度「四国はひとつ」4県連携施策
観光・PR・ イメージアップ	・いよし・遍路の共同PR ・四国観光シンポジウム開催 ・グリーン・ツーリズムのメッカとしての四国のPR ・国際観光の推進 ・“癒しの国・四国”交流・定住促進事業
文化・ スポーツ	・四国アイランドリーグ優秀選手表彰 ・発掘へんろ巡回展の開催 ・地域密着型スポーツの振興 ・「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産暫定リスト掲載に向けての調査等
環境・ 自然保護	・四国山の日推進事業・四国の森づくり連携促進事業 ・環境教育の合同事業 ・四国における循環型社会構築の検討 ・地球温暖化防止活動施策の共同研究
防災・救急	・四国4県による衛生環境研究所の連携 ・防災用資機材の共同整備 ・危機事象発生時の広域応援に関する検討
医療・福祉	・高齢者虐待防止四国共同研究会 ・看護師養成通信制受講の促進 ・育児支援サービスを実施する店舗・企業の登録・PR事業
産業振興	・四国農林水産物等輸出促進海外PR事業 ・四国4県「工業技術センター」の情報の一元化
消費者保護	・悪質商法被害防止広域ネットワーク
社会資本整備	・四国8の字ネットワークの整備と利用促進
連携総合	・県有施設等の広域連携に関する検討 ・四国4県道州制研究会

資料) 四県知事会資料

4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

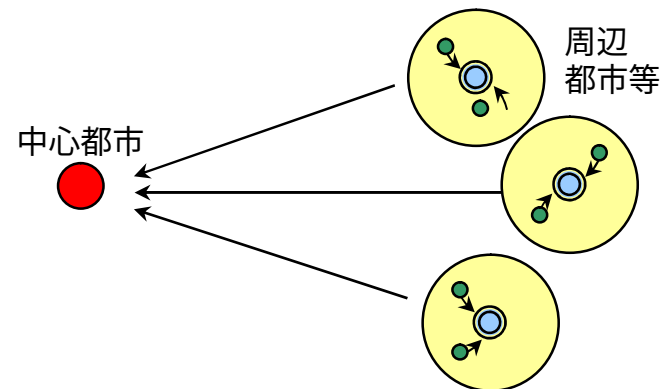
③-2 都市相互の近さを活かした地域連携の強化

- ・各種機能に係る他地域との連携、各々の協力や役割分担によって、サービス水準の向上を図る。

<地域連携による各種機能（公共サービス、医療、産業等）の高度化のイメージ>

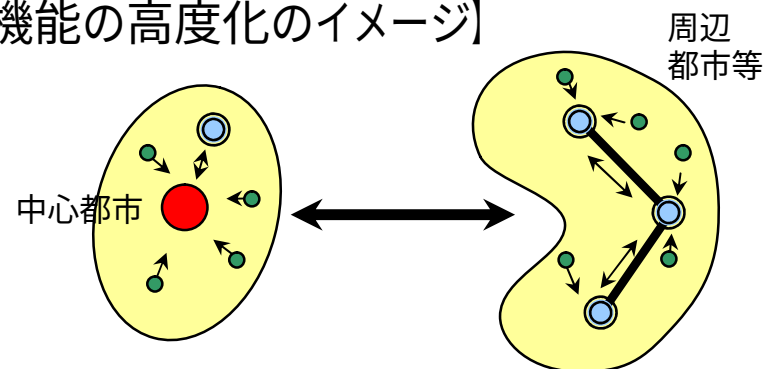
【現状】

中小的な機能を有する地域の住民が、高次の機能を享受するために、時間・費用をかけて中心都市へ向かう



【地域連携による各種機能の高度化のイメージ】

地域間の連携により、中小的な機能を有する地域が特色ある機能集積を図り、全体として高次の機能を発揮する



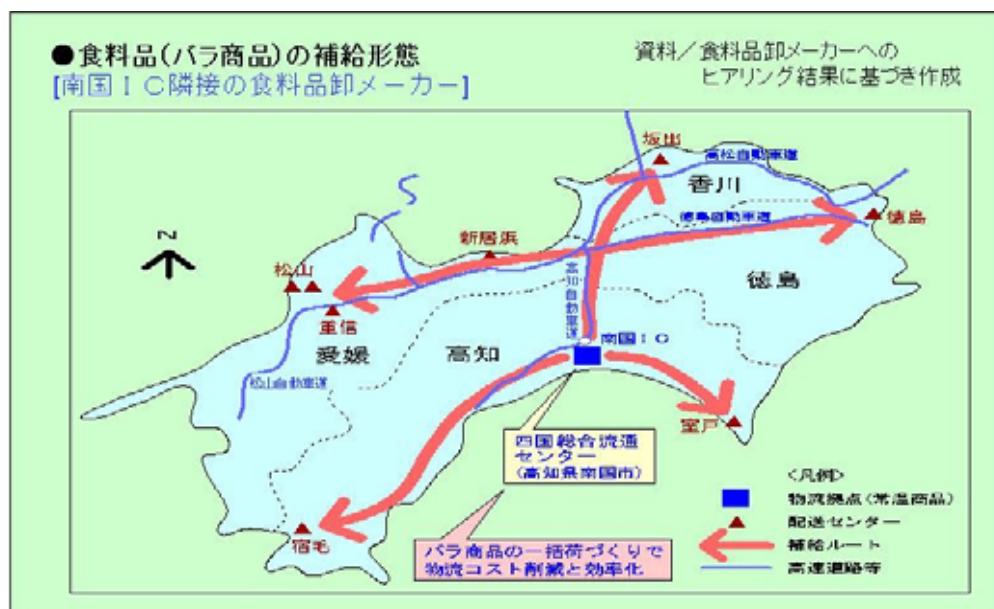
4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

③-3 都市相互の近さを活かした地域連携の強化

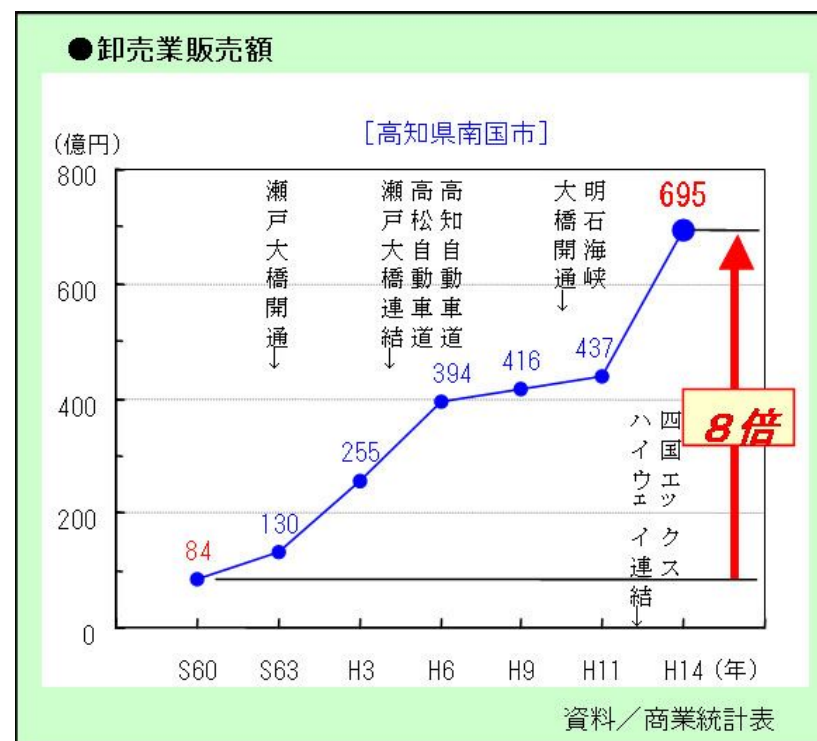
- ・物流拠点への連携強化により、経済活動の活性化を図る。

＜経済活動の結びつき＞



【事例】IC隣接地に流通センターが開設され、卸売業販売額が大幅に増加

- ・高知県の総合食料品卸メーカーは、南国IC隣接地に流通センターを開設
- ・少量注文の「バラ商品」を一括仕入れ・仕分け・荷づくりし、翌早朝までに毎日欠かさず4県内の配送拠点に補給
- ・IC周辺に各種卸売業が集積し、南国市の卸売販売額も8倍に急増



4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

③-4 都市相互の近さを活かした地域連携の強化

- ・企業等の連携により、経済活動の活性化を図る。

<経済活動の結びつき>

[事例] 北イタリア (カルピ) の繊維産業ネットワーク

分業構造、高付加価値化、アウトソーシングにより競争力の確保を図っている。

✓分業構造の確立

最終製品のマーケティングを担う販売企業と、その企業から外注を受けて、1つの工程に特化した作業を行う工程専門企業との分業構造からなる。

✓高付加価値化

- ・中級や中級以下の商品
→比較的上級層の商品に転換
- ・ファッショントレンドに柔軟に対応

✓アウトソーシング

企業構造:生産工程を企業外に出すことによる人員削減などの合理化

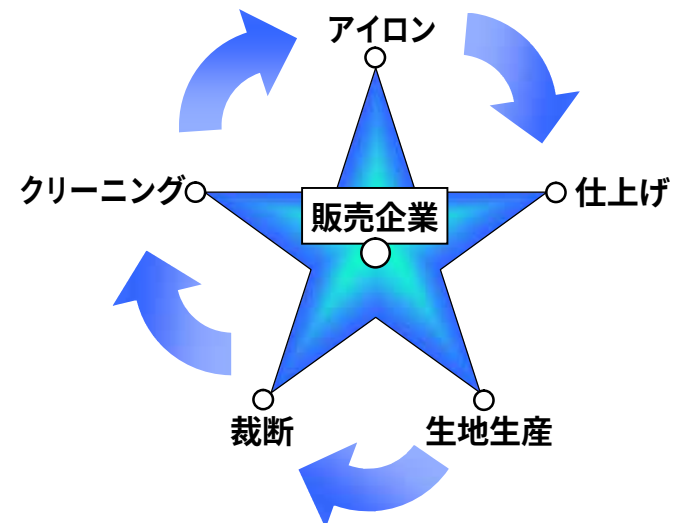


図 カルピにおける分業構造 (スター・コンセプト)

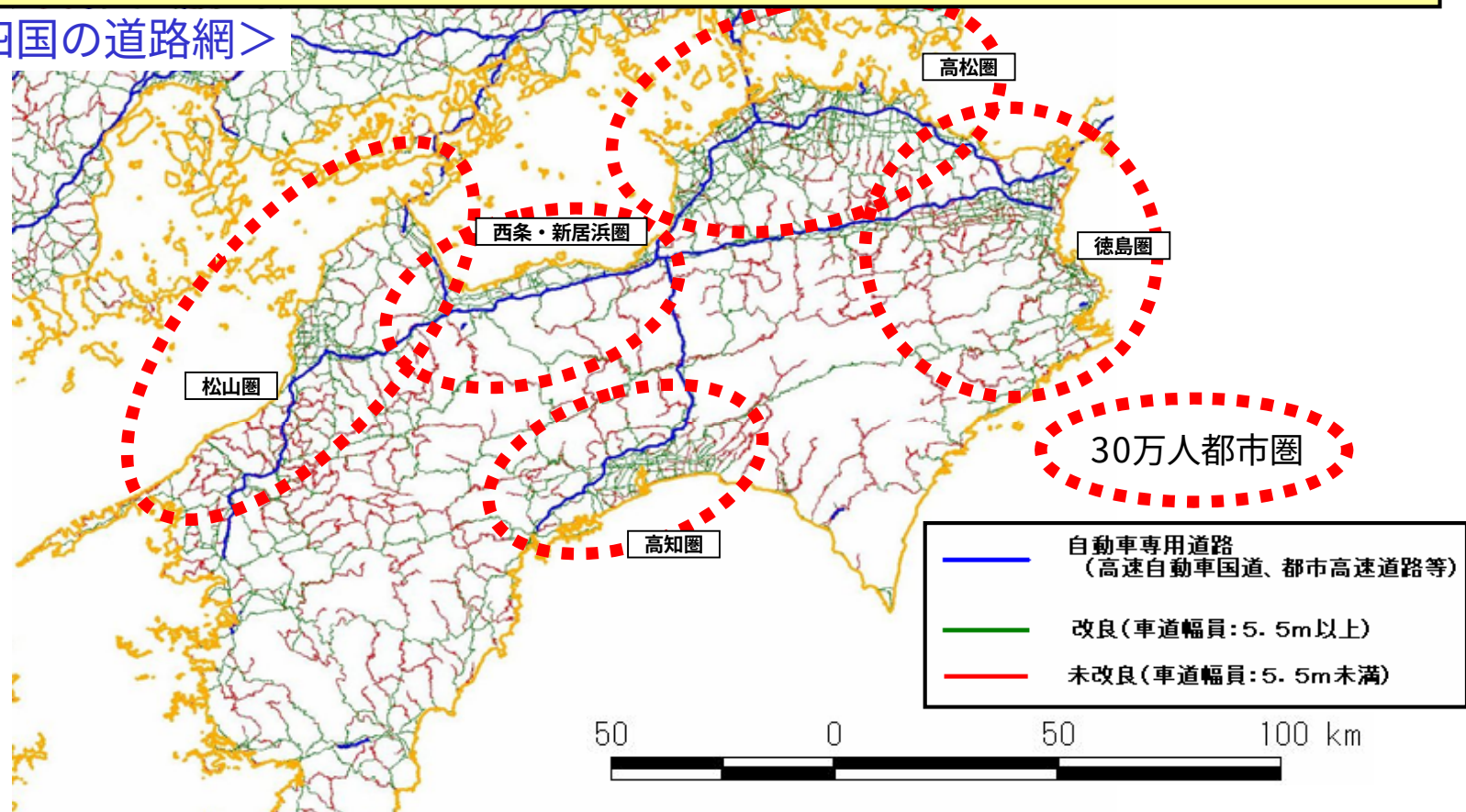
4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

④ - 1 5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

・5つの30万人都市圏と中山間地域の山村集落とを、高規格幹線道路や国県道等によって結ぶことにより、その交流・連携を促し、一体的な圏域としてのポテンシャルを高める。

<四国の道路網>



出典；四国地方整備局（道路整備状況図[県道以上]平成18年4月）

4. 望まれる地域構造の考え方

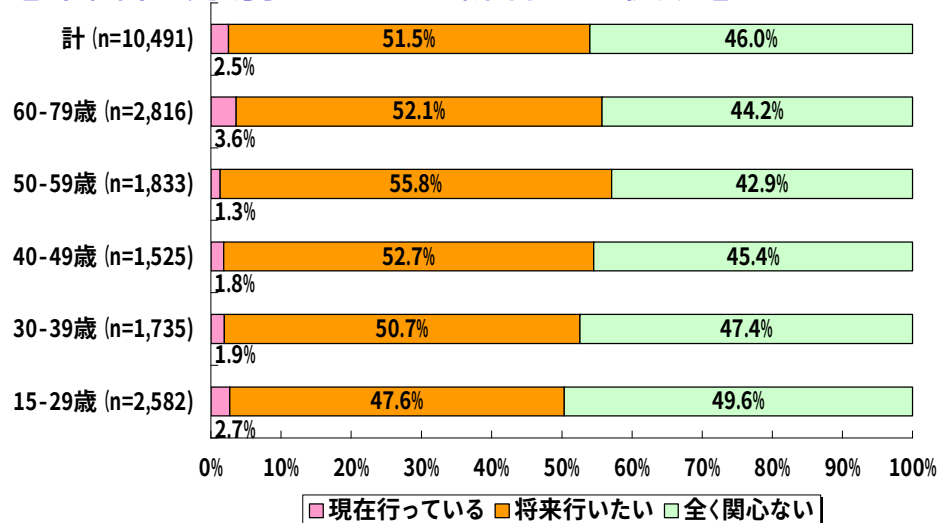
1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

④ - 2 5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

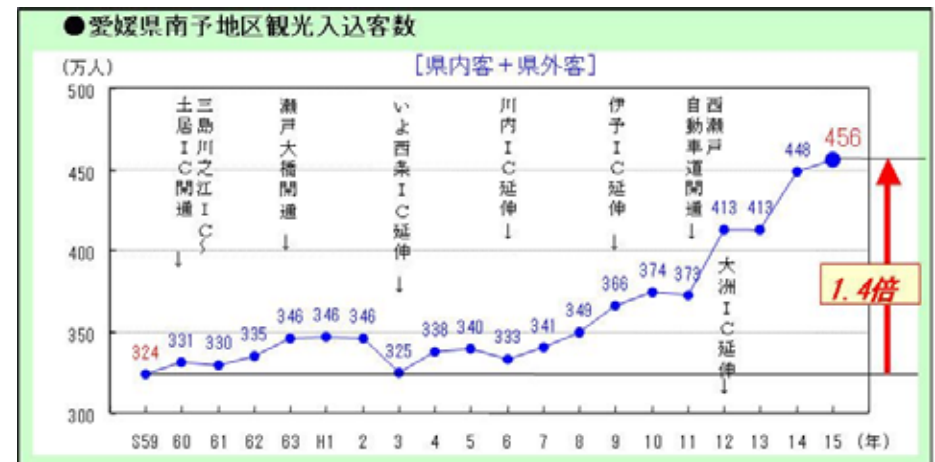
- ・都市と中山間地域の近さを活かした、機能分担と相互交流を推進する。
- ・団塊の世代などをターゲットとした定住促進、二地域居住（マルチハビテーション）や田舎暮らしなどの様々なライフスタイルニーズへの対応を図る。
- ・観光拠点への連携強化により、余暇活動の機会の充実を図る。

<「二地域居住」に対する都市住民のニーズ> <観光による余暇活動の結びつき>

【年齢区分別の二地域居住の状況】



出典) 「二地域居住」に対する都市住民アンケート
 (国土交通省国土計画局総合計画課:平成16年12月実施)
 注) 都市住民の定義:「人口30万人以上の都市」(2005年の15-79歳人口 約4,250万人)
 アンケート有効回答数:10,491人



【事例】南予地区の観光客が急増

松山自動車道の延伸整備により、愛媛県南予地区の観光入込客が1.4倍に増加

四国3県からの入込客も増加している (1.3倍)

4. 望まれる地域構造の考え方

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

⑤ - 1 安全・安心の確保

- ・東南海・南海地震や台風・豪雨等による津波、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化を図る。
- ・災害時の道路ネットワークの強化を図る。
- ・防災訓練やイベントを開催し、防災に関する知識の普及・啓発を図る。

<大規模津波防災総合訓練の取り組み>



▲関係機関が保有する情報を拠点へ集約する訓練



▲トラック協会等と連携した緊急物資の搬入訓練

<防災関連機関の連携>



▲四国防災トップセミナー

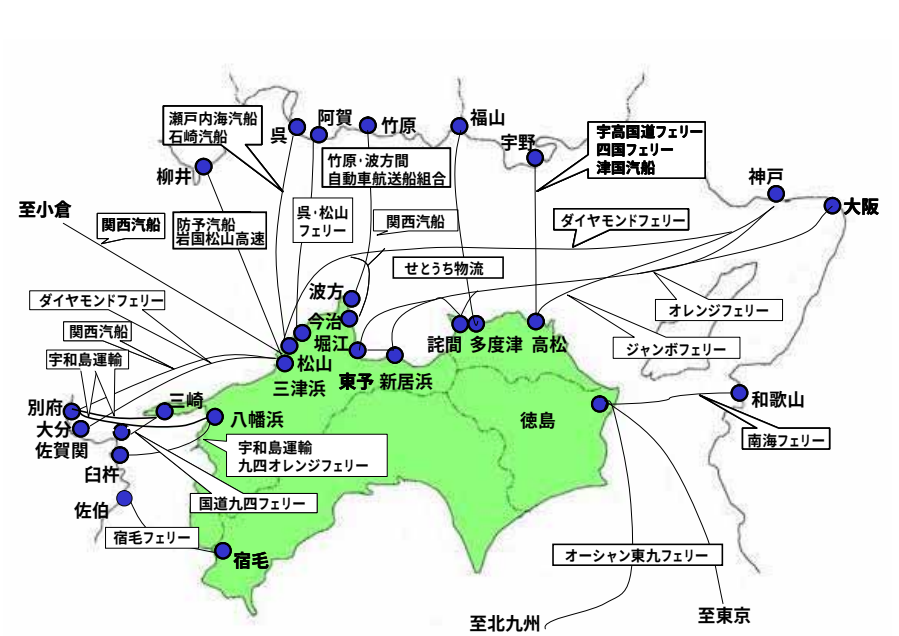
4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

① - 1環瀬戸内圏との連携強化

- ・歴史的、生活・産業などにおける連携を強化する。
- ・本四架橋を活かした連携強化を図る。
- ・多島美の景観魅力の維持や水環境の保全、環瀬戸内圏における観光地間ネットワーク強化など、環瀬戸内圏の交流を活用した地域活性化を図る。

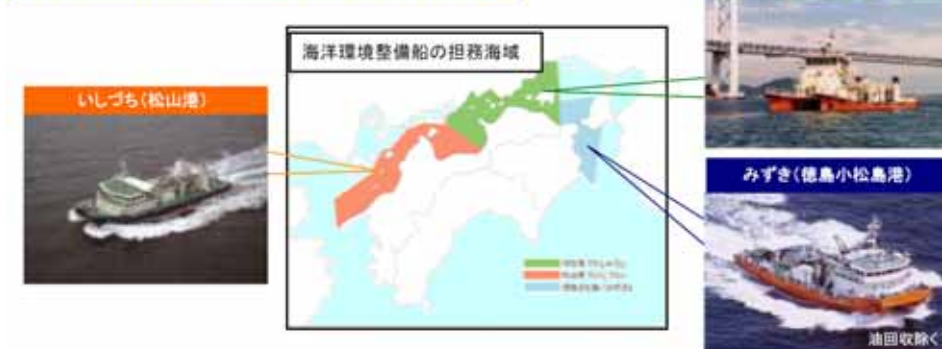
＜環瀬戸内を中心としたフェリー航路＞



＜航路の安全確保・海域環境の保全＞

海面清掃船による海洋環境整備事業

船舶航行の安全を確保するとともに、海域環境の保全を図るため、瀬戸内海の海面に浮遊するゴミや油の回収を実施。



出典:四 国 の 港 湾・空 港 ビ ジ ョ ン

4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

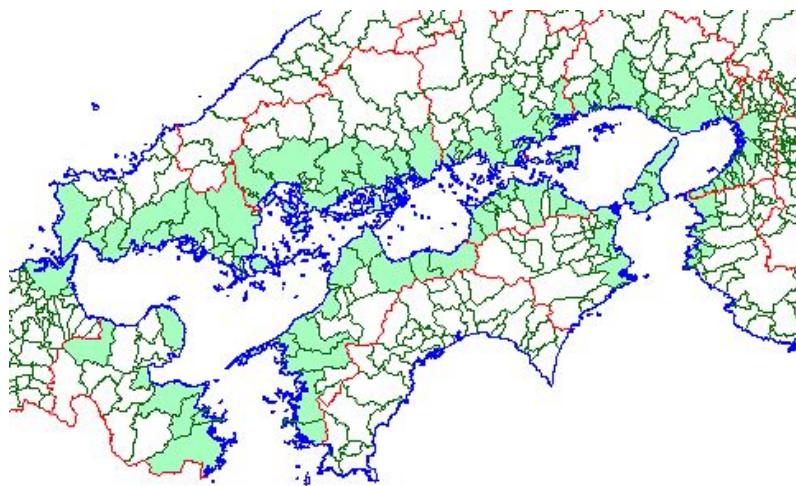
①-2 環瀬戸内圏との連携強化

・自治体レベルでの多様な連携・交流活動により、地域活性化を図る。

＜自治体等のネットワーク＞

瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会

瀬戸内海沿岸の107の市町村と11府県の会員に加え、協議会活動をサポートする国土交通省が、あらゆる境を越えて一堂に集まり、様々な交流・連携活動を展開



会員市町村（平成18年11月1日現在）

活動内容（平成18年度の活動を紹介）

魅力検討活動：優れた景観や観光資源のPR、沿岸地域の交流人口増加等を実現するために、アンケート調査の実施

環境事業委員会：瀬戸内海沿岸の美化活動「リフレッシュ瀬戸内」の実施。「海の健康診断」（ゴミの組成調査）事業の実施。

情報発信委員会：瀬戸内の魅力を認識してもらう情報提供を目標に、ホームページの運営



出典：瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会HP

4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

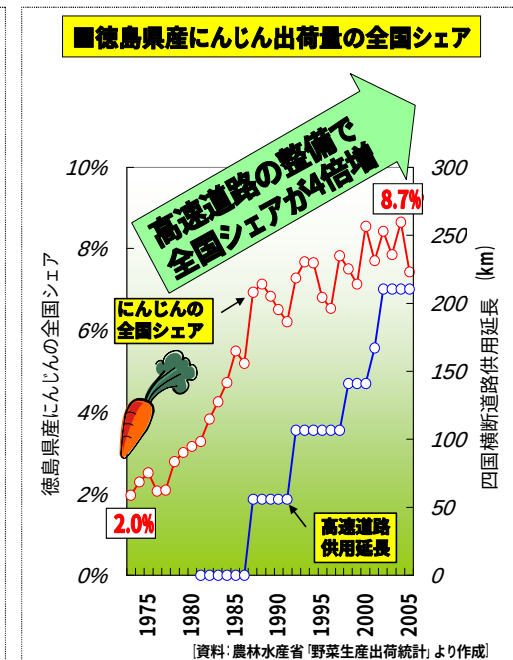
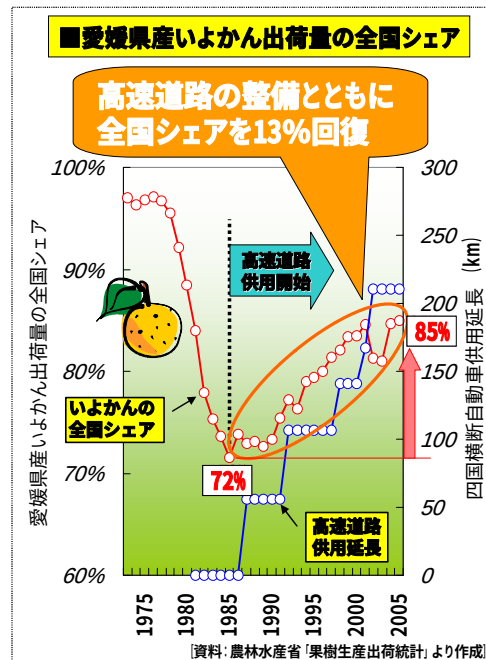
②-1 全国との交流促進

- ・全国に向けた交流・連携を支える、空港や重要港湾、本四連絡橋等のゲートウェイ機能の強化と相互のアクセス性向上を図る。
- ・地域資源を活かした四国ブランドの全国展開を促進する。

< 4 空港と13の重要港湾の存在 >



< 高速道路整備による四国ブランド農産品の全国シェア拡大 >



4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

②-2 全国との交流促進

- ・地域資源を活かした四国ブランドの全国展開を促進する。

【事例】 ゆずビジネス (徳島県馬路村)

- ・ 地元の特産であるゆずを用いた様々な加工品開発と、全国規模での販売展開で売上げを伸ばす。

✓新市場での積極的なマーケティング

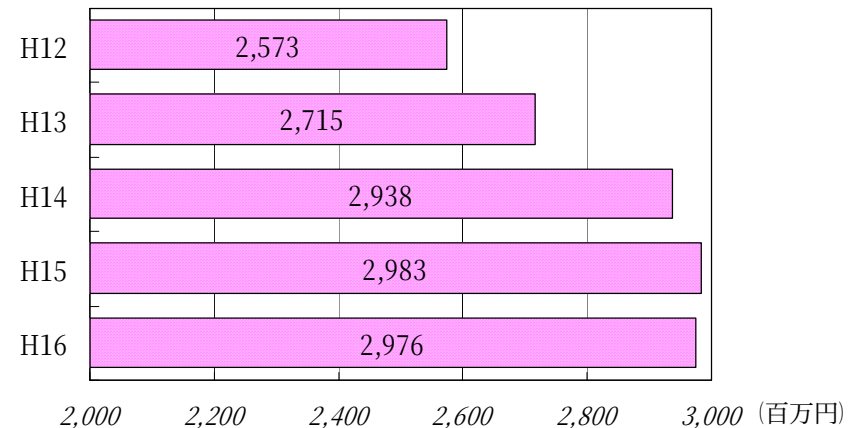
新しい市場を求めて関西や関東の百貨店催事に参加。販売促進へ。

✓直接販売・産地直送

大手宅配業者の参入により、村からの産地直送が可能。

✓ローカル色を生かしたブランド化

ゆずの加工品を商品化。商品企画・デザインは外部の企業に委託。商品イメージを『ローカル色』とした。



JA馬路村の売り上げ推移

出典：農林水産省



ゆずビジネスの商品の一例

4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

②-3 全国との交流促進

- ・地域資源を活かした四国ブランドの全国展開を促進する。

【事例】スローフード

- ・スローフードは1986年に北イタリアの小さな町「ブラ」で誕生した世界規模の運動

＜運動の目的＞

- ・バラエティ豊かな地域の食を再発見する。
- ・楽しみながら、人が豊かに、そして平和に生きていくうえで欠かすことのできない「食の喜び」を取り戻す。

＜大きな3つの方針＞

- ①昔からある食文化を守る
- ②昔からある価値ある野菜、豆類、穀類、動物や食品を指定
- ③「味覚」の教育を行う

活動の例

博覧会等の開催
さまざまな食材や加工食品の展示・試食や各種催し物が行い、情報交換の場ともなる世界規模での博覧会の開催等。



食育と食科学大学
試食のノウハウや食品についての知識を消費者への提供や児童教育である「食育」プログラムの推進、持続的な農業・畜産の担い手や調理人など、さまざまな分野でスローな食の専門家を養成する。



味の箱舟(アルカ)

在来の野菜や穀物等、世界的に見ても希少で、地域活性化につながるものを認定。ブランド化して、各種プロモーションを通じて生産・販売の支援を実施。



ロゴマーク

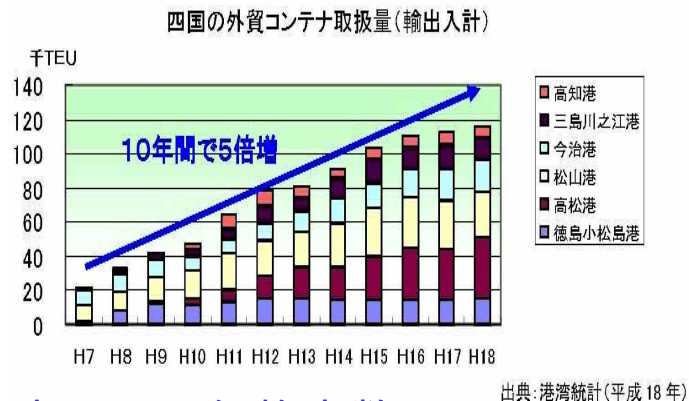
4. 望まれる地域構造の考え方

2) 四国外との活発な交流を促す

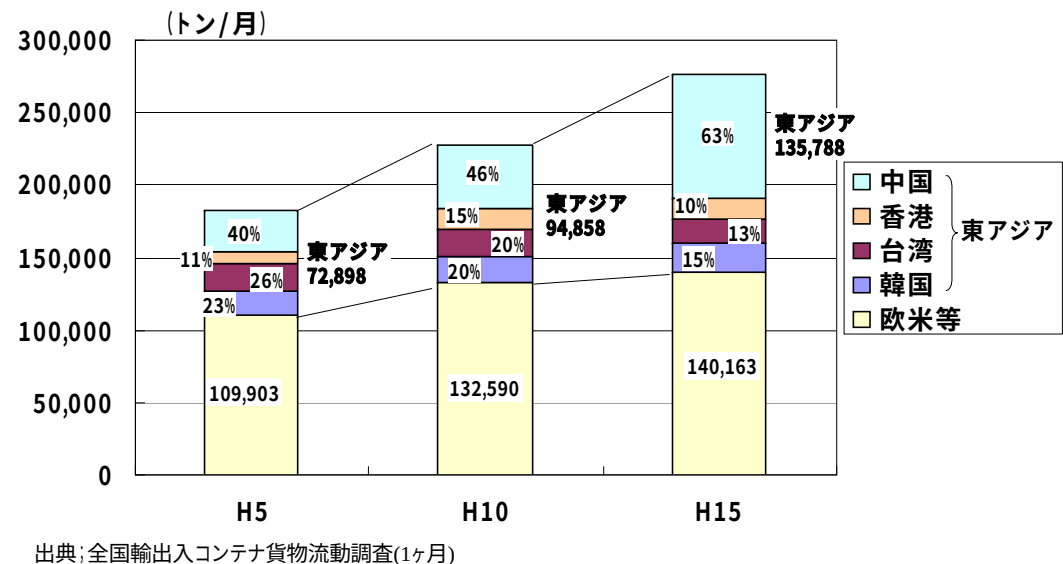
③東アジア、世界との交流促進

- ・4つの空港と13の重要港湾におけるゲートウェイ機能を強化し、世界との交流を促進する。
- ・特に、近年、人・モノの交流の高まりの著しい東アジアとの貿易・交流の拡大を重点的に図る。

<外資コンテナの取扱量と東アジア向け貨物>



<東アジア行旅客数>



四国の生産消費外資コンテナ貨物推移

5.WG会議の検討結果

< 四国の特徴 >

- 1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ
- 2) 美しい自然と農漁村など人々の営み
- 3) 都市と田舎の近さ
- 4) 独自の歴史、文化の存在 等

< 四国の課題 >

- 1) 高度集積(100万都市)の不在
- 2) 人口減少と高齢化の進展
- 3) 厳しい自然環境
- 4) 地域活力の衰退
- 5) 四国内の結びつきの弱さ 等

< 四国各地域の特徴 >

- 1) 5つの都市圏(30万都市圏)とその他の中山間地域
- 2) 個性的な3つの地域

①瀬戸内エリア

4つの都市圏(30万都市圏;徳島～高松～西条・新居浜～松山)が連続して存在。
都市集積、産業集積が高く、ストックを活かした競争力向上を図る

②山間部エリア

急峻な地形により小規模な集落が存在。
集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る

③南四国エリア

【高知圏】インフラ整備等の推進と、それを最大限に活かした地域活力の向上を図る。
【半島部】地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る。

四国の5つの都市圏と中山間地域の交流・連携強化のためには、拠点強化とネットワーク形成の相乗効果を生む地域構造の形成が必要

四国の少子・高齢化、人口減少傾向等を踏まえ、四国の個性を活かしつつ、四国の交流人口を増加させる多様な交流促進が必要

< 望まれる地域構造の考え方 >

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

- ①文化的、歴史的な一体性の確保
- ②多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進
- ③都市相互の近さを活かした地域連携の強化
- ④5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化
- ⑤安全・安心の確保

2) 四国外との活発な交流を促す

- ①環瀬戸内圏との連携強化
- ②全国との交流促進
- ③東アジア、世界との交流促進

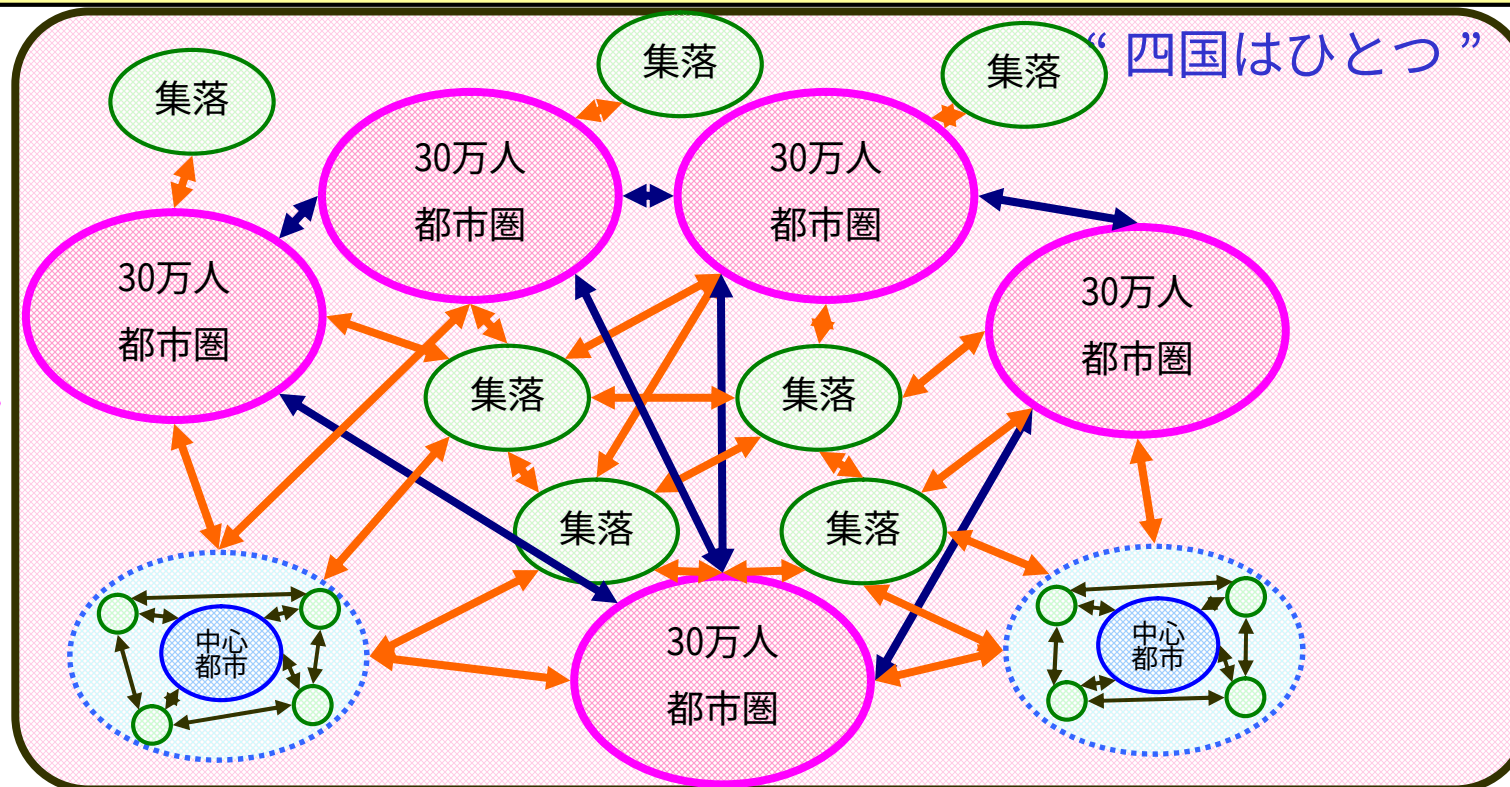
「コンパクト・リージョン・四国」の形成

5.WG会議の検討結果

「コンパクト・リージョン・四国」の形成

- ・四国は、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャル向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる。
- ・このため、歴史的・文化的なつながりやネットワークを形成し、地域間の交流・連携の強化を図ることにより、高度集積のメリットを享受できないというデメリットを補いながら、ひとつの四国として小さいながらも、中身の充実した地域、すなわち『四国はひとつ』（コンパクト・リージョン・四国）の形成を図る。

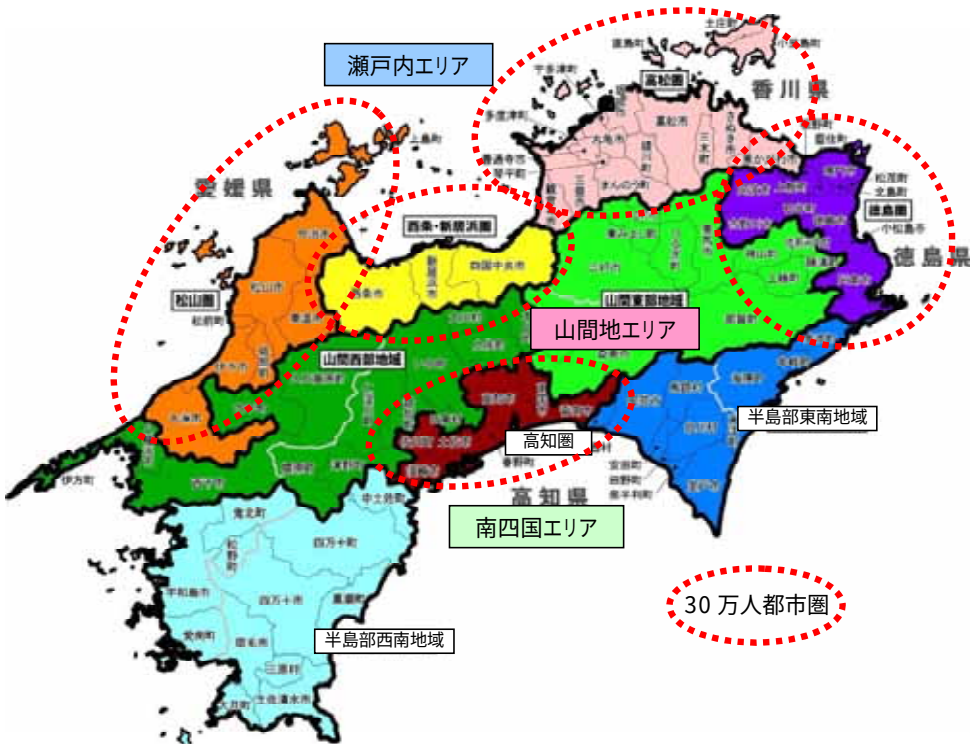
東アジア・世界



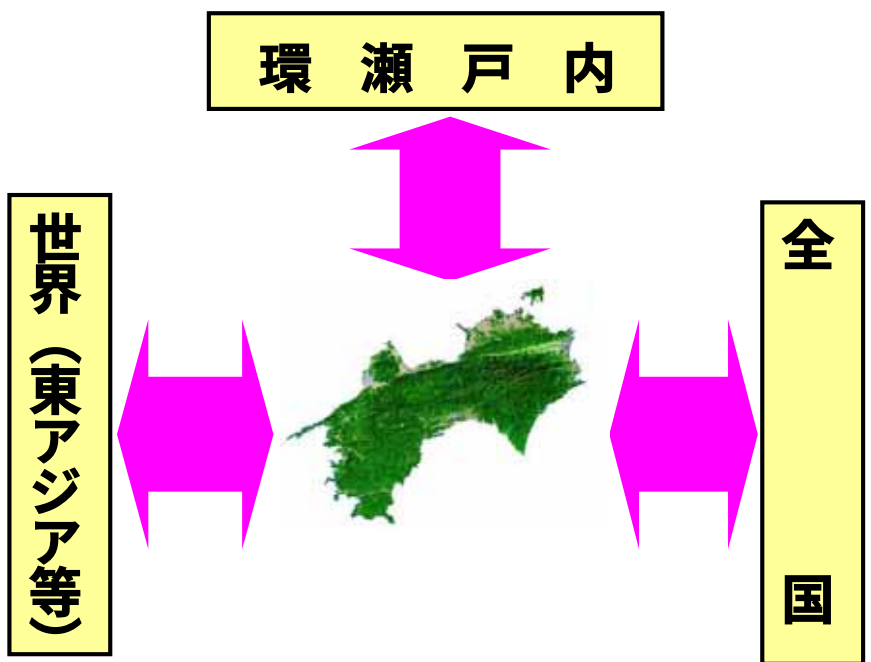
環瀬戸内・全国

新四国創造研究会における提言に向けた議論のポイント

個性・特性を活かした地域の形成



四国外との交流



①四国内の様々な連携・交流による四国の一体化

- <議論のポイント>
- 四国の文化的、歴史的な一体性を活かして、どのように連携すればよいのか？
 - 地域レベルで、多様な主体が、どのように連携・協働すればよいのか？
 - 都市間で、どのように連携強化を図ればよいのか？
 - 都市と中山間地域の相互活性化のために、どのように連携強化を図ればよいのか？
 - 安心・安全を高めるためにどうすればよいのか？

②四国外との活発な交流の促進

- <議論のポイント>
- 四国の活力を高めていくために、どこに地域に目を向けていくべきか？
⇒ 環瀬戸内圏、全国、世界(東アジア等)
 - 四国外との活発な交流(生活、産業、文化等)を促進していくために、何をしていかなければならないか？

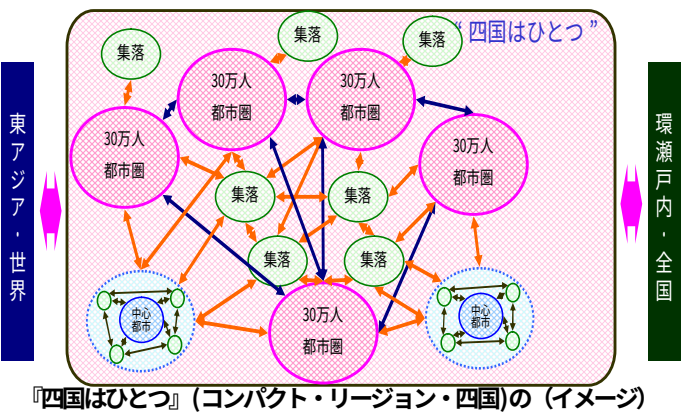
③四国における国土形成のコンセプト；『四国はひとつ』(コンパクト・リージョン・四国)の形成

『四国はひとつ』(コンパクトリージョン・四国)の形成とは、

- ・ 四国は、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャルの向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる。
- ・ このため、歴史的・文化的なつながりやネットワークを形成し、地域間の交流・連携の強化を図ることにより、高度集積のメリットを享受できないというデメリットを補いながら、ひとつの四国として小さいながらも、中身の充実した地域、すなわち『四国はひとつ』(コンパクト・リージョン・四国)の形成を図ることを意味する。

<議論のポイント>

- 四国の将来における基本理念を、『四国はひとつ』
(コンパクト・リージョン・四国)の形成とすることはどうか？
- 理念実現のために、今後四国は何を行っていくべきか？
- 理念実現において特に早急に取り組むべき課題はなにか？



＜四国の各地域における強み・弱み＞

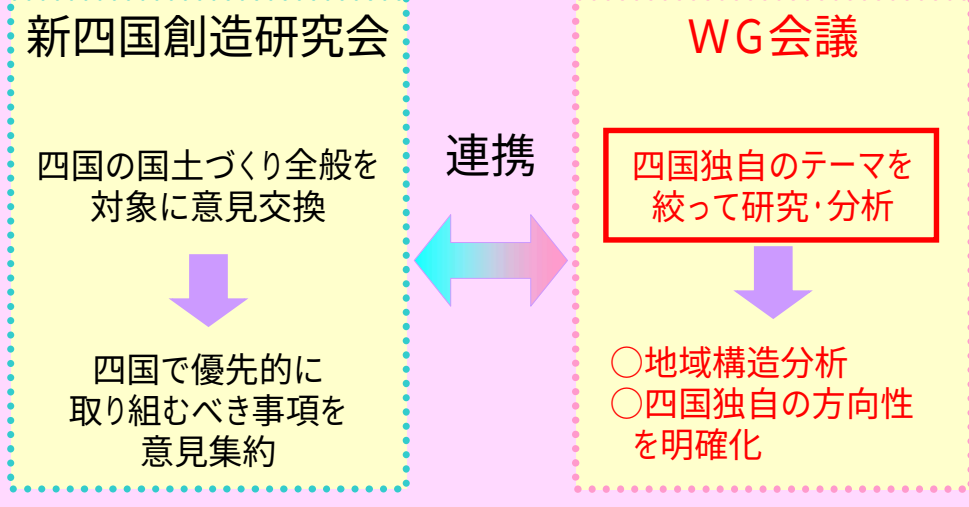
赤文字：内向き（四国内）の内容 青文字：外向き（対四国外）

		生活		産業		文化	
		強み	弱み	強み	弱み	強み	弱み
瀬戸内	松山圏	・ 30 万人都市圏のコンパクトな利便性 ・ 中山間地域との近さによる二地域居住の可能性	・ 渋滞等の顕在化 ・ 高度集積（100 万人都市）の不在 ・ 高松圏を中心とする交通事故の多発（人口当たり事故発生件数全国トップクラス） ・ 渇水被害の多発	・ 瀬戸内工業地域としての集積 ・ 国内、世界において高いシェアを獲得しているニッチ企業の集積 ・ 本四 3 架橋による本州との接続 ・ 多数の重要港湾の存在	・ 都市部における渋滞等による生産活動への支障 ・ 海外ゲートウェイ、四国外との物流インフラの弱さ ・ 渇水被害の多発	・ 四国アイランドリーグ等新たな文化 ・ 阿波おどり（徳島）等の特色ある祭り ・ うどん（香川）等の食文化 ・ 四国八十八箇所等の歴史資源ともてなし文化	・ 資源の知名度の低さ
	西条・新居浜圏						
	高松圏						
	徳島圏						
山間部		・ 地域活動に対する意識の高さ ・ 豊かな自然環境・美しい風景	・ 中心都市とのつながりの弱さ ・ 急峻で災害に弱い地形 ・ 全国に先駆けた人口減少・高齢化の進行 ・ 都市的機能の集積の低さ	・ 独自の地域産品の存在（上勝町はっぴビジネスなど）	・ 産業集積の低さ ・ 産業を支える基盤の弱さ	・ 清流・溪谷・山々等の自然資源 ・ 四国八十八箇所等の歴史資源ともてなし文化	・ アクセスの弱さなどのため、左記資源を活かせていない ・ 資源の知名度の低さ
南四国	高知圏	・ 高知圏のコンパクトな利便性 ・ 中山間地域との近さによる二地域居住の可能性	・ 交通事故や渋滞等の顕在化 ・ 渇水被害の多発 ・ 南海・東南海地震の発生に対する懸念	・ 国内、世界において高いシェアを獲得しているニッチ企業の集積 ・ 多数の重要港湾の存在	・ 都市部における渋滞等による生産活動への支障 ・ 産業集積の低さ ・ 海外ゲートウェイ、四国外との物流インフラの弱さ ・ 渇水被害の多発	・ 四国アイランドリーグ等新たな文化 ・ 四国八十八箇所等の歴史資源ともてなし文化	・ 資源の知名度の低さ
	半島部	・ 豊かな自然環境・美しい風景	・ 中心都市とのつながりの弱さ ・ 全国に先駆けた人口減少・高齢化の進行 ・ 都市的機能の集積の低さ ・ 南海・東南海地震の発生に対する懸念	・ 独自の地域産品の存在（馬路村ゆずビジネスなど） ・ 多数の重要港湾の存在	・ 産業集積の低さ ・ 産業を支える基盤の弱さ	・ 海岸等の自然資源 ・ 四国八十八箇所等の歴史資源ともてなし文化	・ アクセスの弱さなどのため、左記資源を活かせていない ・ 資源の知名度の低さ

1. WGにおける検討経緯等の整理

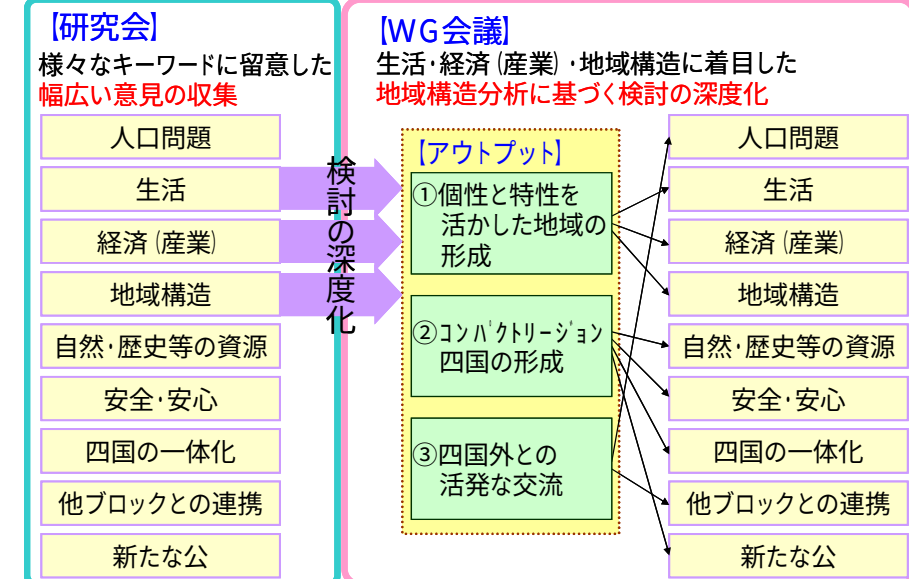
(1) 新四国創造研究会とWGの枠組み

<新四国創造研究会とWG会議の役割分担>



WGでは研究会で想定されるキーワードのうち、生活、経済（産業）に係る地域構造にテーマを絞って地域形成の方向性を明確化

<新四国創造研究会とWG会議における会議テーマの関係>



(2) WGにおける議論の流れ

【第1回～第3回】

～現状・事例・意識把握～

・生活、経済（産業）に係る地域構造分析に係る各種データや事例等を収集

生活

・ライフスタイルアンケート
定住意向
諸活動の実態
諸活動への意識

等

・四国の現状
四県・市町村データ
・四国の元気事例

等

・イタリアの産業構造

・スローフードの取組

・日本一・世界一企業アンケート

等

経済（産業）

【第4回】

～地域構造分析に基づく個性と特性を活かした地域の形成に係る検討～

・各種データ等を踏まえ、四国の地域構造に係る分析を実施

【エリア設定】

“生活”と“経済（産業）”の視点からみたエリア設定
（四国における活動圏域状況や集積等に係る現状を踏まえた設定）

【STEP1.地域構造分析（現状分析）】

エリア設定を踏まえた“生活”と“経済（産業）”に係る現状分析

【STEP2.望まれる地域構造強化の方向性の検討】

地域ごとのモデル的なビジョン・あり方の検討

【STEP3.具体方策の検討】

ビジョンの確立に向けて導入が望まれる方策の検討

【第5回】

～WG会議の検討結果のまとめ～

・第4回会議までの検討結果を踏まえ、WG会議としての検討結果を整理

WGにおける検討経緯等の整理

・新四国創造研究会とWGの枠組み
・WGにおける議論の流れ
・地域構造分析に基づく検討の進め方

《《アウトプット》》

個性と特性を活かした地域の形成

望まれる地域構造の考え方

～「コンパクト・リージョン・四国」の形成～

コンパクトな地域構造を活かした四国の一体化

四国外との活発な交流の促進

研究会への報告

2. 四国各地域の特徴

＜四国の特徴＞

1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ

- ・瀬戸内エリアと南四国エリアにおいて、個性的な5つの30万人都市圏が存在する。
- ・高速道路網により、県庁所在都市間の交流が2時間程度で可能となっている。

2) 美しい自然と農漁村など人々の営み

- ・中山間地域の集落における美しい景観や歴史・文化の存在し、日本の原風景が残されている。
- ・一方険しい四国山地が存在し、急峻な地域に暮らす人が半数以上。

3) 都市の田舎の近さ

- ・中山間地域の集落から、概ね2時間以内で県庁所在都市まで交流が可能となっている。(ただし、南四国の半島部からは遠くなっている)

4) 独自の歴史、文化の存在

- ・お遍路やお接待文化等の四国共通の歴史・文化に加え、ボランティア活動も盛んである。

＜四国の課題＞

1) 高度集積(100万人都市)の不在

- ・四国には、100万人都市が存在せず、高度集積のメリットを享受できない。

2) 人口減少と高齢化の進展

- ・全国に先駆けて人口減少、高齢化が急速に進展している。
- ・内陸部を中心に、消滅集落や秘境集落などの限界集落が存在している。

3) 厳しい自然環境

- ・台風による土砂災害などの自然災害や渇水被害が発生しやすい。
- ・東南海地震に対する不安がある。

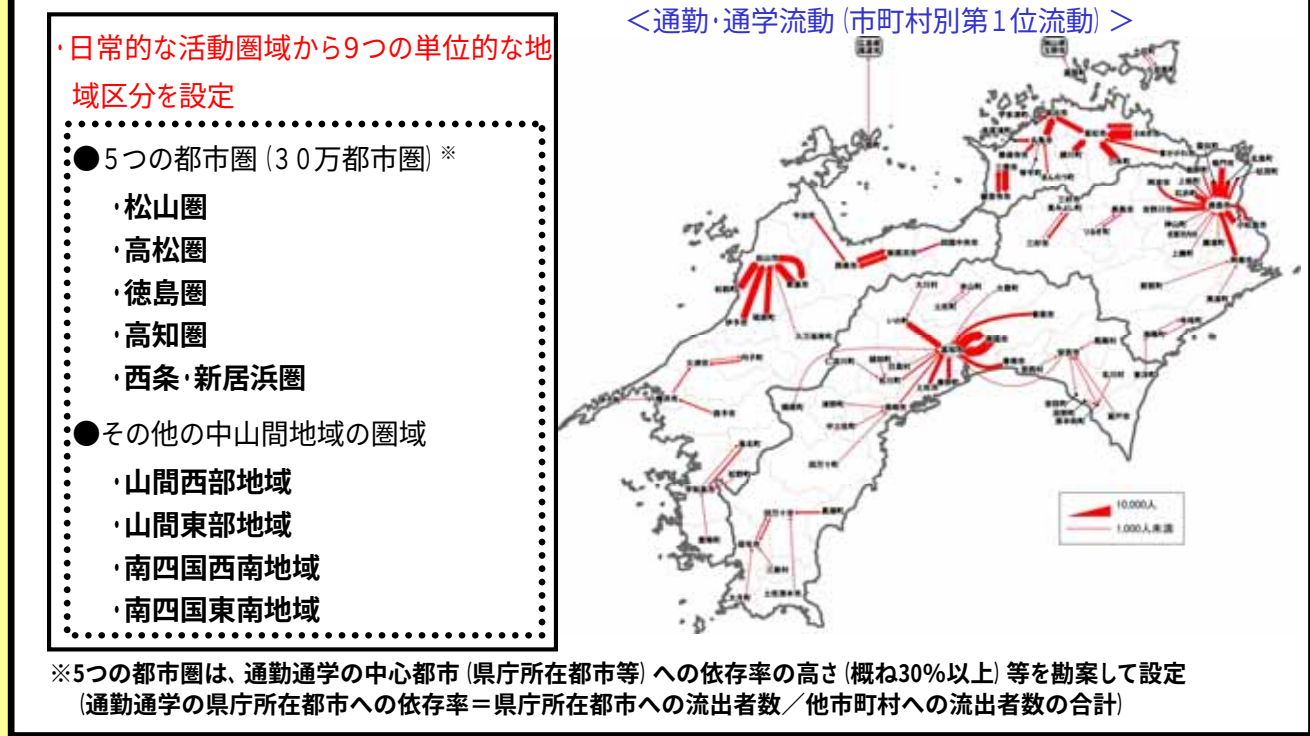
4) 地域活力の低下

- ・就業者の減少や後継者不足など、第一次産業を取りまく状況は厳しい。
- ・工業などの好調な瀬戸内側と集積の少ない南四国との地域格差が拡大。

5) 四国内の結びつきの弱さ

- ・旅客流動は県内が9割以上を占め、四国内県間よりも四国外流動が多い。
- ・貨物流動についても、四国内県間よりも四国外流動が多い。

1) 5つの都市圏(30万都市圏)とその他の中山間地域



2) 個性的な3つの地域

①瀬戸内エリア

4つの都市圏(30万都市圏)が連続して存在。都市集積、産業集積が高く、ストックを活かした競争力向上が求められるエリア

②山間部エリア

急峻な地形により小規模な集落が存在。集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア

③南四国エリア

高知圏と半島部が存在。高知圏は、インフラ整備等の推進と、それを活かした地域活力の向上が求められるエリア。半島部は、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア

＜エリア設定結果＞



3. 個性と特性を活かした地域の形成

(1) 瀬戸内エリア

- ・本エリアにおいては、徳島～高松～松山という3つの県庁所在都市が存在するとともに、高速道路等のインフラが整備され、これらを中心とする産業集積（2次、3次産業）が高く、都市化が進展している。
- ・また、国内、世界において高いシェアを獲得しているニッチ*企業が集積するなど、企業レベルの創意工夫による産業の発展が図られている。
- ・このため、都市化の進展に伴う交通事故や渋滞、渇水被害の多発等の問題に対応しつつ、既存ストックを活用した、四国を代表する集積エリアとしての競争力向上を図ることが必要である。

ニッチ (niche) : 「広く一般に受け入れられるものではなく、特定の用途や目的に特化したもの」という意味で使われる。特定の用途に特化し、逆に広く一般的な用途では利用できないような製品を指して「ニッチな製品」などと呼ぶ。

四国内におけるニッチ型企业（例）
：日プラ株式会社（香川）：水族館用大型アクリルパネルの生産世界一
：クラレ西条株式会社（愛媛）：液晶偏光用ビニロンフィルムの生産世界一

〔生活〕

〔地域構造強化の方向性〕

- ・中心市街地におけるコンパクトな範囲での都市機能の充実・強化を図るとともに、顕在化する交通渋滞や事故、環境の悪化、渇水等の課題を解消し、高質な都市サービスを提供する中心市街地と周辺の市街地との機能分担・連携を高め、圏域全体としての利便性や快適性の相乗的向上を図る

〔四国の独自性を発揮するための地域戦略〕

～主要都市の多様な都市機能の集積を活かした定住魅力の創出～

- ・地域内の定住魅力を高めるため、圏域内に連担する県庁所在都市やその他中心都市におけるサービス機能を強化するとともに、地域の有する多様な資源を活用し、余暇活動の充実、地域活動の活発化を図る
- ・さらには、四国の誇るべき文化である「おもてなし文化」等の付加価値を外部に情報発信し、定住の場としての地域ブランドを創出する

STEP1. 現状分析

＜現状分析＞

- 人口集積の高さ
- 生活利便施設の集積
- 県庁所在都市等を中心とする生活圈の形成
- 交通渋滞、事故の発生
- 渇水被害の多発

＜ライフスタイルに係るニーズ分析＞

- 定住意向の相対的高さ
- 生活利便性の相対的高さ

STEP2. 望まれる地域構造強化の方向性の検討

多様な都市機能の集積を活かした生活利便性の向上

- 県庁所在都市や周辺都市における中心市街地の機能強化
- 市街地部の交通渋滞の緩和による都市内道路の円滑化
- 都市内の移動環境の充実
- 県庁所在都市と周辺都市、島嶼部及び山間部等との交流促進

瀬戸内海や島々等の景観と調和し、地域の居住魅力を高める都市の快適性の充実

- 中心市街地等の再生・魅力創出
- ・うるおいと緑の創出
- ・瀬戸内海や島々等の景観と調和した美しいまち並み景観の創出
- 安心して暮らせる居住環境の確保

周辺都市や山間部等からのニーズを支える都市的余暇サービスの充実

- 多様な都市機能の集積や地域資源等を活かした余暇機会の創出
- 周辺都市とのアクセス性の確保

STEP3. 具体方策の検討

様々な都市活動を支える道路ネットワークの強化

- ・コンパクトシティとしての施設等集積に応じた利便性向上、地域間交流の促進、観光地間のネットワーク強化、交通渋滞の緩和等に向けた幹線道路網の強化
- ・中心都市への広域的なアクセス強化や県間交流・ネットワーク化に資する高規格幹線道路網等の活用と強化
- ・道路交通の円滑化、自動車と公共交通の共存に資するTDMやモビリティマネジメント等の推進

周辺都市や山間部等の活動の受け皿となる中心都市機能の充実

- ・中心市街地での都市機能の充実
- ・バリアフリーの快適な公共空間の形成
- ・交通事故危険箇所の解消
- ・多発する渇水等への対応
- ・「おもてなし文化」や地域固有の歴史や祭り等を活かした付加価値の拡充と情報発信

市民生活を支える都市公共交通システムの充実

- ・地域住民の様々な市民生活を支え、地域の活性化に資する鉄道やバス、フェリー、旅客船のサービスの充実

地域の活性化を担う人材育成や活動の支援

- ・まちなかの再生、地域の文化や伝統の継承、その他環境や福祉等に係る市民活動を支える人材育成・活動支援の強化

〔経済（産業）〕

〔地域構造強化の方向性〕

- ・既存の産業集積を活かしつつ、四国の産業を牽引する圏域としての産業機能集積を強化する
- ・四国内外、東アジアをはじめとした国外との連携を深め、産業における競争力の向上を図る

〔四国の独自性を発揮するための地域戦略〕

～瀬戸内の産官学の集積を活かした地域に根付くものづくり風土を伸ばす仕組みづくり～

- ・様々な社会的ネットワーク（産官学連携、異業種分野間連携、環瀬戸内連携、大都市市場との連携等）の構築による、地域資源・人材資源・技術資源を融合したイノベーションを図るとともに、環瀬戸内や東アジア等の様々な連携・交流による、日本や世界のNO.1企業を育てる風土を支える仕組みを確立する

STEP1. 現状分析

＜現状分析＞

- 産業集積力の高さ
- 各地で特徴ある産業特性
- 四国内外とのつながりの弱さ
- 産業を支える基盤の弱さ

STEP2. 望まれる地域構造強化の方向性の検討

瀬戸内の産業集積を活かした四国内外との交流・連携の強化

- 四国外との交流・連携の強化
- ・四国と東アジア・世界との交流・連携の強化
- ・四国と全国との交流・連携の強化
- ・環瀬戸内圏における交流・連携の強化
- 四国内の交流・連携の強化

瀬戸内の産官学の集積を活かした技術・産業集積力の強化

- 産官学の技術交流の強化
- 産業に係る各種ネットワーク形成の支援
- 産業活動の安定化支援

STEP3. 具体方策の検討

瀬戸内港湾ゲートウェイ機能の強化

- ・外貿コンテナ貨物の増加や船舶の大型化等に対応した港湾機能の強化
- ・港湾機能強化と連携した企業誘致、航路誘致

徳島、高松、松山の3空港における空港ゲートウェイ機能の強化

- ・航空需要に対応した3空港の航空サービスの充実と連携

既存ストックを生かした道路ネットワークの強化

- ・既存の高規格幹線道路網等の活用と幹線道路網の強化
- ・本四3橋の活用促進
- ・四国内外、重要港湾、空港等を結ぶ高規格幹線道路網等の機能強化

地域居住に対する安心・安全の確保

- ・東南海・南海地震や台風・豪雨等による高潮、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化
- ・災害時の道路ネットワークの強化

産官学の技術交流支援

- ・大学・技術研究開発機関等を活用した研究開発支援体制の確立

産業ネットワークの形成に向けた支援

- ・産業・食料産業・知的3つのクラスターによる産業ネットワークの形成支援
- ・本四3橋を生かした環瀬戸内産業連携の強化

産業活動の安定化の支援

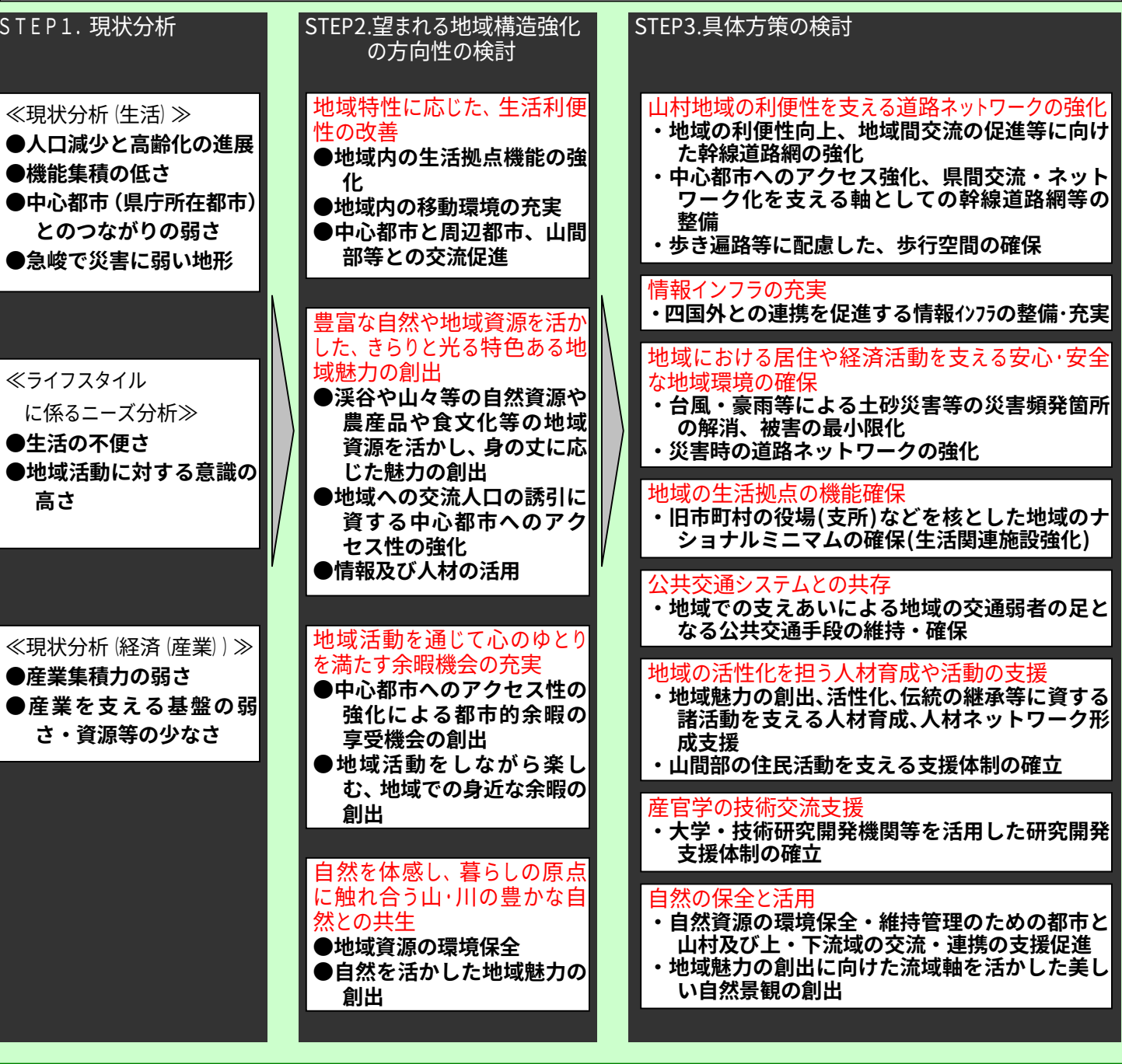
- ・安定的な産業活動を支える渇水対策

(2) 山間部エリア

- ・本エリアにおいては、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が低く、特に、少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・一方、急峻な地形により、インフラ整備や、人口・産業等の集積が難しいものの、豊富な自然、個性的な地場産業等の存在、地域活動に対する意識の高さ等の特色を有する地域であり、集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある発展から、自立を図ることが必要である。

(生活・経済(産業))

- [地域構造強化の方向性]
- ・人口や産業等の高い集積を目指すのではなく、**地域独自の取り組みにより、地域の魅力・活力（場としての機能）の向上**を図る
 - ・中心的地区においては、**基本的な生活サービス機能（ナショナルミニマム）の確保**を図るとともに、瀬戸内等の**都市的圏域との連携・交流を強化し**、都市的機能を享受する
- [四国の独自性を発揮するための地域戦略]
- ～田舎暮らしニーズに応じたライフスタイルの提供や自然との共生を目指した安心・安全な定住魅力の創出～
- ・田舎暮らしやマルチハビテーション等に対するニーズに基づき、**独自のライフスタイルを提供できる仕組み**を構築し、**地域活動と連携した新たな余暇魅力**を創出する
 - ・また、地域の誇れる**自然資源等の保全、自然を活かした地域魅力の創出**を都市と山村、河川の上下流域交流を通じて推進するとともに、**自然災害被害の最小限化による安心できる環境づくり**を推進する
- ～地域資源を活かした特色あるビジネスの創出・展開～
- ・上勝町のはっぱビジネスなどの先進的な取り組みをモデルとし、**都市部住民等をターゲットとした、自然資源、地場産品、人材等を活用した新たな付加価値を高めた特色あるビジネスモデルの創出・展開**を図る



(3) 南四国エリア

① 高知圏

- ・本エリアにおいては、高知市を中心に、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が比較的高い圏域（高知圏）と、それを挟み込むように、集積の低い東南地域と西南地域の半島部が存在しており、特に半島部においては少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・瀬戸内エリアと比較して、高速道路等のインフラ整備が遅れ、相対的に産業集積が低いものとなっていることから、インフラ整備等の推進と、それを最大限活かした地域活力の向上を図っていくことが必要である。

(生活)

- 〔地域構造強化の方向性〕
- ・高知市を中心とする生活に係る機能集積の高さを活かし、**コンパクトな範囲での都市機能の充実・強化**により都市内居住の快適性を向上させる
 - ・**圏域内外との交流・連携**を図ることにより、**都市・生活利便性の向上**を図る
- 〔四国の独自性を発揮するための地域戦略〕
- ～土佐の自然と歴史、文化が育むおもてなしの定住魅力の創出～
- ・南四国における中心都市圏としての定住魅力を高めるため、**高知市を中心に様々な拠点的な生活サービス機能の拡充**を図るとともに、地域の有する多様な資源（海や山、祭りや歴史、食等）を活用し、**心のゆとり、豊かさ、励みとなるような地域への愛着の高まる生活拠点の形成**を図る
 - ・さらには、高知特有の様々な文化や外部の者をもてなす「おもてなし文化」等の付加価値を外部に情報発信して、**定住の場としての地域ブランドを創出**する

STEP1. 現状分析

＜現状分析＞

- 高知市を中心とする人口の集積
- 高知市を中心とする生活利便施設の集積
- 高知市を中心とする生活圏域の形成
- 交通渋滞、事故の発生
- 渇水被害の多発
- 南海・東南海地震の不安

＜ライフスタイルに係るニーズ分析＞

- 定住意向の相対的高さ
- 生活利便性の相対的高さ
- 地域活動に対する意識の低さ

STEP2. 望まれる地域構造強化の方向性の検討

コンパクトな都市活動を支える生活利便性の改善

- 高知市における中心市街地の機能強化
- 交通渋滞の緩和による都市内道路交通の円滑化
- 都市内の移動環境の充実
- 高知市と周辺都市、山間部等との交流促進

高知の定住ブランド創出に資する都市の快適性の充実

- まちなかの再生・魅力創出
- ・うるおいと緑の創出
- ・美しいまち並み景観の創出
- 安心して暮らせる居住環境の確保

半島部との多様な交流を支える余暇機会の充実

- 多様な余暇機会の創出
- 高知市と周辺都市とのアクセス性の確保

STEP3. 具体方策の検討

半島部との連携強化等に資する道路ネットワークの強化

- ・コンパクトシティとしての施設等集積に応じた利便性向上、地域間交流の促進、観光地間のネットワーク強化
- ・高知市への広域的なアクセス強化、県間交流・ネットワーク化を支える軸としての高規格幹線道路網等の強化
- ・高知市への一極集中による交通渋滞の緩和に資するTDMやモビリティマネジメント等の推進

地域居住に対する安心・安全の確保

- ・東南海・南海地震や台風・豪雨等による津波、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化
- ・災害時の道路ネットワークの強化

周辺都市や半島部等の活動の受け皿となる中心都市機能の充実

- ・中心都市高知への広域的なアクセス強化や、県間交流・ネットワーク化に資する高規格幹線道路網等の強化
- ・バリアフリーの快適な公共空間の形成
- ・交通事故危険箇所の解消
- ・多発する渇水等への対応

自動車と共存して市民生活を支える都市公共交通システムの充実

- ・高齢者等の交通弱者の足として、生活活動を支える公共交通手段の確保

地域の活性化を担う人材育成や活動の支援

- ・地域の活性化、伝統の継承等に資する諸活動を支える人材の育成（若者啓発、後継者育成プログラム等）
- ・市民主体の地域活動を支える支援体制の確立

(経済(産業))

- 〔地域構造強化の方向性〕
- ・インフラ等産業基盤の充実・強化及びアクセス機能の向上により、**四国の新たな産業の核**として、産業の集積を図る
 - ・**新たな独自産業を展開**し、産業における競争力の向上を図る
- 〔四国の独自性を発揮するための地域戦略〕
- ～人や情報の交流ネットワークや道路交通のネットワークの形成による特色ある産業の発展～
- ・地域の産業集積の弱さを克服するため、産業・食料産業・知的の3つのクラスターによる**人や情報のネットワークにより特色ある産業を発展**させるとともに、**南四国圏と東アジア、世界とを結ぶ港湾ゲートウェイ機能を強化**や、**本四3橋への道路ネットワークの強化**等を図る

STEP1. 現状分析

＜現状分析＞

- 産業集積力の弱さ
- 四国内外とのつながりの弱さ
- 産業を支える基盤の弱さ

STEP2. 望まれる地域構造強化の方向性の検討

南四国と四国内外との交流・連携の強化

- 四国外との交流・連携の強化
- ・南四国と東アジア・世界との交流・連携の強化
- ・南四国と全国との交流・連携の強化
- 四国内の交流・連携の強化

南四国の地域資源を活用した技術・産業集積力の強化

- 産官学の技術交流の強化
- 産業に係る各種ネットワーク形成の支援
- 産業活動の安定化支援

STEP3. 具体方策の検討

南四国港湾ゲートウェイ機能の強化

- ・外貿コンテナ貨物の増加や船舶の大型化等に対応した港湾機能の強化
- ・港湾機能強化と連携した企業誘致、航路誘致

高知龍馬空港の空港ゲートウェイ機能の強化

- ・航空需要に対応した高知空港の航空サービスの充実と他3空港との連携強化

特色ある産業発展を支える広域道路ネットワークの強化

- ・四国内外、重要港湾、空港等とを結ぶ高規格幹線道路網等の機能強化

産官学の技術交流支援

- ・地域の大学や技術研究開発機関等を活用した研究開発支援体制の確立

産業ネットワーク形成支援

- ・産業・食料産業・知的の3つのクラスターによる産業ネットワークの形成支援
- ・高規格道路網等を活かした四国内外産業連携の強化

産業活動の安定化支援

- ・安定的な産業活動を支える渇水や震災・風水害への対策

②半島部（西南・東南）

- ・本エリアは、高知圏を挟み込むように形成されている東南地域と西南地域の半島部のエリアであり、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が低く、特に、少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・瀬戸内エリアと比較して、高速道路等のインフラ整備が遅れていることから、インフラ整備等の推進に応じた、地域資源を活かした特色ある発展地域の活性化を図っていくことが必要である。

〔生活・経済（産業）〕

〔地域構造強化の方向性〕

- ・地域独自の取り組みにより、地域の魅力・活力（場としての機能）の向上を図る
- ・中心的地区においては、基本的な生活サービス機能（ナショナルミニマム）の確保を図るとともに、南四国中央との連携・交流を強化し、都市的機能を楽しむ
- ・四国内外とのアクセス機能の向上により、地域資源を活かした特色ある地域の活性化を図る

〔四国の独自性を発揮するための地域戦略〕

～山・川・海の自然とふれあい、自然と共生した多様な暮らし方を実感できる安心・安全な定住魅力の創出～

- ・田舎暮らしやマルチハビテーション等に対するニーズに基づき、広域的な交流基盤の形成により、自然の恵み、あたたかな人のもてなしによって、独自のライフスタイルを提供できる仕組みを構築する
- ・また、地域の自然の尊さ、暮らしの喜び、人のあたたかさなどに会い、心のゆとり、豊かさを感じることにより、新たな定住魅力につながるような展開を図る
- ・さらに、地域の誇れる自然資源等の保全、自然を活かした地域魅力の創出を都市と山村、河川の上流域、沿岸部との交流を通じて推進するとともに、自然災害被害の最小限化による安心できる環境づくりを推進する

～半島部における地域資源を活かした特色あるビジネスの創出・展開～

- ・広域的な交流基盤の形成を図るとともに、馬路村ゆずビジネスや室戸市の海洋深層水ビジネス等に代表される1次産品等の地域資源を活用した特色ある地場産業に加え、観光や癒し、食等の付加価値を高めたビジネス展開、情報発信し、南四国のブランド力を強化する

STEP1. 現状分析

＜現状分析（生活）＞

- 人口減少と高齢化の進展
- 機能集積の低さ
- 中心都市（県庁所在都市）とのつながりの弱さ
- 地域間の格差
- 南海・東南海地震による不安

＜ライフスタイルに係るニーズ分析＞

- 定住意向の相対的低さ
- 生活の不便さ
- 地域活動に対する意識のばらつき

＜現状分析（経済（産業））＞

- 産業集積力の弱さ
- 四国内外とのつながりの弱さ
- 産業を支える基盤の弱さ

STEP2. 望まれる地域構造強化の方向性の検討

日常的な暮らしを支える、生活利便性の改善

- 地域性を考慮した身近な生活圈での生活拠点機能の強化
- 身近な地域内の移動環境の充実
- 広域交通基盤の強化による中心都市との交流促進

南四国と四国内外との交流・連携の強化

- 四国外との交流・連携の強化
- ・南四国と全国との交流・連携の強化
- 四国内の交流・連携の強化

豊富な自然や地域資源を活かした、きらりと光る特色ある地域魅力の創出

- 溪谷や山々等の自然資源や農産品や食文化等の地域資源を活かし、身の丈に応じた魅力の創出
- 地域への交流人口の誘引に資する中心都市へのアクセス性の強化
- 情報及び人材の活用

地域活動を通じて心のゆとりを満たす余暇機会の充実

- 中心都市へのアクセス性の強化
- 地域活動をしながら楽しむ、地域での身近な余暇の創出
- もてなしの文化を活かした地域活動の充実

自然を体感し、暮らしの原点に触れ合う山・川・海の多様な自然との共生

- 山・川・海の地域資源の環境保全
- 自然を活かした地域魅力の創出

STEP3. 具体方策の検討

四国内・外との連携強化等に資する道路ネットワークの強化

- ・地域の利便性向上、地域間交流の促進等に向けた幹線道路網の強化
- ・高知圏へのアクセス強化や県間交流・ネットワーク化に資する高規格幹線道路網等の強化
- ・四国内外、重要港湾、空港等とを結ぶ高規格幹線道路網等の機能強化
- ・歩き遍路等に配慮した、歩行空間の確保

情報インフラの充実

- ・四国外との連携を促進する情報インフラの整備・充実

地域の生活や経済活動を支える安心・安全の確保

- ・東南海・南海地震や台風・豪雨等による津波、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化
- ・災害時の道路ネットワークの強化

地域の生活拠点の機能確保

- ・旧市町村の役場（支所）などを核とした地域のナショナルミニマムの確保（生活関連施設強化）

公共交通システムとの共存

- ・地域での支えあいによる地域の交通弱者の足となる公共交通手段の確保

地域の活性化を担う人材育成や活動の支援

- ・1次産品等の地域資源を活用した特色ある地場産業、観光や癒し、食等の付加価値を高めたビジネス展開等を支える人材育成、人材ネットワーク形成支援
- ・山間部の住民活動を支える支援体制の確立

自然の保全と活用

- ・自然資源の環境保全・維持管理のための都市と山村及び上・下流域の交流・連携の支援促進
- ・地域魅力の創出に向けた流域軸を活かした美しい自然景観の創出

産官学の技術交流支援

- ・大学・技術研究開発機関等を活用した研究開発支援体制の確立

4. 望まれる地域構造の考え方

(1) コンパクトな地域構造を活かした四国の一体化

①文化的、歴史的な一体性を活かした連携
・遍路によるつながりや歴史上のつながりなど、独自の高い文化を内包しており、これらの資源を活かした交流・連携により一体性を高める。

②多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進

・既に活発なボランティア活動などの住民活動をさらに広げ、「自らの地域のことは地域で取り組む意識・姿勢」を醸成し、地域づくりを牽引する人材を育てる。
・多様な主体の活動・連携・協働を支えるインフラ整備や仕組みづくりなどによって、地域の豊かな資源を活用した個性的な地域づくりを推進する。

③都市相互の近さを活かした地域連携の強化

・隣接都市間における機能分担等による地域レベルでの機能強化を図る。
・都市圏相互の経済・産業面での結びつきを強化するとともに、アイランドリーグなどの新たな文化の創造による交流・連携を促進する。
・他地域との連携、各々の協力や役割分担によって、医療等のサービス水準の向上を図る。
・物流拠点への連携強化により、経済活動の活性化を図る。

④5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

・5つの30万人都市圏と中山間地域の山村集落とを、高規格幹線道路や国道等によって結ぶことにより、その交流・連携を促し、一体的な圏域としてのポテンシャルを高める。
・都市と中山間地域の近さを活かした、機能分担と相互交流を推進する。
・団塊の世代などをターゲットとした定住促進、二地域居住(マルチハビテーション)や田舎暮らしなどの様々なライフスタイルニーズへの対応を図る。
・観光拠点への連携強化により、余暇活動の機会の充実を図る。

⑤安全・安心の確保

・東南海・南海地震や台風・豪雨等による津波、洪水等の水害や土砂災害等の災害頻発箇所の解消、被害の最小限化を図る。
・災害時の道路ネットワークの強化を図る。
・防災訓練やイベントを開催し、防災に関する知識の普及・啓発を図る。

●中山間地域が有する豊かな資源

変化に富んだ美しい資源

- 清流、渓谷、山々
- 海岸美



四国カルスト(愛媛県久万高原町)

歴史性の高い資源

- 歴史や文化と調和した個性的な街並み
- お遍路の歴史



八日市・護国のまち並み(愛媛県内子町)

人々の生活・営みにまつわる風景

- 農村や漁村など人の営みと調和した美しさ
- 生活を支えてきた土木遺産



みかん段々畑(愛媛県八幡浜市)

受け継がれ、生み出されてきた個性的な文化

- 食文化
- 祭り等

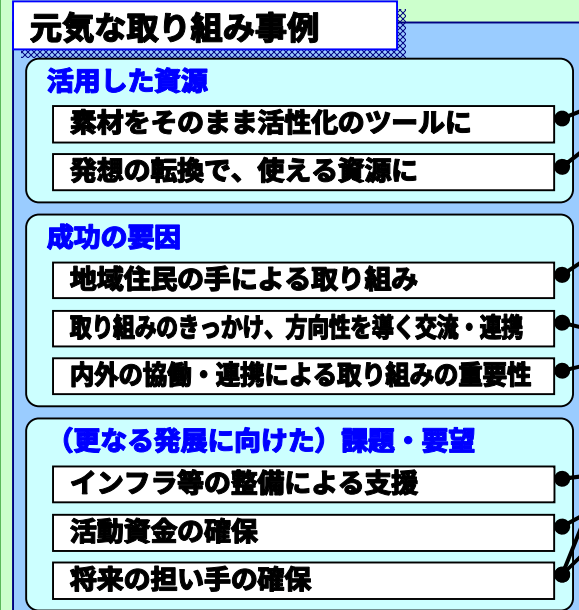


特産品ゆずを用いた製品
(高知県馬路村)

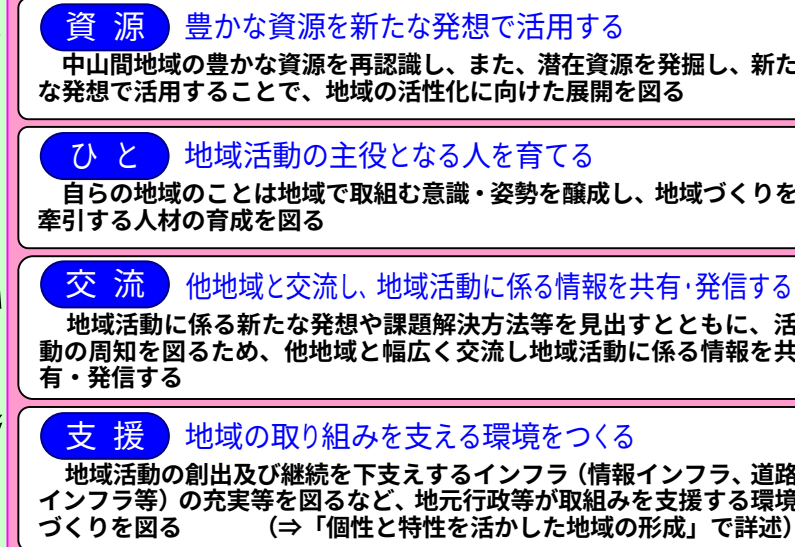
●中山間地域の自立(活性化)に向けた取り組み

町村名	元気な取り組み事例	活用した資源	成功の要因	(更なる発展に向けた)課題・要望
黒潮町	砂浜美術館構想	素材をそのまま活用(砂浜)	・人材(県外からの事務局長となる若い有望な人材、住民・職員によるボランティア、優れたデザイナーの存在) ・他団体等の協力(行政からの委託、県外企業からの人的・資金的協力) ・きっかけとなるイベント(全国松原サミット) ・その他(NPO法人化による社会的地位の確立、町長からの支持)	・人材(会員の増加) ・資金(財源(収入)の確保) ・インフラ等(道路整備の推進、情報通信網の充実) ・連携(行政とのパートナーシップ)
大月町	大月コスモス祭り	発想の転換で活用(葉外コトをコスモス畑に)	・人材(葉タバコ青年部が牽引) ・他団体等の協力(賛同団体からの寄付)	・資金(財源(収入)の確保) ・インフラ等(周辺アクセス機能の強化) ・その他(他の観光資源との連携)
	夜桜音楽会(山桜(アシズリザクラ)のライトアップとコンサート)	素材をそのまま活用(山桜)	・きっかけとなるイベント(風景を活かした地域作りフォーラム) ・他団体等の協力(活動費助成、自治組織の協力)	・資金(財源(収入)の確保) ・インフラ等(広域交通網の整備) ・連携(他の活動との交流・連携の機会の必要性)
上勝町	彩事業	発想の転換で活用(木の葉等を妻物に)	・人材(農家の継続的努力、町外の人材からの視点・発想の活用) ・インフラ等(防災無線の活用)	・人材(高齢化への対応、人材の確保)
勝浦町	ふれあいの里さかもと(廃校の小学校を拠点とする「グリーンツーリズム」)	素材をそのまま活用(自然資源)	・人材(50人以上のボランティア;先生役は、近所のおじさんやおばさんたち) ・インフラ等(小学校廃校の活用、インターネットによるPR)	・人材(高齢化への対応、人材の確保) ・インフラ(景観に配慮した基盤整備)
馬路村	ゆずビジネス	発想の転換で活用(ゆずを様々なブランド品に)	・人材(リーダーシップとネットワークを持った地域リーダーの存在) ・他団体等の協力(補助金) ・インフラ等(インターネットによる販売) ・その他(宅配業者との契約による輸送効率化)	・人材(高齢化への対応、人材の確保) ・インフラ(道路整備の推進、情報通信網の充実) ・その他(原材料(ゆず)の確保)
梶原町	鹿取キムチ(韓国の大学との交流をきっかけにしたキムチの製造販売)	その他(交流がきっかけの取り組み)	・人材(積極的なリーダーの存在、女性を中心とする実行組織等) ・他団体等の協力(自治組織、家庭の協力)	・人材(高齢化への対応、人材の確保) ・インフラ等(道路整備の推進、情報通信網の充実) ・連携(行政、教育機関、企業等との連携強化)
	千枚田オーナー制度・四万川田んぼオーナー制度	素材をそのまま活用(棚田等)	・人材(今なお残る道普請などの風習による自治意識の高さ;結束が強い自治組織を単位に活動) ・他団体等の協力(行政による事務手伝い等の支援) ・インフラ等(広域交通網の整備)	・人材(高齢化への対応、人材の確保) ・連携(行政とのパートナーシップ)
	グリーンツーリズムゆずはら会	素材をそのまま活用(自然資源)	・人材(主体性を持った町民が楽しみながら取り組む) ・インフラ等(広域交通網の整備) ・その他(もてなしの風土、組織立ち上げによる志気の高まり)	・人材(高齢化への対応、人材の確保) ・連携(行政とのパートナーシップ) ・その他(取り組みの継続、PR)

●中山間地域の地域像



中山間地域の地域像



情報共有・連携の機会「四国ふるさと普請」

「四国ふるさと普請」
地域づくりに関わる市民団体等と共に考え、共に創る「自立する四国」を目指すための交流の場を創出

活動の交流

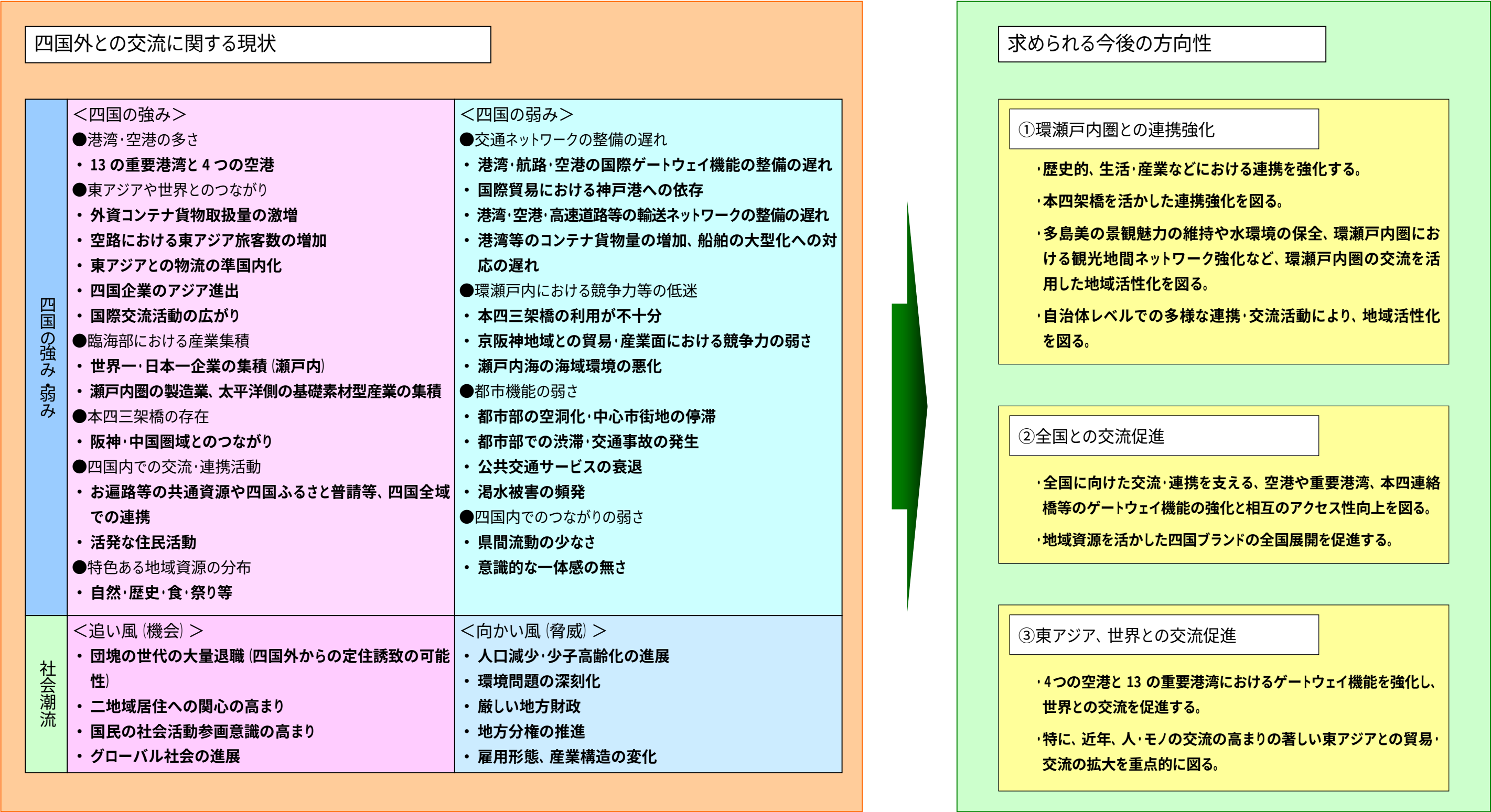
地域づくり活動団体の交流・相互連携の促進
★地域づくり活動団体が主体で「地域での会」開催
継続:これまでの活動、今後の活動をつなぐ
つながり:様々な人と人、団体間との交流を促進
担い手づくり:次代のリーダー発掘、担い手育成

情報の交流

情報発信、情報共有、意見交換の場づくり
★ホームページの開設(開設済み)など
・地域活動の紹介
・ネット座談会
・イベント紹介 など

具体的取り組み

(2) 四国外との活発な交流の促進

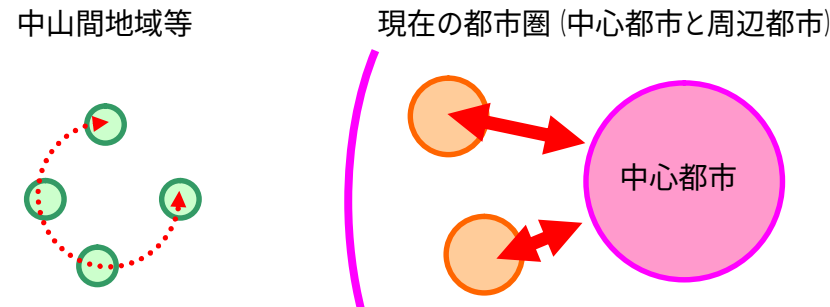


5. 都市部と中山間地域等の交流・連携によるコンパクトな地域づくり

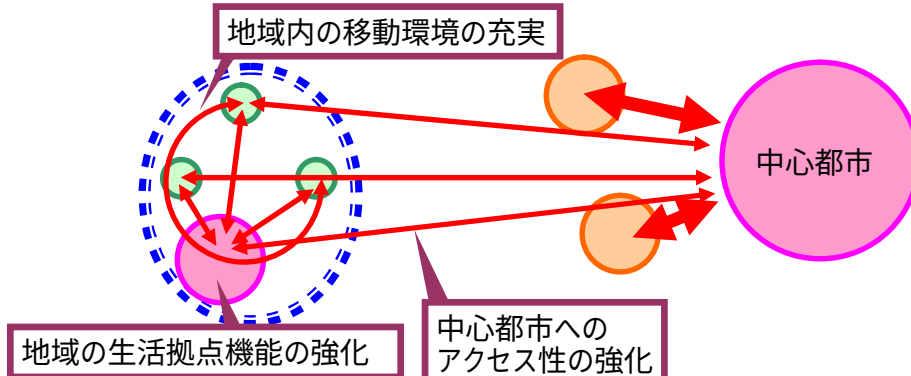
《都市部と中山間地域等とが連携したコンパクト・リージョン形成のイメージ》

※コンパクト・リージョン；コンパクトで多中心（ポリセントリック）な都市が、広域圏レベルで連携した重層的な地域構造

現状



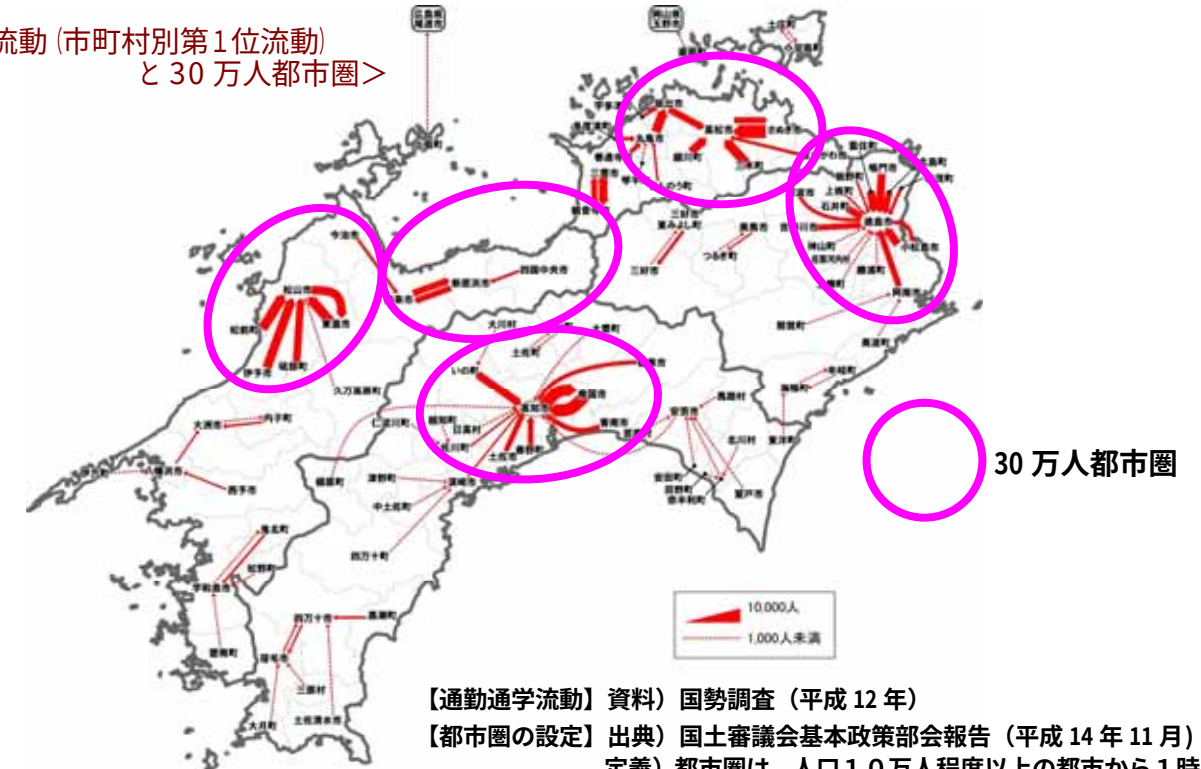
望まれる方向性 … コンパクト・リージョンの形成



《四国における活動圏域の状況》

- ・四国においては、30万人規模の都市圏（中心都市と周辺都市）が存在。
- ・現状では、就業等各種生活活動における中心都市と周辺都市との結びつきが強くなっているが、中心都市と山間部等との結びつきが弱い。
- ・一方、四国の特徴としては、30万都市圏がバランス良く配置され地理的にも、都市と中山間地域が近い、コンパクト・リージョンを形成する理想の空間の要素を備えている。

＜四国の通勤通学流動（市町村別第1位流動）と30万人都市圏＞



【通勤通学流動】資料）国勢調査（平成12年）

【都市圏の設定】出典）国土審議会基本政策部会報告（平成14年11月）
定義）都市圏は、人口10万人程度以上の都市から1時間圏について都市相互の連担も踏まえ設定

《中山間地域等の現状》

- 人口減少と高齢化の進展
- 機能集積の弱さ
- 中心都市（県庁所在都市）との遠隔性に起因するつながりの弱さ
- 急峻で災害に弱い地形

職や都市型サービス、利便性等を求める居住者の定住意向の低下（転出傾向）

《中山間地域等におけるめざすべき地域構造の方向性》

～ コンパクト・リージョンの形成 ～

- ・四国は地理的要因から恵まれた都市と中山間地域の配置（距離が近い）となっている。
- ・四国は、コンパクト・リージョンの形成によりマルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャル向上を図りうる可能性を有する、国内有数の圏域であるため、それを下支えするネットワーク整備等が重要。

【近隣生活圏レベル】

- ・地域内における生活拠点機能の強化と近隣集落間等における移動環境の充実等による地域内の連携強化による持続可能な地域の形成（農山漁村地域の保全）

【広域圏レベル】

- ・中山間地域等と中心都市との連携強化（アクセス性の強化）による広域圏（リージョン）の形成（山間部における利便性向上や活動幅の増加）

- ・田舎暮らしニーズの高まりに応じた、多様で豊富な地域資源を活用し、定住促進（居住者の定住確保、I・U・Jターン）、二地域居住（マルチハビテーション）等の促進。
- ・都市部の後背圏の拡大（山間部と中心都市とのアクセス性の強化）による、（高齢化により縮減する）市場や労働力人口等の確保

6. WG会議の検討結果

<四国の特徴>

- 1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ
- 2) 美しい自然と農漁村など人々の営み
- 3) 都市と田舎の近さ
- 4) 独自の歴史、文化の存在 等

<四国の課題>

- 1) 高度集積（100万都市）の不在
- 2) 人口減少と高齢化の進展
- 3) 厳しい自然環境
- 4) 地域活力の衰退
- 5) 四国内の結びつきの弱さ 等

<四国各地域の特徴>

- 1) 5つの都市圏（30万都市圏）とその他の中山間地域
- 2) 個性的な3つの地域

①瀬戸内エリア

4つの都市圏（30万都市圏；徳島～高松～西条・新居浜～松山）が連続して存在。都市集積、産業集積が高く、ストックを活かした競争力向上を図る

②山間部エリア

急峻な地形により小規模な集落が存在。集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る

③南四国エリア

【高知圏】インフラ整備等の推進と、それを最大限に活かした地域活力の向上を図る。
【半島部】地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る。

四国の5つの都市圏と中山間地域の交流・連携強化のためには、拠点強化とネットワーク形成の相乗効果を生む地域構造の形成が必要

四国の少子・高齢化、人口減少傾向等を踏まえ、四国の個性を活かしつつ、四国の交流人口を増加させる多様な交流促進が必要

<望まれる地域構造の考え方>

1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

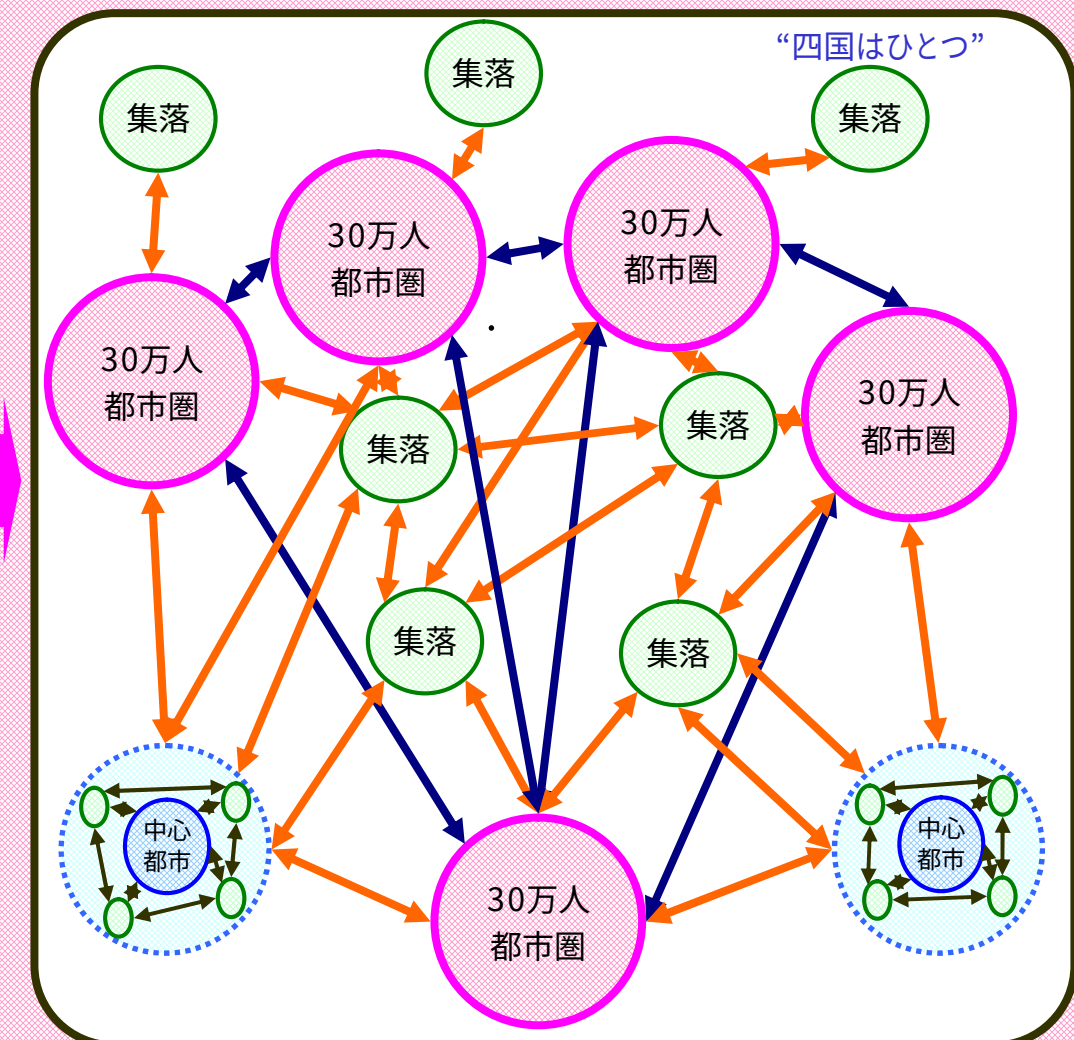
2) 四国外との活発な交流を促す

- ①文化的、歴史的な一体性の確保
- ②多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進
- ③都市相互の近さを活かした地域連携の強化
- ④5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化
- ⑤安全・安心の確保

- ①環瀬戸内圏との連携強化
- ②全国との交流促進
- ③東アジア、世界との交流促進

「コンパクト・リージョン・四国」の形成

- ・四国は、産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャル向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる。
- ・このため、歴史的・文化的なつながりやネットワークを形成し、地域間の交流・連携の強化を図ることにより、高度集積のメリットを享受できないというデメリットを補いながら、ひとつの四国として小さいながらも、中身の充実した地域、すなわち『四国はひとつ』（コンパクト・リージョン・四国）の形成を図る。



第3回 新四国創造研究会 会議資料

～四国が誇る日本一・世界一企業アンケート
・ヒアリング概要について～



平成19年8月22日(水)

四国地方整備局

調査の目的

- ・四国の強みである「四国が誇る日本一・世界一企業」に対して、アンケート及び調査を実施することにより、その特徴等を把握し、今後の四国の国土づくりの方向性を検討するにあたっての基礎資料とする。

【調査により把握する事項】

「四国が誇る日本一・世界一企業」の

- ・日本一・世界一となっている背景や取り組みを把握する

- ・四国に立地していることの優位性を把握する

- ・地域との係わり合いを把握する

調査概要

アンケート調査

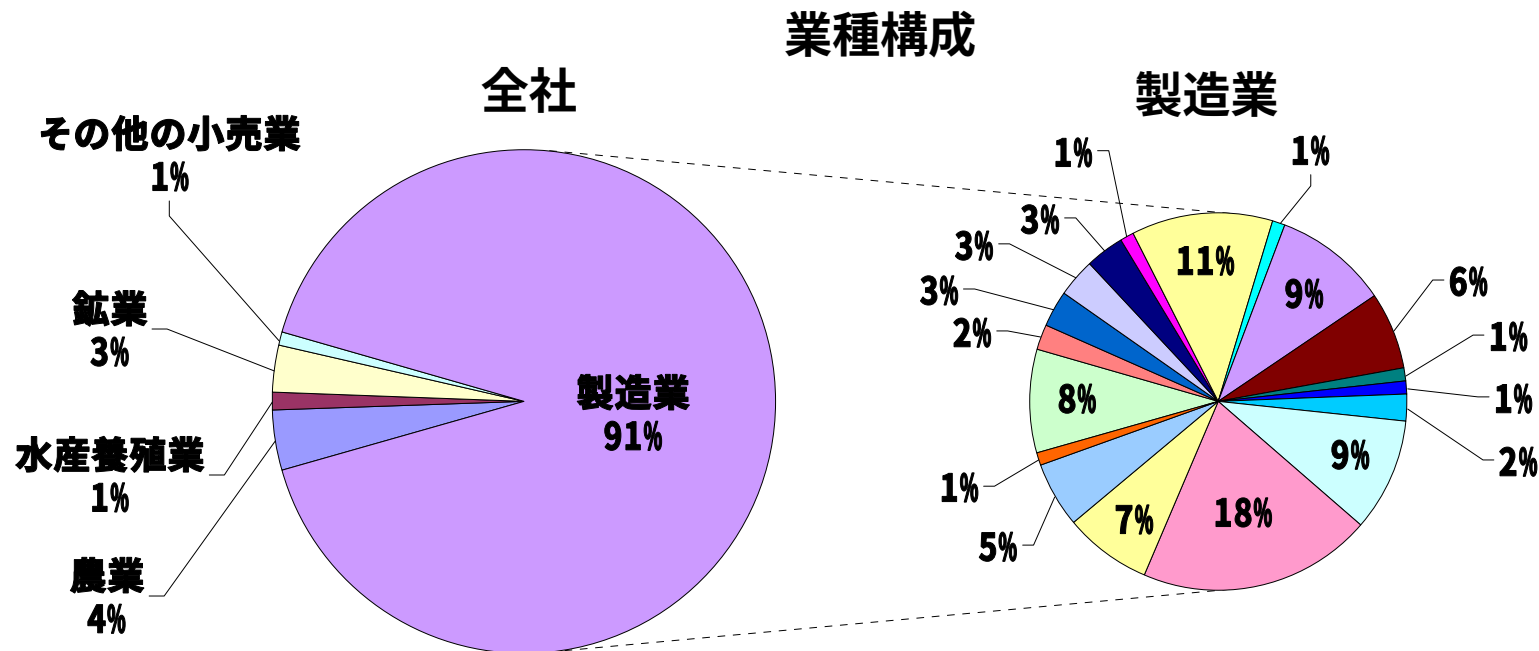
- ・調査対象：四国内の日本一・世界一企業100社
- ・調査期間：平成19年2月23日（金）～3月5日（月）
- ・調査方法：郵送配布・郵送回収
- ・回収数22票（回収率：22%、従業員：2人～1100人、年商：20百万～850億円）

ヒアリング調査

- ・調査対象：四国内の日本一・世界一企業のうち4社
(特徴的な企業をピックアップして依頼し、了解が得られた企業に対して)
- ・調査期間：平成19年4月
- ・調査方法：調査員による直接聞き取り

アンケート調査対象企業の業種構成

・調査対象企業の約9割が製造業となっている。



製造業の分類

食品製造業	飲料・たばこ・飼料製造業	繊維工業 (衣類、その他の繊維製品を除く)
衣類、その他の繊維製品製造業	木材・木製品製造業 (家具を除く)	家具・装備品製造業
パルプ・紙・紙加工品製造業	印刷・同関連業	化学工業
プラスチック製品製造業 (別掲を除く)	ゴム製品製造業	窯業・土石製品製造業
非鉄金属製造業	金属製品製造業	一般機械器具製造業
電気機械器具製造業	電子部品・デバイス製造業	その他の製造業

調査項目（アンケート・ヒアリング共通）

・下記の項目に対して、自由記述形式にてご回答いただいた。

	質問内容
Q1. 企業概要	①企業概要（代表者名、本社所在地、創業年、資本金、従業員数、年間売上高、事業内容、国内生産・営業拠点、海外拠点）
	②経営理念・社風
	③営業及び生産の軸足（四国か、その他地域か）
Q2. 日本一・世界一である背景等	①日本一・世界一製品の原材料の主な仕入先（地域）
	②日本一・世界一を維持するための取り組み（業界内の優位性、営業・情報に関する取り組み、顧客満足に関する取り組み、研究開発に関する取り組み、人材育成に関する取り組み、その他特記すべき点）
Q3. 四国に立地していることの優位性	①四国に立地した背景
	②日本一・世界一であることに対する四国に立地している優位性（人材面、資材調達面、物流面、情報面、学術機関との連携面）
Q4. 地域との係わり合い	①地域貢献に関する取り組み
	②四国圏域への期待

■主な回答内容

Q1 企業概要

③営業活動と生産活動の中核的拠点

- ▶ 営業中核拠点として、東京を挙げた企業が28%、次いで大阪が22%、その他（国内）が19%、四国が16%、名古屋が6%となっており、営業拠点を四国外に持つ割合が高い（複数回答あり）。
- ▶ 四国外と答えた企業の理由として最も多いのは、マーケットの規模や客先の集約性となっており、四国と答えた企業の理由としては、本社があるからという回答となっている。
- ▶ 生産中核拠点としては、四国とした企業が91%となっており、生産拠点を四国に持つ割合が高い（複数回答あり）。
- ▶ 四国と答えた企業の理由としては、創業地・本社での生産を基本とするものが最も多かった。
- ▶ 営業拠点としては、本社である四国に加え、得意先（販売対象）の機能が多い東京や大阪にも設けるという回答が多かった。
- ▶ 生産拠点としては、工場等の機能分担により、四国外での立地も見られる。四国から離れた東日本の拠点として、関東に立地するケースもみられた。

Q2 日本一・世界一の背景等

①原材料の仕入先

- ▶ 原材料の仕入先としては、四国が32%と最も多く、次いで海外が共に25%、大阪が18%となっている（複数回答あり）。
- ▶ 四国と答えた企業の理由としては、地元優先とすることが最も多く、その他地域とした企業では、資材に求められるレベルや生産地の関係によるものとなっている。
- ▶ 全国規模で展開している。
- ▶ 輸入原材料の場合、四国外の輸入拠点から仕入れている。

Q2 日本一・世界一の背景等

②日本一・世界一を維持するための取り組み

【業界内の優位性についての主な回答】

- ・ 業界内での特異性 (少数メーカー)、高品質・低コスト化の実現、技術力 等。

【営業・情報に関する取り組みについての主な回答】

- ・ 積極的な営業活動、新商品の提案 等。

【顧客満足に関する取り組みについての主な回答】

- ・ 人材教育、品質管理 (ISO取得)、無添加食品、顧客との会話 等

【研究開発に関する取り組みについての主な回答】

- ・ 新技術・新製品の開発継続、長期的な新事業開発、顧客のニーズにあった商品開発 等

【人材育成】

- ・ OJT、心の教育、自己啓発援助、親会社の人材育成プログラムの活用 等

Q2 日本一・世界一の背景等

②日本一・世界一を維持するための取り組み

【業界内の優位性についての主な回答】

- ・ 大手との単独契約の実現
- ・ 研究開発の先駆性 等。

【営業・情報に関する取り組みについての主な回答】

- ・ きめ細かな営業活動 (提案営業)
- ・ 他社との違いをPRできるプレゼンテーション
- ・ 営業は行わなくとも問い合わせが来る 等。

【顧客満足に関する取り組みについての主な回答】

- ・ 客様の立場で考える 等

【研究開発に関する取り組みについての主な回答】

- ・ スタンダードな商品に加え、顧客ニーズに柔軟に対応するプライベートブランドの実施
- ・ お客様の声を反映した商品開発 等

【人材育成】

- ・ 社内研修制度の確立 等

Q3 四国に立地していることの優位性

①四国立地の背景

- ▶ 創業者が起業した地である、昔からの伝統産業が発達した地域であるという意見が多かった。
 - ▶ 原材料の産地、事業に必要な水をたたえる大きな川、深層水、みかん山のモノレール製作が始まり等を理由に創業、また、そこが中心という企業理念によるもの。
 - ▶ 人材が四国の人が多い、労働力が安い等を理由に創業。
 - ▶ 大手企業のグループ計画としての工場の設立（近隣工場への原料の供給拠点）。
-
- ▶ 創業者が起業した地である。
 - ▶ 広い土地、水、電気、人が確保できる。特に広い土地の確保が可能であった。
 - ▶ 港との近接性。
 - ▶ 県などの積極的誘致。

Q3 四国に立地していることの優位性

②四国立地の優位性

【人材面】

- ・ 特になしが多い。
- ・ 地元採用で定着率高い、優秀な人材を採用しやすい、等。

【資材調達面・情報面】

- ・ ほとんどが優位性は特にはない又は不利。
- ・ 船便が利用でき、輸送コストが抑制できる。

【物流面】

- ・ ほとんどが優位性は特にはない。
- ・ その他は、交通網の発達により利便性向上、顧客に近い、親会社の物流利用 等

【学術機関との連携面】

- ・ 県農業技術センターとの共同研究を行っているが1社。
- ・ 大学、高専もしくは農業試験場との協力体制をとっているが2社。
- ・ 過去産学連携実績有りが1社

Q3 四国に立地していることの優位性

②四国立地の優位性

【人材面】

- ・ 優秀な人材が確保できる 等。

【資材調達面・情報面】

- ・ 優位性は特になし、不利。
- ・ 製品に適した原材料が生産されている 等。

【物流面】

- ・ 優位性は特になし、不利。

【学術機関との連携面】

- ・ 地元大学と共同研究を行っている 等。

Q4 地域との係わり合い等

①地域貢献の取り組み

- ▶地域との交流 (交通安全イベントへの全社員での参加、道路清掃、工場見学、インターンシップ・社会体験学習・教員民間企業研修等の受入れ、人材派遣 (講師)、地域活動で社内ホールを利用してもらう、大学主催の科学体験イベントへの出展 等)
- ▶地域への貢献 (地元雇用・地元仕入れの優先、空き社宅の貸し出し、県の環境ISOネットワーク幹事としての仕事、NPO活動への物品と場所の提供、技術指導による人材育成 等)
- ▶事業そのものが地域・社会貢献活動 (環境機器)
- ▶自治体へ寄付を行っている (基金を作り、留学が行われている。)
- ▶地元特産品との共同開発 (加工品の製造)
- ▶税金・雇用面での貢献
- ▶スポーツ施設の開放
- ▶地域スポーツへの協力 (サッカーJ2等)
- ▶地元の祭り等への参加 等

Q4 地域との係わり合い等

②四国圏域への今後の変化への期待

- ▶ 過疎部分として切り捨てるのではなく、全体最適を考えた統制と規制緩和の両面から日本全地域を考えた人口・産業の最適配分の推進（金属製品製造業）。
- ▶ 海外をリードする高い技術でのものづくりを中心とした産業と自然豊かな観光に支えられ、人々が豊かな生きがいを持てる地域になって欲しい（電機機械器具製造業）。
- ▶ 文化、情報の発信地となること（その他の製造業）。
- ▶ 自然と文化両面に豊かな地域である事を望む（金属製品製造業）。
- ▶ 変わらない方が良い（パルプ・紙・紙加工品製造業）。
- ▶ 地方であって、地方でない企業づくり（一般機械器具製造業）。
- ▶ 交通、物流の一層の整備と、進出企業への優遇・育成の措置が必要（ゴム製品製造業）。
- ▶ 地方分権で一体化して力が発揮できるようになって欲しい（金属製品製造業）。
- ▶ 中央との地域格差がなくなり、四国全体が発展できる施策を期待する（農業）。
- ▶ 高速道路を無料にして、本州との地域格差の是正をぜひお願いしたい（農業）。
- ▶ 首都圏にひけをとらない国際窓口として発展してほしい（一般機械器具製造業）。
- ▶ 首都圏への交通の便を活かし、IT情報伝達力を利用することにより、本社機能や技術開発部門の拠点が移動してくる（繊維工業）。

Q4 地域との係わり合い等

②四国圏域への今後の変化への期待

- ▶ 若い人が楽しめる施設等があると良い。
- ▶ 四国で活躍できる場が必要（活躍できる場が無いと人が来ない）。
- ▶ 物流機能の改善が必要。（台風が来ても寸断されないこと、輸送費用を抑える（道路通行料金等の値下げ）、船の便数の増加、大型貨物の道路通行許可等の規制緩和、四国内の港湾機能の強化・アクセス機能の強化 等）
- ▶ 官民の連携強化が必要。
- ▶ 集中的な投資により、中核となる港が必要。
- ▶ 海路寄港地のコラボレーションが必須。（船の入と出がそろわないと非効率）

第3回 新四国創造研究会 会議資料

～「ライフスタイルに関する行動・意識調査」
に係る分析結果～



平成19年8月22日(水)

四国地方整備局

1. 調査概要

調査概要

【①目的】

- ・本アンケート調査は、四国における地域構造分析を検討する際の基礎データを収集するため、四国で生活する人々のライフスタイル（行動・意識）を把握する目的で実施。

【②調査方法】

- ・本アンケート調査は、段階的に実施している。
 - ・第1回web調査；基本的なライフスタイルに係る調査
 - ・第2回web調査；第1回web調査を踏まえた追加調査（余暇等に係る情報等を細分化）
 - ・中山間地域補足調査；web調査ではサンプル数の少ない中山間地域の高齢者のデータを収集するための調査（紙によるアンケート調査）
- ・第1回、第2回web調査は、既存ポータルサイトによるweb調査
 - ※四国4県と比較対象である大阪府に配布において、各240票 合計1,200票回収を回収するように実施
- ・中山間地域補足調査は紙冊子によるアンケートを用いた郵送配布・郵送回収型調査
 - ※上勝町、つるぎ町（以上、徳島県）、馬路村、北川村、梶原町、津野町、大月町（以上、高知県）、鬼北町（以上、愛媛県）に、各250件 合計2000件を配布

調査概要

【③調査内容-1 (第1回web調査、中山間地域補足調査)】

	質問内容
Q1. 日常的な生活行動の現状及び認識	①日常的な生活行動(仕事、家族の生活、余暇活動、地域活動)における頻度、行動日(平休日)、その際の交通手段
	②日常的な生活行動(仕事、家族の生活、余暇活動、地域活動)に要する所要時間及び許容できる所要時間
Q2. 生活における比重の置き方	①生活(人生)における日常的な生活行動(仕事、家族の生活、余暇活動、地域活動)の重要性 ・回答者の価値観で考えた場合の比重の置き方(理想) ・回答者の実生活上での比重の置き方(現状)
	②生活(人生)における重要性の決定要因
	③生活(人生)における「最も重要な項目」における「回答者の価値観で考えた場合の比重の置き方(理想)」と「回答者の実生活上での比重の置き方(現状)」が一致しない理由
	④今後10年間ににおける生活(人生)の比重に対する意向
Q3. 居住地域に対する愛着心・誇り及び定住意向	①現居住地における居住開始時期
	②転入者の故郷
	③現居住地への定住意向とその理由
Q4. 回答者属性	①性別、年齢、住所、②子どもの有無、③未既婚、④職業

調査概要

【③調査内容-2 (第2回web調査、中山間地域補足調査)】

	質問内容
Q1. 仕事に対する意識	①回答者の考える仕事の環境における重要性和現在の満足度
Q2. 移動手段に対する意識	①回答者の考える移動手段の重要性和現在の満足度
Q3. 余暇活動の現状及び活動意向	①現在行っている余暇活動の活動頻度、主な活動場所、今後の活動意向
	②現在行っている余暇活動の評価 ・活動場所までの距離 (住まいからの距離) ・活動場所までの移動手段 (道路や公共交通手段などの状況) ・施設などの質 (満足できる内容で活動できるか) ・施設などの量 (活動するのに十分な量があるか)
	③今後行いたい余暇活動と現在活動できていない理由
Q4. 地域活動等に対する意識	①現在行っている地域活動等の活動の頻度、活動の理由、今後の活動の意向
Q5. 回答者属性	①性別、年齢、住所、②子どもの有無、③未既婚、④職業

調査概要

【③配布・回収状況】

1) 回収率

	依頼数	有効回答数	回収率
第1回web調査	3,000	1,234	41%
第2回web調査	3,000	1,312	44%
中山間地域補足調査	2,000	608	30%

2) 回答者属性

県別票数

	第1回	第2回	中山間
徳島県	250	260	139
香川県	244	268	3
愛媛県	247	269	105
高知県	239	252	348
四国計	980	1,049	595
大阪府	246	259	0
その他・不明	8	4	13

年齢別票数

	第1回	第2回	中山間
10歳代	17	17	1
20歳代	217	234	4
30歳代	525	569	18
40歳代	310	327	57
50歳代	130	130	124
60歳代	31	28	156
70歳以上	4	7	245
不明	0	0	3

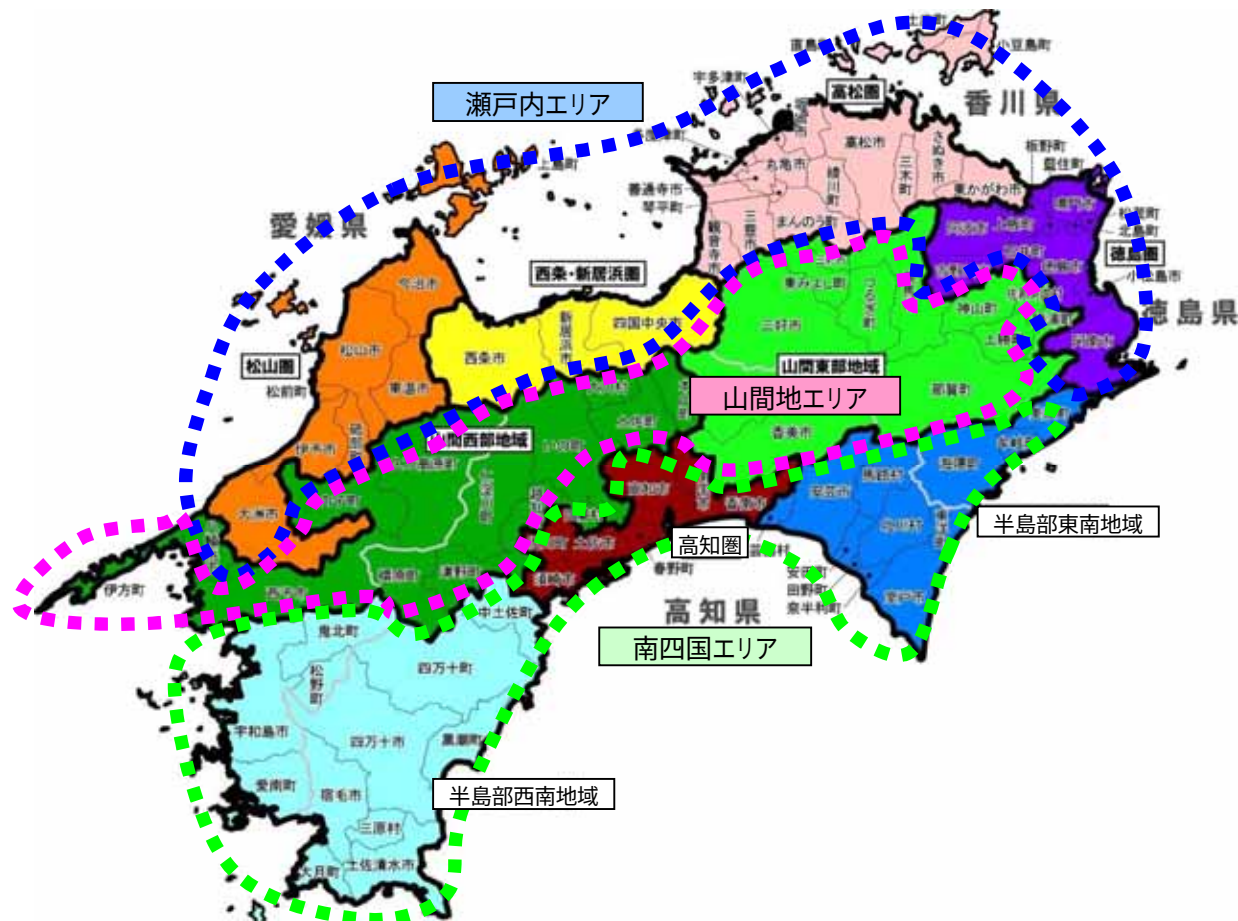
男女別票数

	第1回	第2回	中山間
男性	654	672	467
女性	580	640	130
不明	0	0	11

調査概要

【分析対象エリア】

- ・集計・分析にあたっては、地域構造の分析の観点から、地域別のクロス集計を行っている。
- ・集計を行う地域区分は以下の通り。



2. 調査結果概要 (集計)

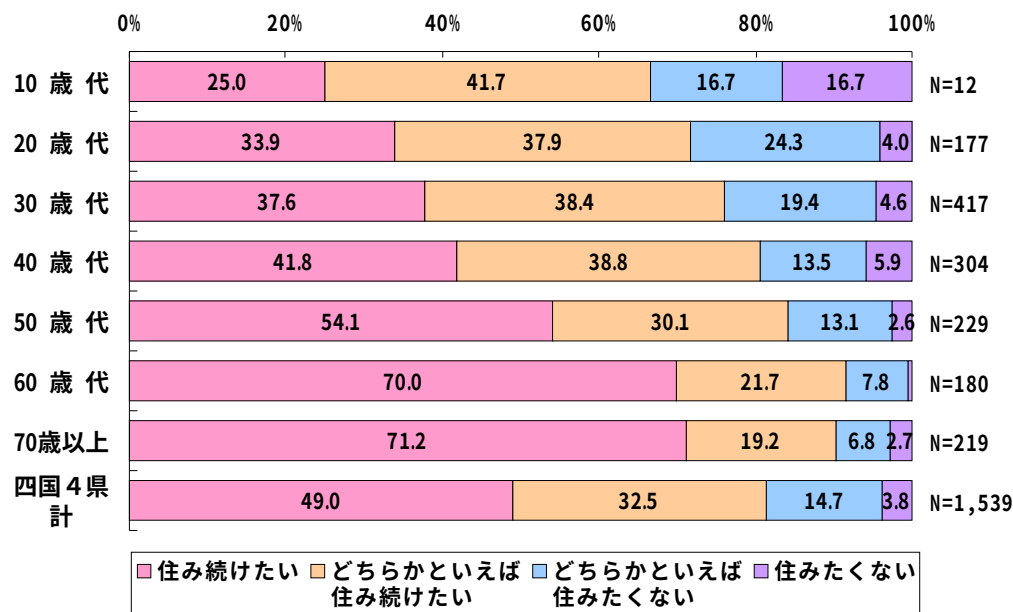
定住意向に係る傾向

・以下、地域別分析に係り、顕著な傾向の見られるものを中心に整理を行う。

【定住意向に係る傾向1】

- ・四国4県における現在居住地への定住意向を見ると、半数が「住み続けたい」、3割が「どちらかといえば住み続けたい」と定住意向が高い傾向にある。
- ・年齢階層別に見ると、高齢者ほど定住意向が高い傾向がみられる。

＜四国4県における定住意向＞

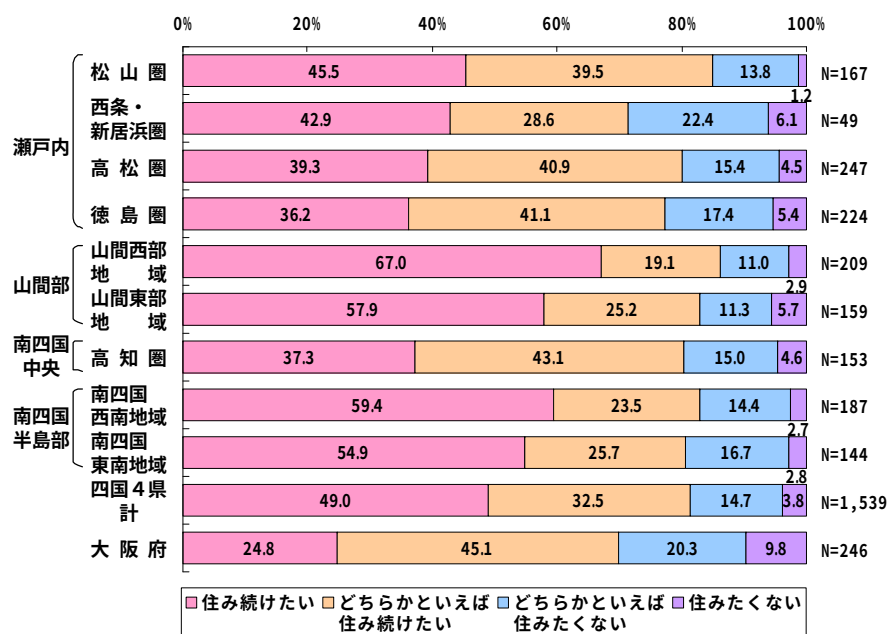


定住意向に係る傾向

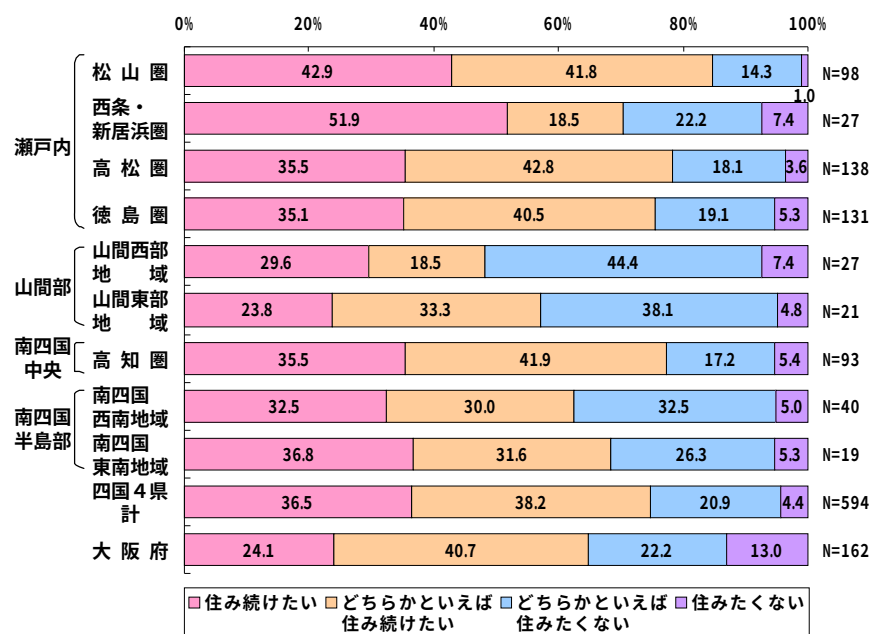
【定住意向に係る傾向2】

- ・現在居住地への定住意向を地域別に見ると、高齢の回答者が多い山間部や南四国半島部において、高い傾向が見られる。
- ・一方、20～39歳に着目して、定住意向を見ると、逆に山間部や南四国半島部において定住したくないという割合が高くなる傾向が見られる。

<地域別定住意向(全体)>



<地域別定住意向(20～39歳)>

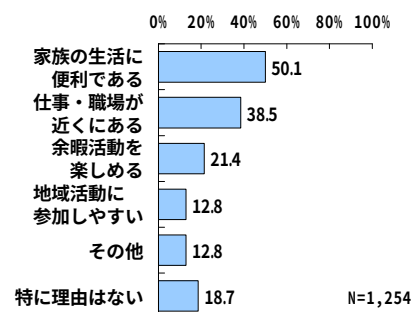


定住意向に係る傾向

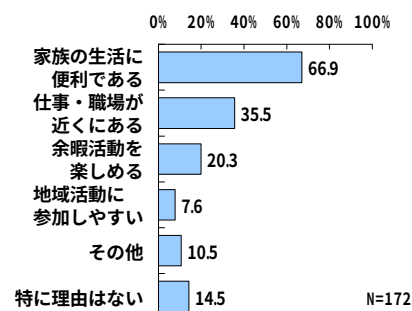
【定住意向に係る傾向3】

- ・現在居住地への住み続けたい理由としては、「家族の生活に便利」、「職場・仕事近くにある」が多くなっている。
- ・このうち、「家族の生活に便利」については、都市部（瀬戸内エリアや高知圏）の地域において、特に高くなっている。

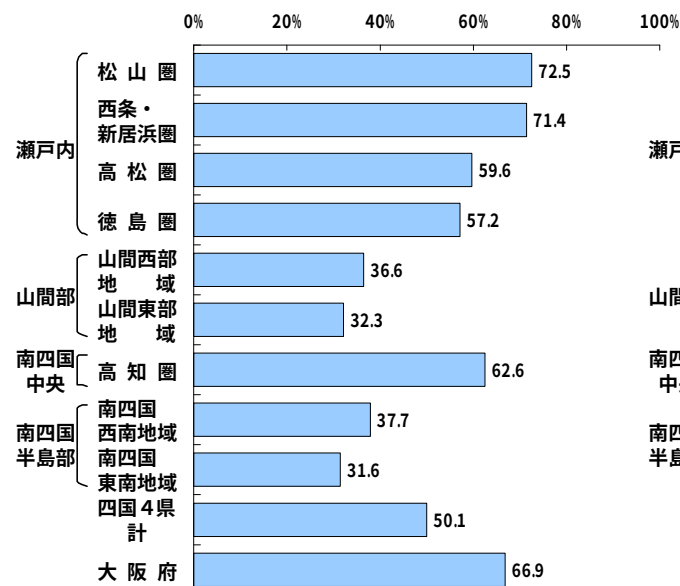
<住み続けたい理由> 〔四国4県〕



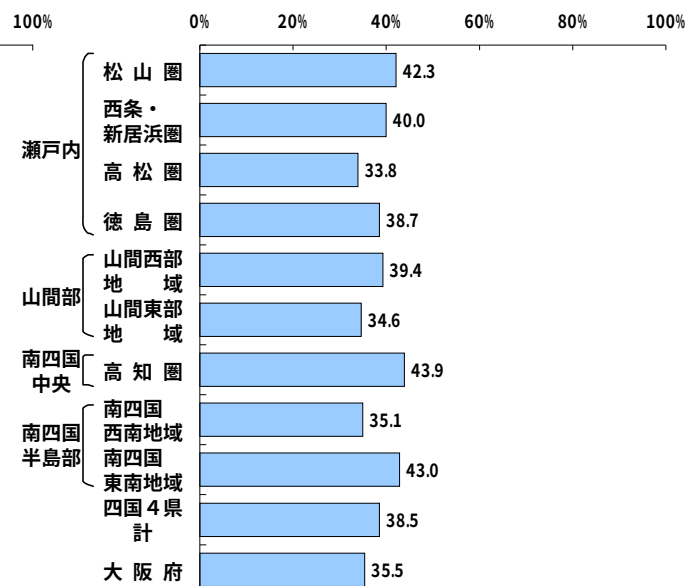
〔大阪府〕



<住み続けたい理由が「家族の生活に便利」>



<住み続けたい理由が「職場・仕事近くにある」>

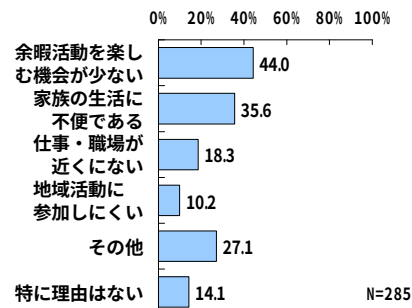


定住意向に係る傾向

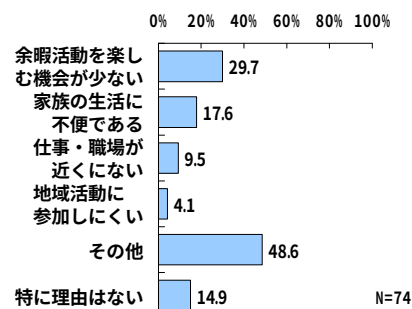
【定住意向に係る傾向4】

- ・現在居住地に住み続けたくない理由としては、「余暇活動を楽しむ機会が少ない」、「家族の生活に不便」が多くなっている。
- ・「余暇活動を楽しむ機会が少ない」については、山間東部地域、高知圏、半島部西南地域において高くなっている。
- ・「家族の生活に不便」については、山間部や南四国半島部において高くなっている。

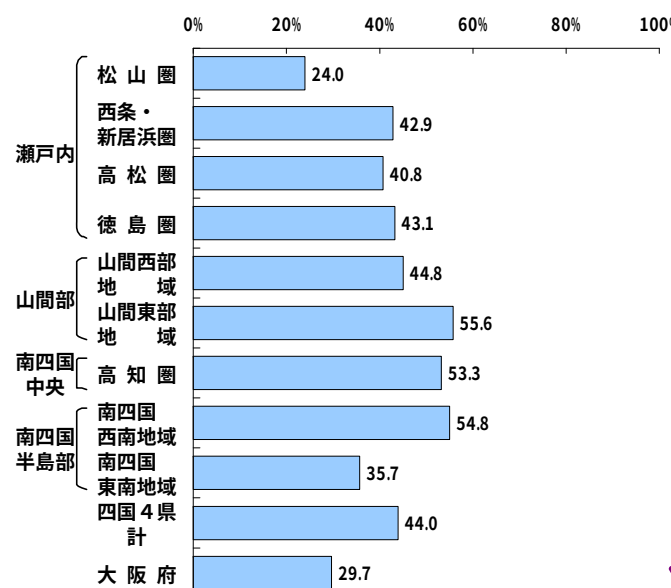
<住み続けたくない理由> (四国4県)



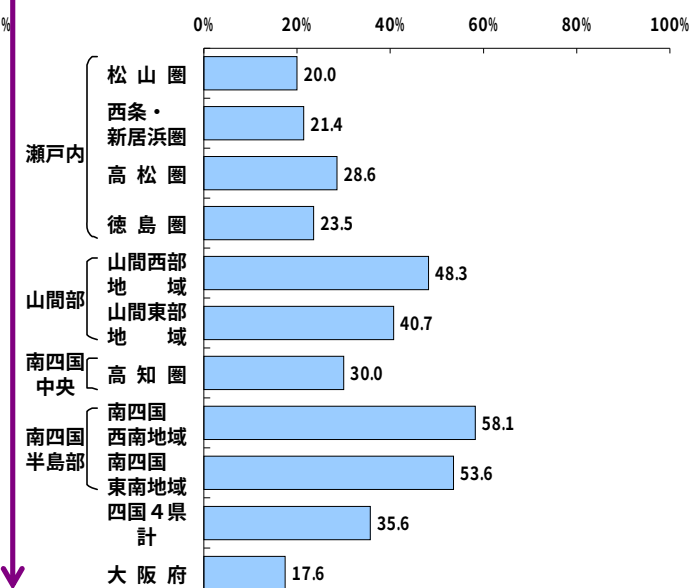
(大阪府)



<住み続けたくない理由が 「余暇活動を楽しむ機会 が少ない」>



<住み続けたくない理由が 「家族の生活に不便」>



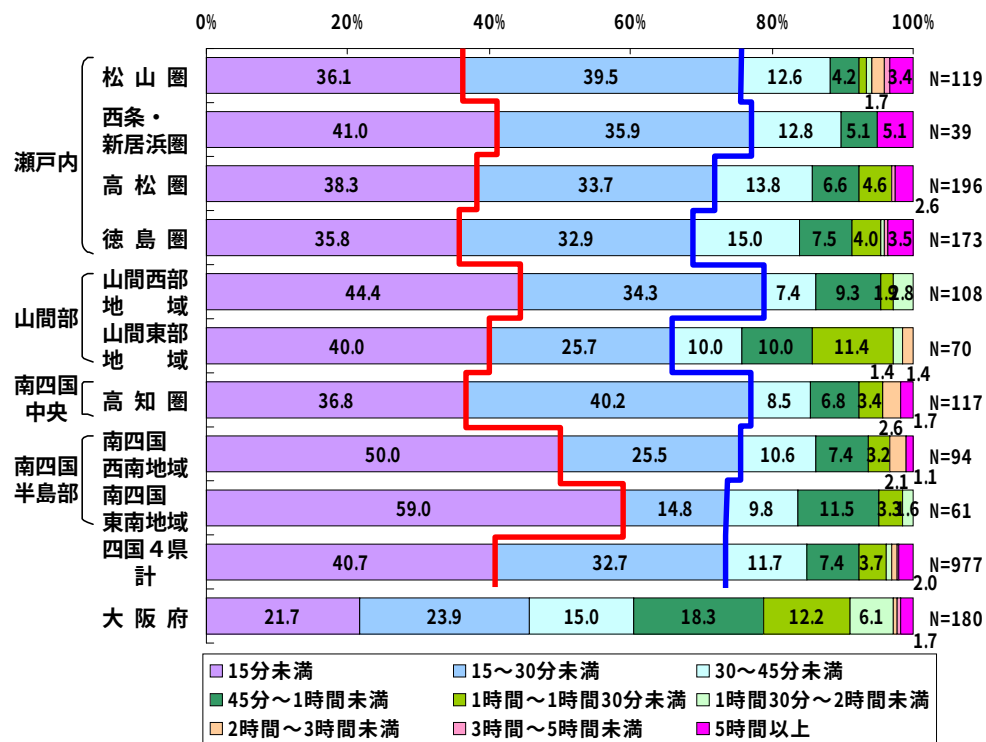
地域の利便性を次ページ以降に整理

地域の利便性1 (仕事)

【仕事に係る傾向】

- ・通勤に要する所要時間について見ると、南四国半島部において通勤時間15分未満 (約80%の方が許容する時間) の割合が高いが、30分未満 (約50%の方が許容する時間) で見ると地域差は大きくないものとなっている。

<通勤活動に要する所要時間>



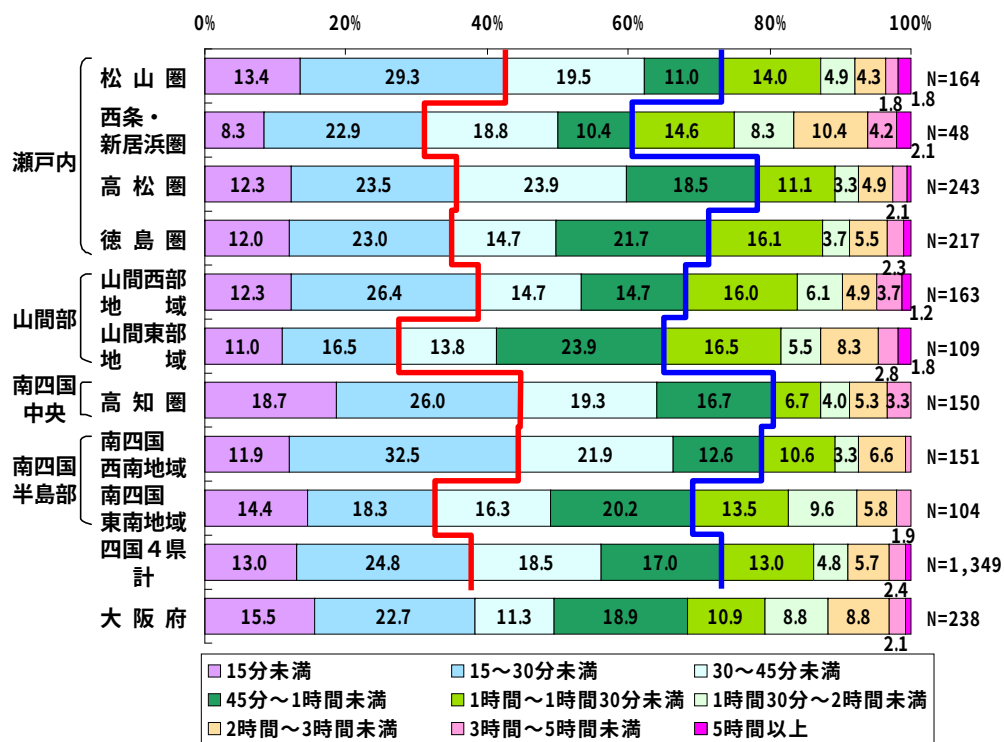
— 約80%が許容する時間
— 約50%が許容する時間

地域の利便性2（日常品の買い物）

【日常品の買い物に係る傾向】

- ・山間東部地域や南四国半島部東南地域においては、日常品の買い物に係る活動の所要時間が大きく、許容できる時間（約80%＝30分、約50%＝1時間）を満たさない割合も多いことから、利便性に問題を有すると考えられる。

＜日常品の買い物に要する所要時間＞



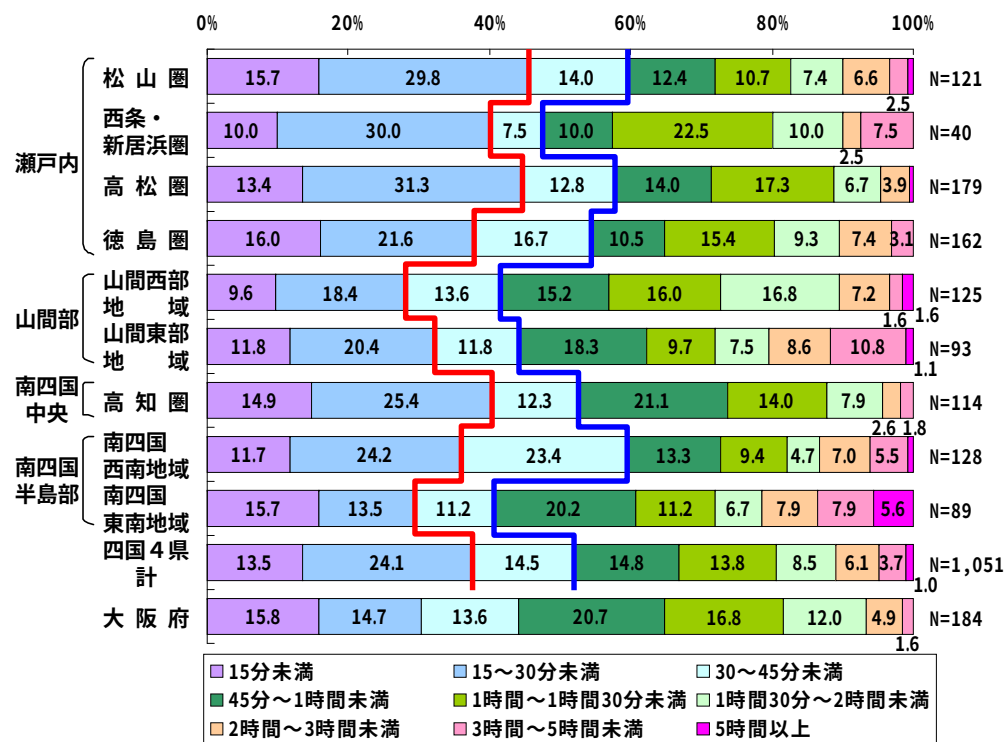
— 約80%が許容する時間
— 約50%が許容する時間

地域の利便性3 (通院)

【通院に係る傾向】

・高齢の回答者の多い山間部や南四国半島部においては、所要時間30分未満（約80%が許容できる）の割合がやや少ない傾向にある。

<通院に要する所要時間>



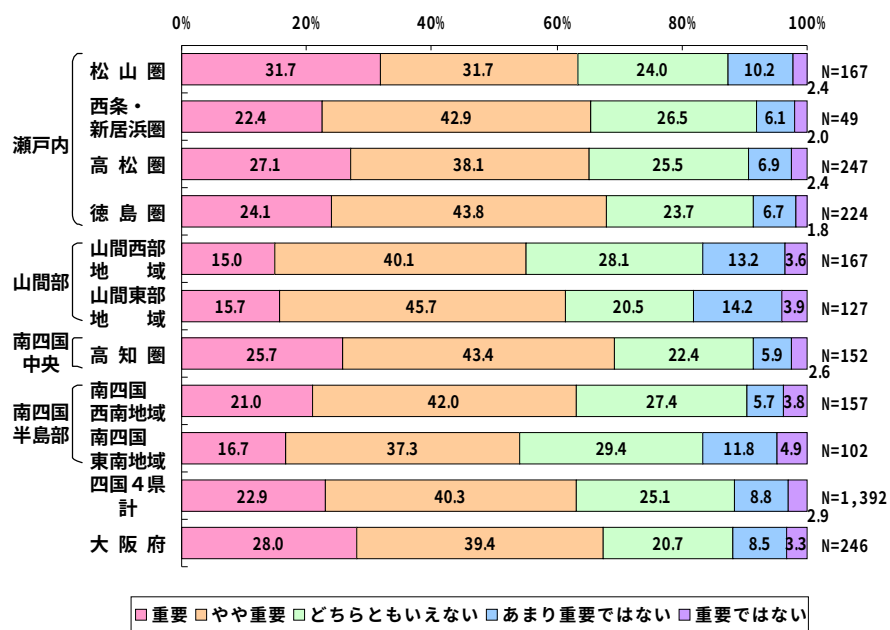
— 約80%が許容する時間
— 約50%が許容する時間

地域の利便性4 (余暇活動)

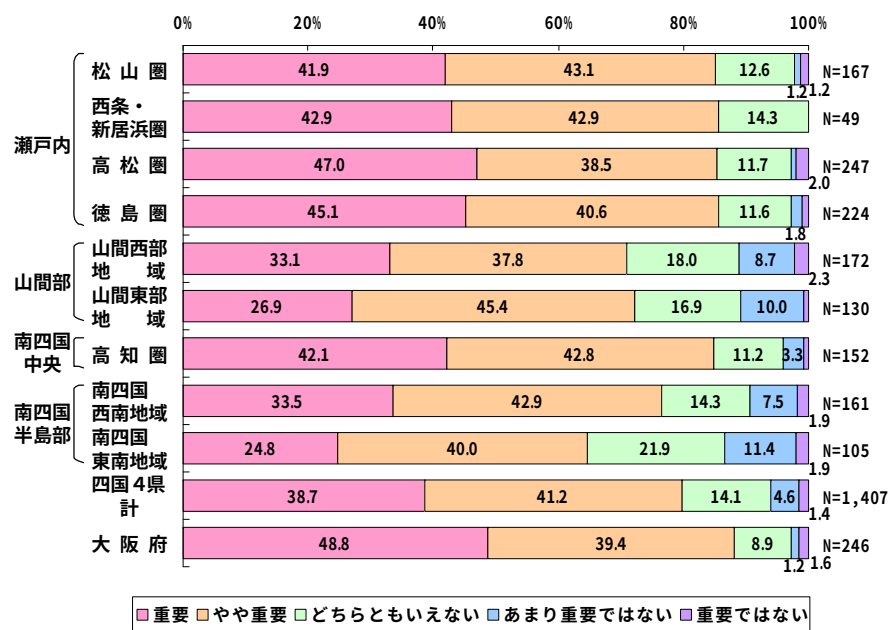
【余暇活動に係る傾向1】

- ・余暇活動に対する比重を見ると、現状よりも理想の方が高い傾向にある。
- ・また、都市部ほど、余暇活動に対して比重を置くことを理想とする割合が高くなっている。

<余暇活動に対する比重 (現実)>



<余暇活動に対する比重 (理想)>

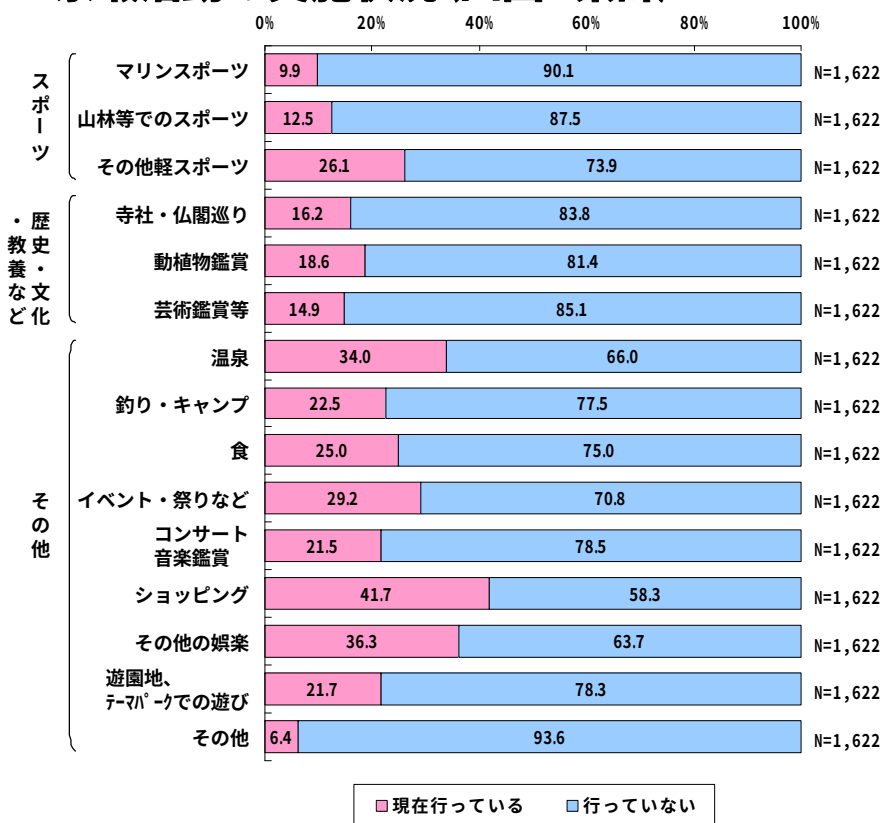


地域の利便性4 (余暇活動)

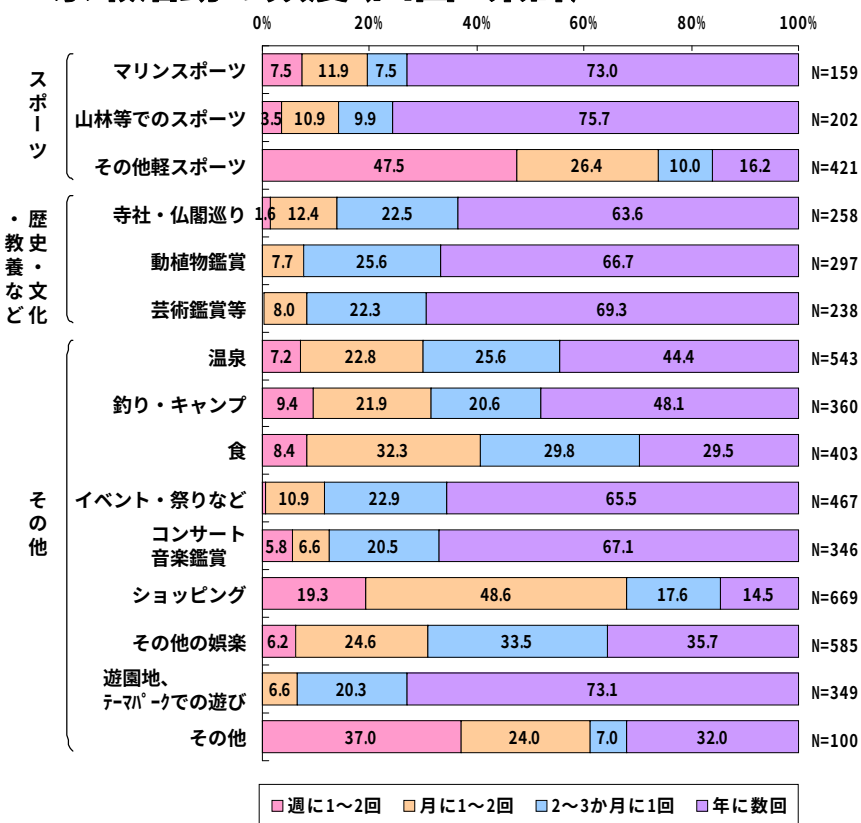
【余暇活動に係る傾向2】

- ・四国4県における余暇活動の実施状況や頻度をみると、「ショッピング(日常的なもの以外)」や「その他の娯楽」、「温泉」、「イベント・祭りなど」、「その他軽スポーツ」、「食」等が高くっており、特に「ショッピング」や「その他軽スポーツ」はその頻度が高いものとなっている。

<余暇活動の実施状況(四国4県計)>



<余暇活動の頻度(四国4県計)>



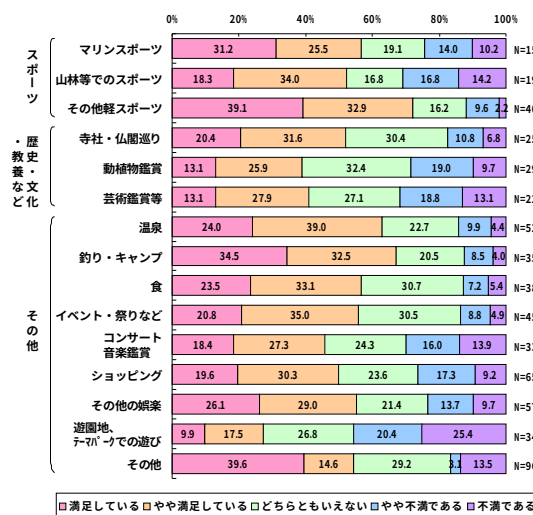
地域の利便性4 (余暇活動)

【余暇活動に係る傾向3】

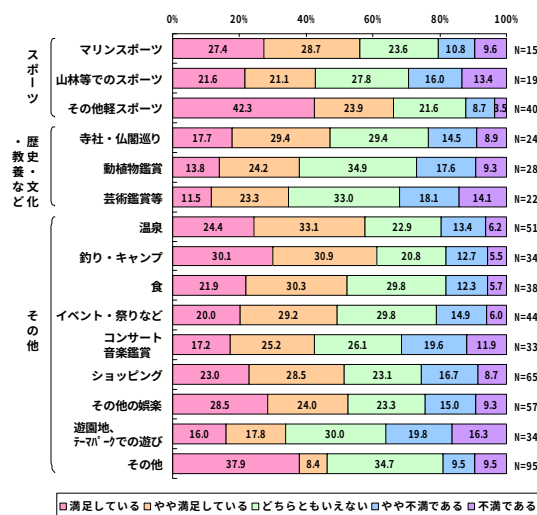
- ・四国4県における余暇活動の活動場所の「距離」、「移動手段」、「量」に係る満足度を見ると、「遊園地、テーマパーク」、「芸術鑑賞」、「動植物鑑賞」、「山林等でのスポーツ」、「ショッピング」等に対する不満が高い傾向にある。
- ・四国4県における余暇活動の活動場所の「質」については、上記よりも不満は低いものの、同様の活動で不満が相対的に高い傾向にある。

<余暇活動の活動場所に対する満足度>

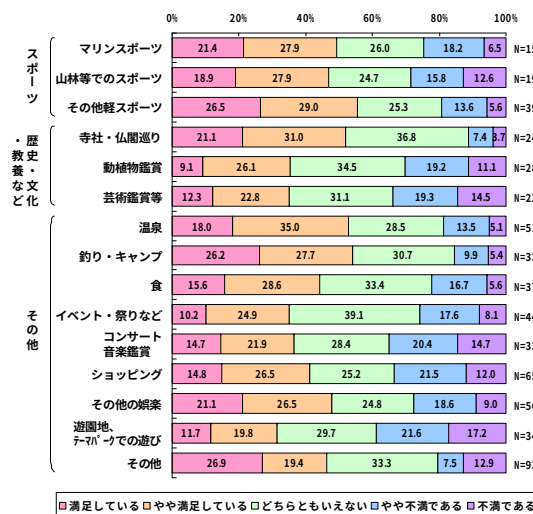
(距離)



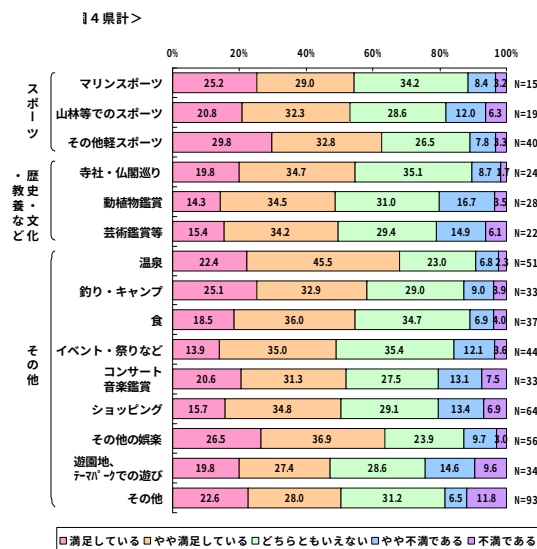
(移動手段)



(量)



(質)

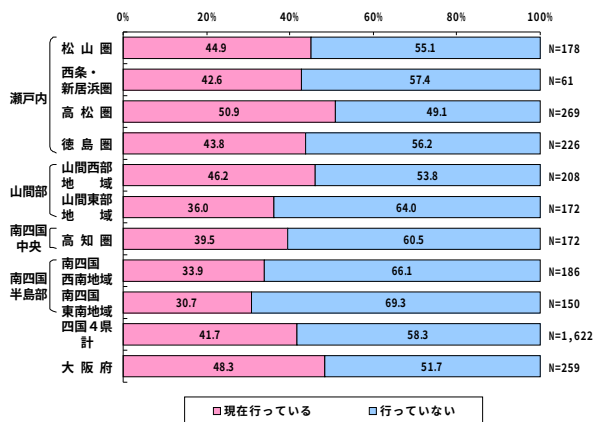


地域の利便性4 (余暇活動)

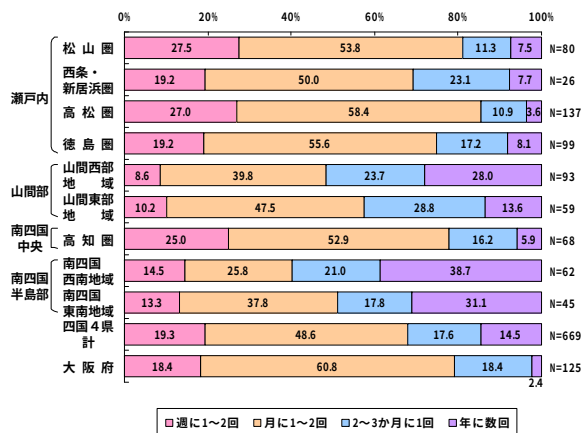
【余暇活動に係る傾向4】

- ・余暇活動として頻度が高く、活動に係る不満が高くなっている「ショッピング」についてみると、山間東部地域や南四国半島部東南地域において、その活動の頻度が低くなっている。
- ・山間部や南四国半島部におけるショッピングの実施場所としては、県庁所在都市もある程度見られるが、県庁所在都市を含む圏域と比較して、相対的には県庁所在都市以外が多くなっている。

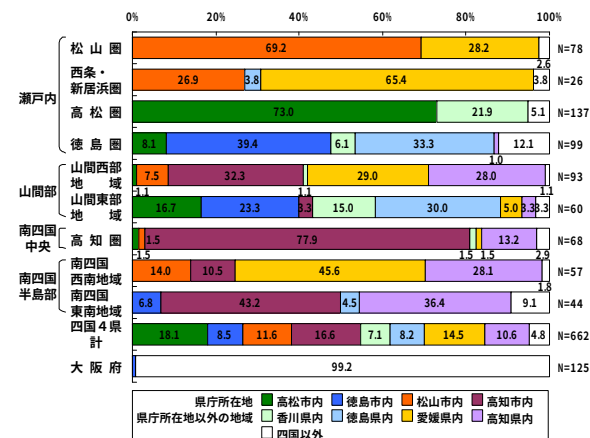
<ショッピングの実施状況>



<ショッピングの頻度>



<ショッピングの実施場所>

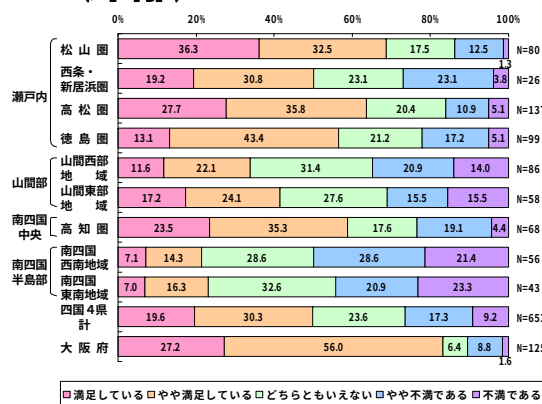


地域の利便性4 (余暇活動)

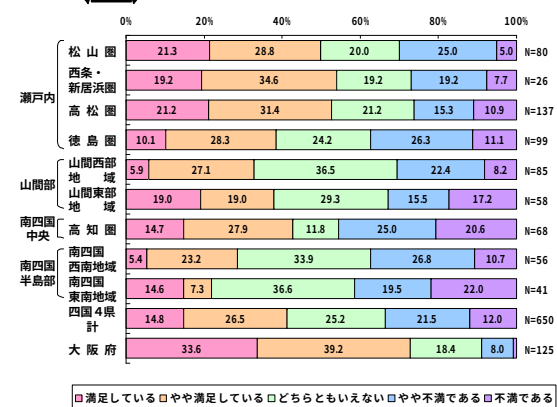
【余暇活動に係る傾向5】

- ・ショッピングの活動場所の満足度を見ると、「距離」、「移動手段」に関して、山間部や南四国半島部における不満が高い傾向にある。

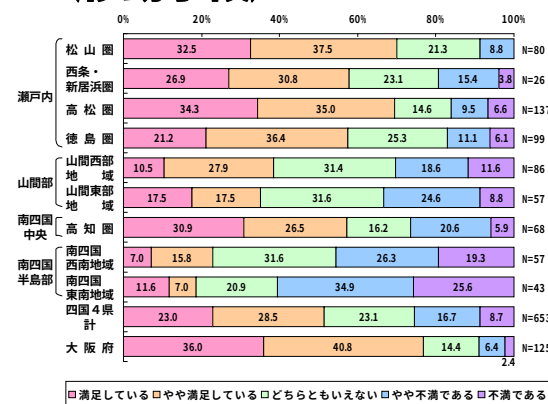
＜ショッピングの活動場所に対する満足度＞ (距離)



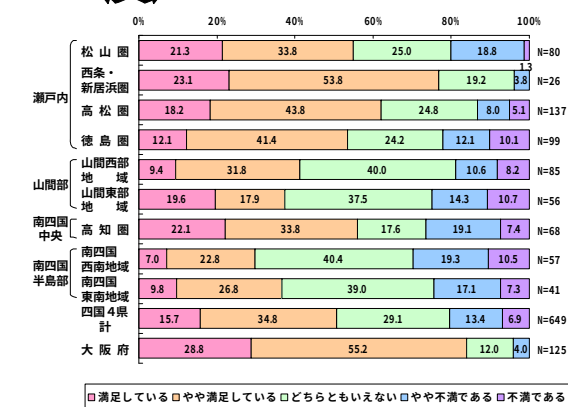
(量)



(移動手段)



(質)

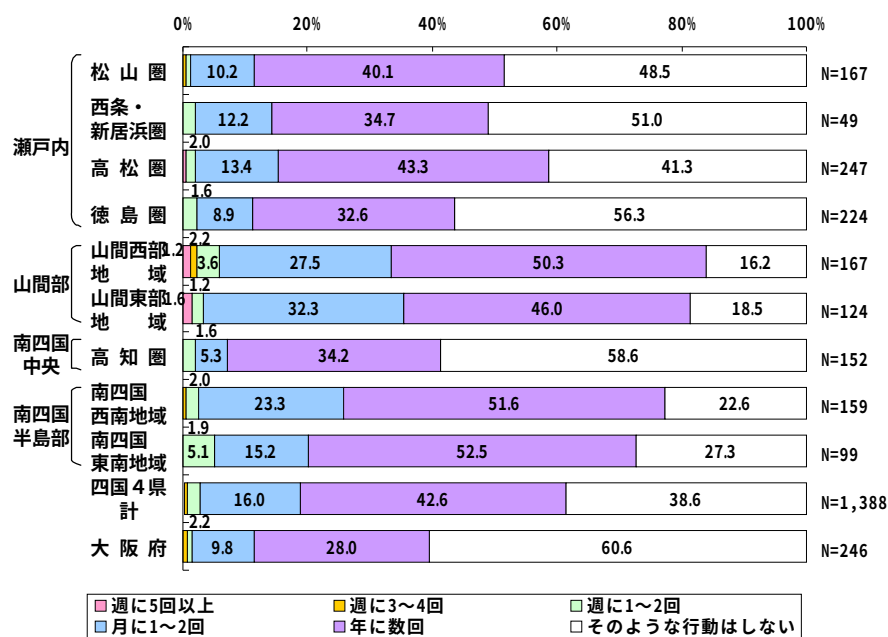


地域活動に係る傾向

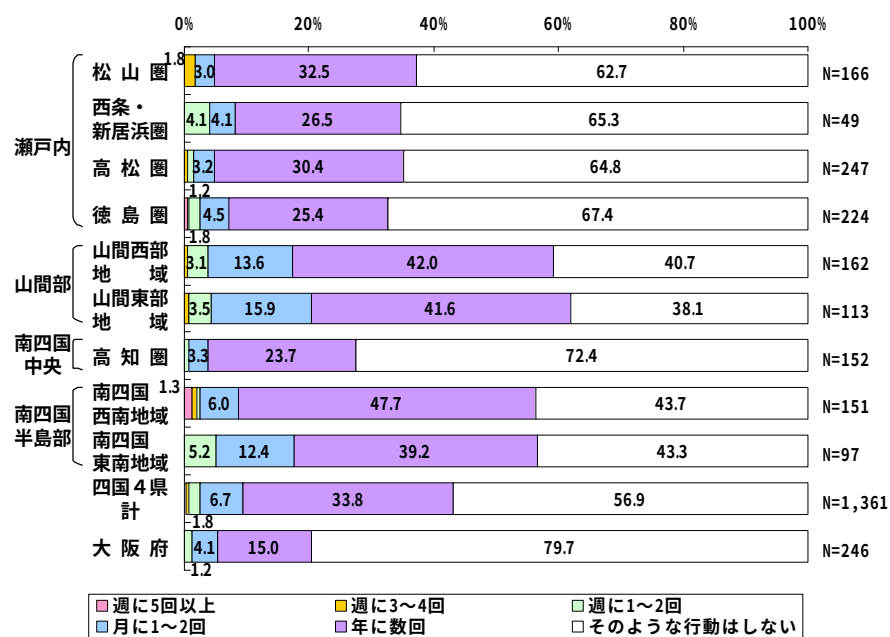
【地域活動に係る傾向1】

- ・地域活動（地域の集会・寄合、ボランティア活動）については、山間部や南四国半島部において、頻度が高くなる傾向が見られる。

＜地域の集会・寄合の頻度＞



＜ボランティア活動の頻度＞

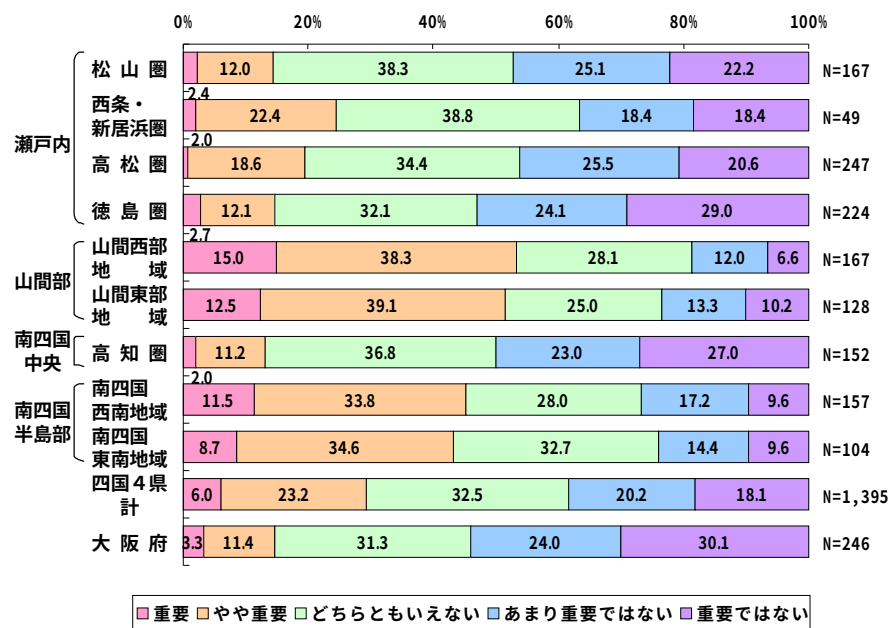


地域活動に係る傾向

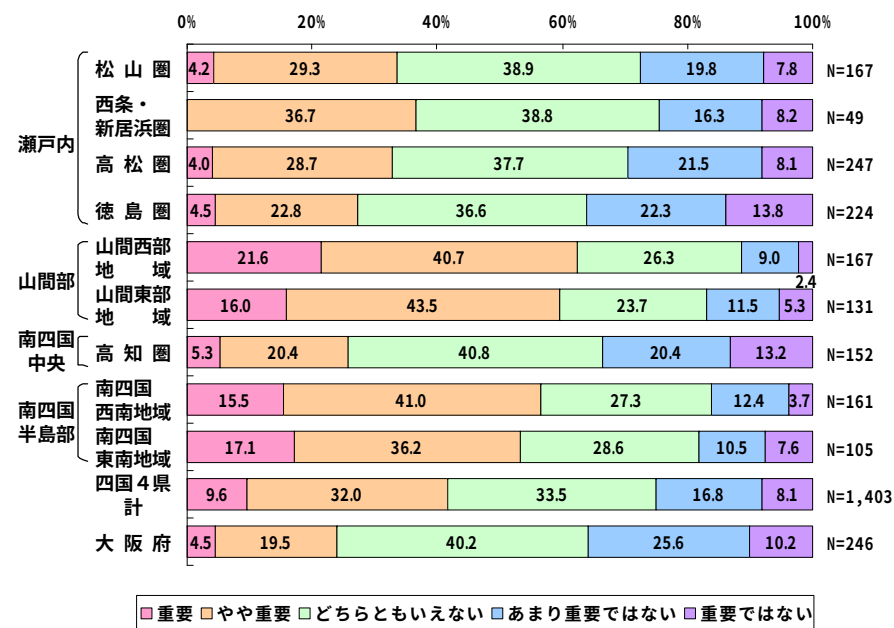
【地域活動に係る傾向2】

- ・地域活動に対する比重を見ると、現状よりも理想の方が高い傾向にある。
- ・また、地域活動に対して比重を置くことを理想とする割合は、山間部や南四国半島部の方が高い傾向にある。

<地域活動に対する比重 (現実)>



<地域活動に対する比重 (理想)>



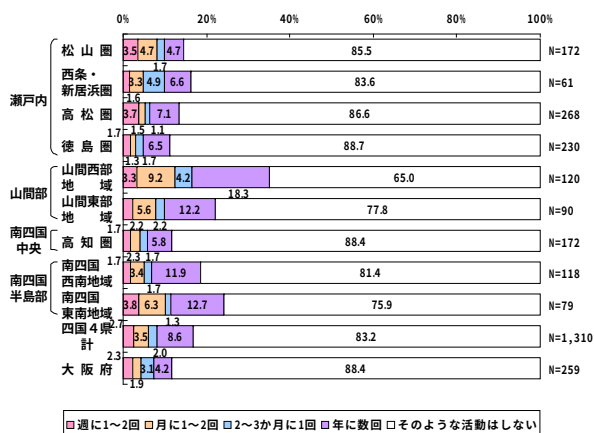
地域活動に係る傾向

【地域活動に係る傾向3】

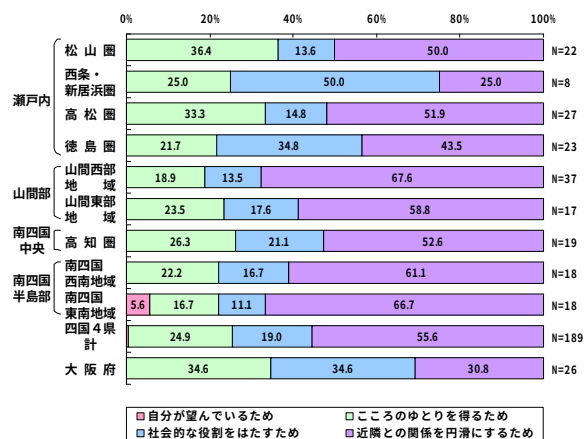
- ・地域活動の個別内容 (p.22～25) を見ると、いずれの活動についても、山間部や南四国半島部において頻度が高い。
- ・これらの地域における活動の理由については、「近隣との関係を円滑にするため」といった義務的・受動的内容が多い。一方、「自分で望んでいる」という自主的に取組む意欲が高い傾向にある。
- ・今後の活動意向についても「活動したい」割合が高い傾向にある。

<福祉活動 (高齢者の介護・訪問や子育てサークル等) について>

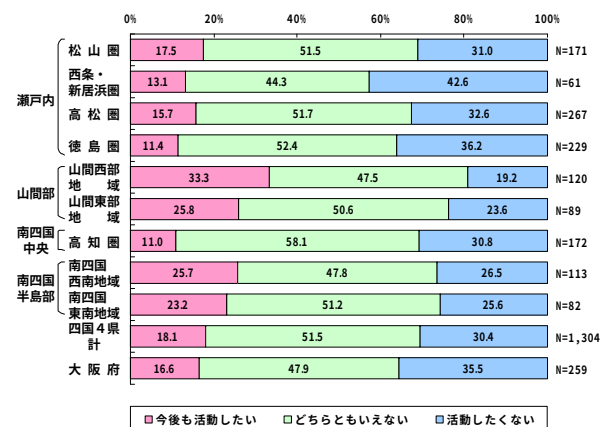
(頻度)



(活動理由)



(今後の活動意向)

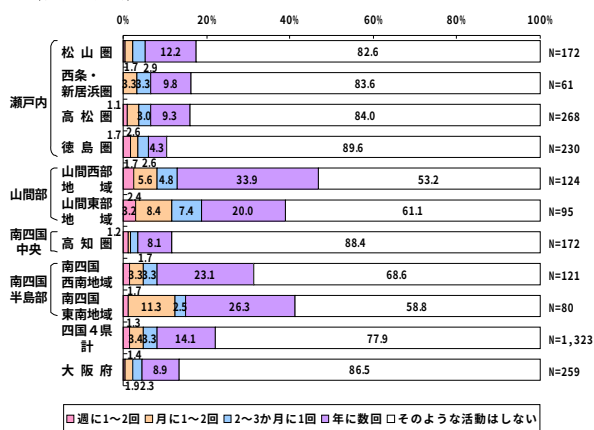


地域活動に係る傾向

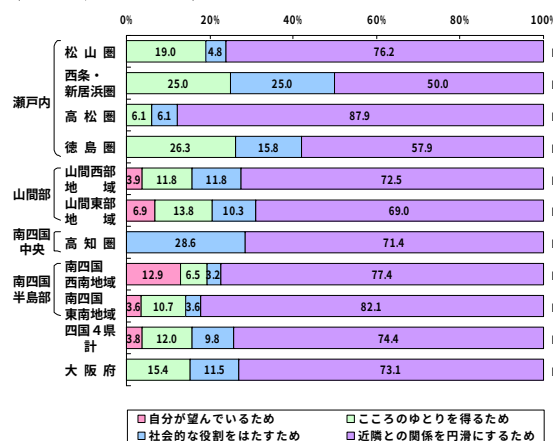
【地域活動に係る傾向4】

＜防犯・防災活動（見回り等）について＞

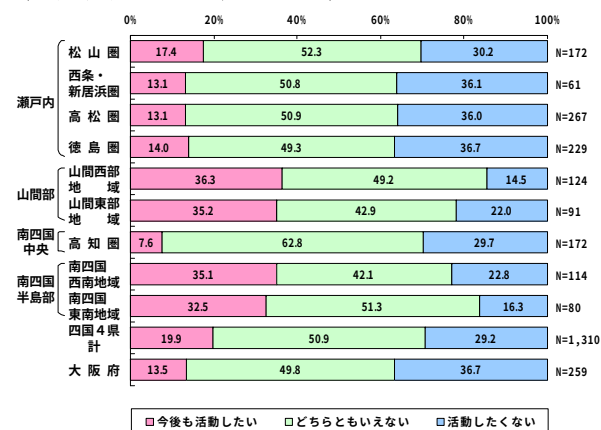
（頻度）



（活動理由）

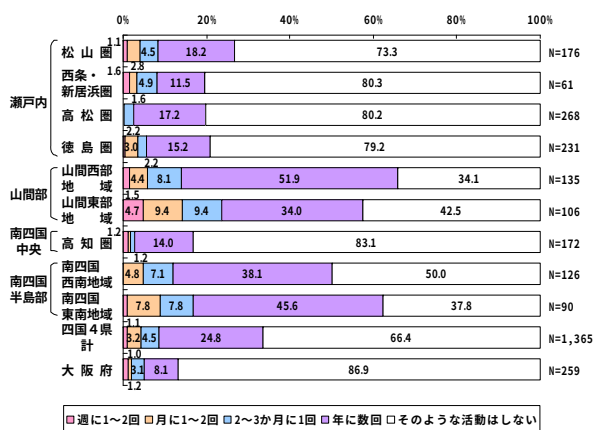


（今後の活動意向）

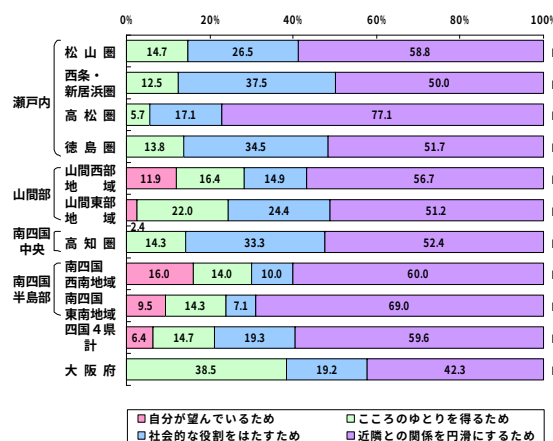


＜身のまわりの生活環境を向上させるための活動（清掃や花いっぱい運動等）について＞

（頻度）

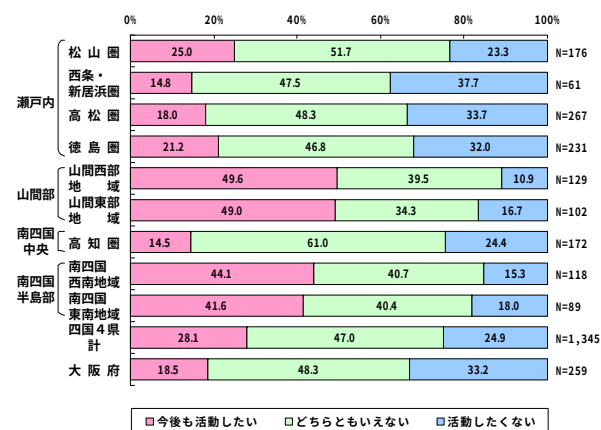


（活動理由）



（今後の活動意向）

向上させるための活動＞

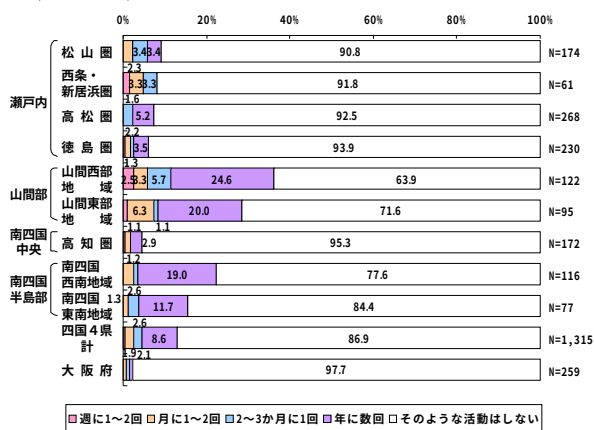


地域活動に係る傾向

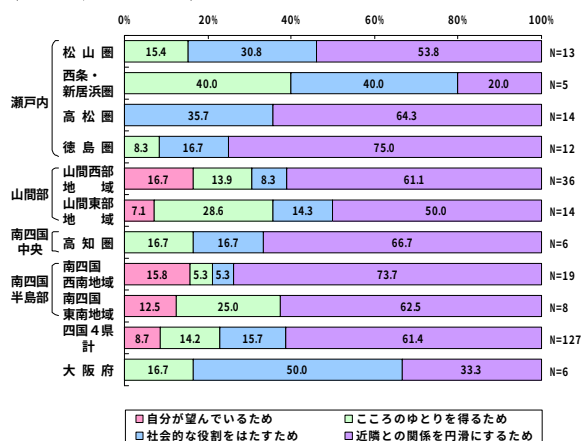
【地域活動に係る傾向5】

＜共助・共働活動（共同森林、共同農地の管理等）について＞

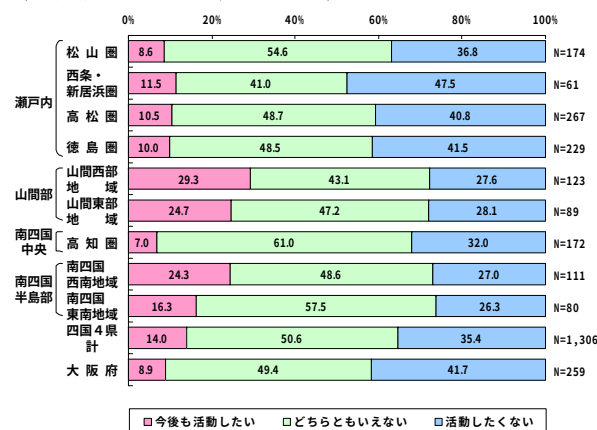
〔頻度〕



〔活動理由〕

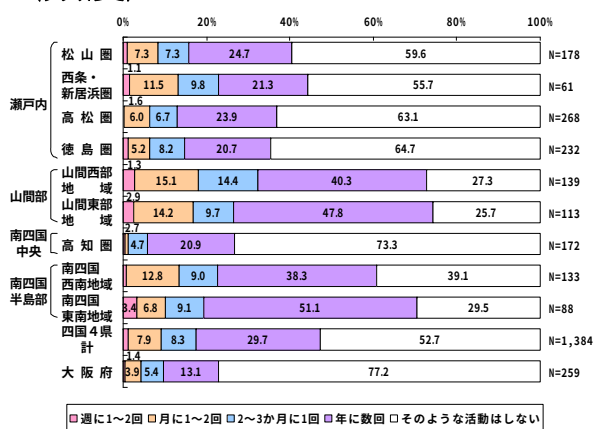


〔今後の活動意向〕

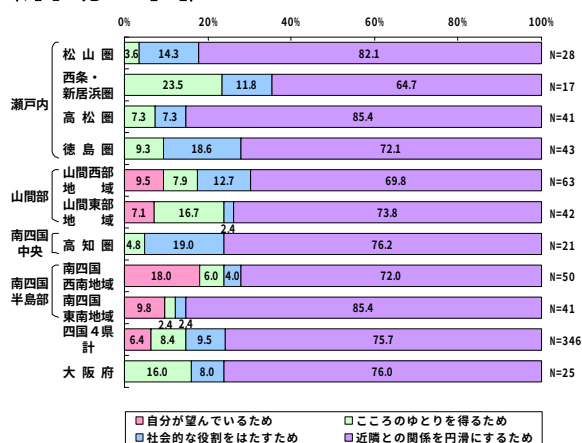


＜地域組織の活動（自治会等）について＞

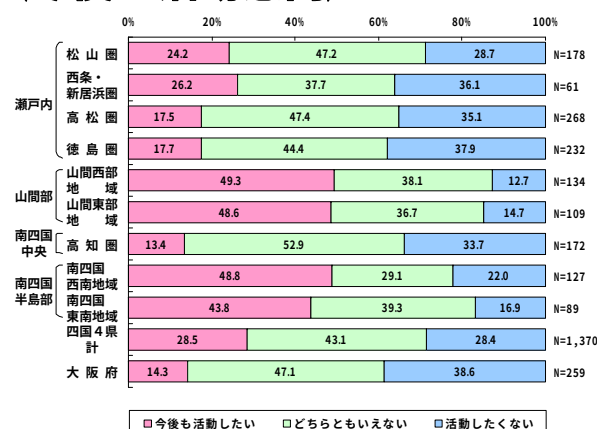
〔頻度〕



〔活動理由〕



〔今後の活動意向〕

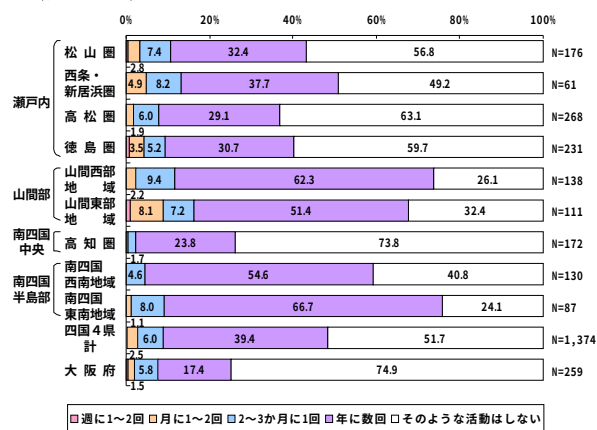


地域活動に係る傾向

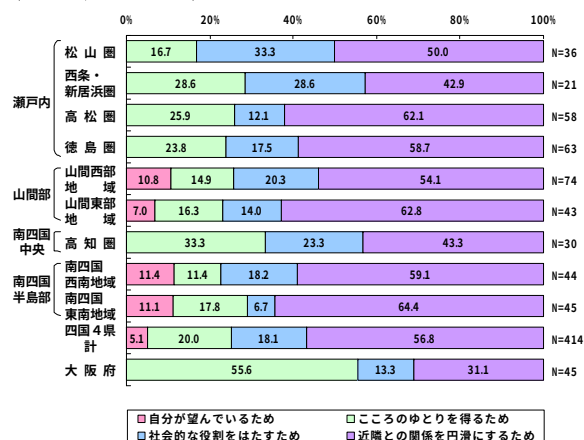
【地域活動に係る傾向6】

＜地域を活性化する活動（祭り、運動会、イベント等）について＞

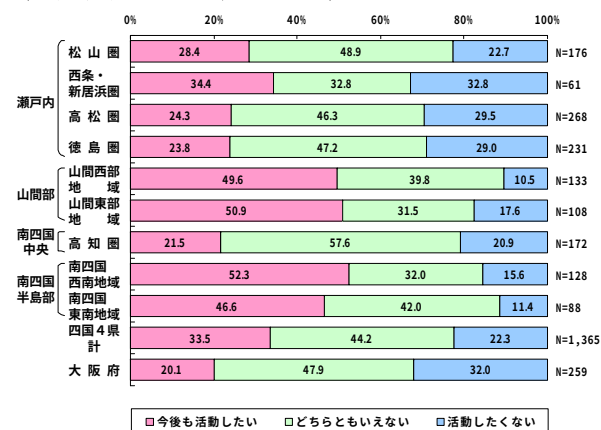
〔頻度〕



〔活動理由〕



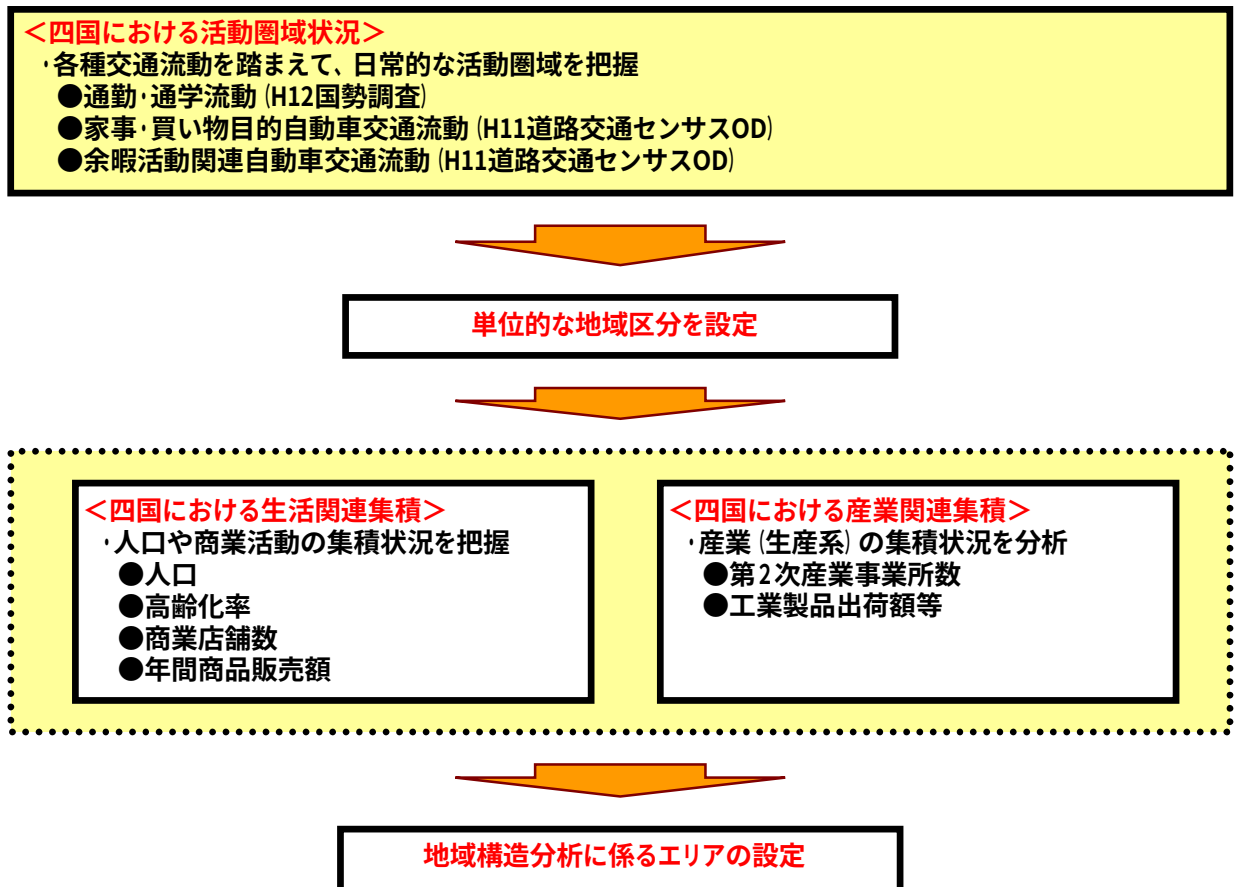
〔今後の活動意向〕



地域構造分析に係るエリア設定について

1. エリア設定の流れ

- ・地域構造分析に係るエリアは、四国における活動圏域状況を踏まえての単位的な地域区分を設定したうえで、それを、四国における生活や産業に係る集積状況等を勘案して集約することにより、設定を行うものとした。



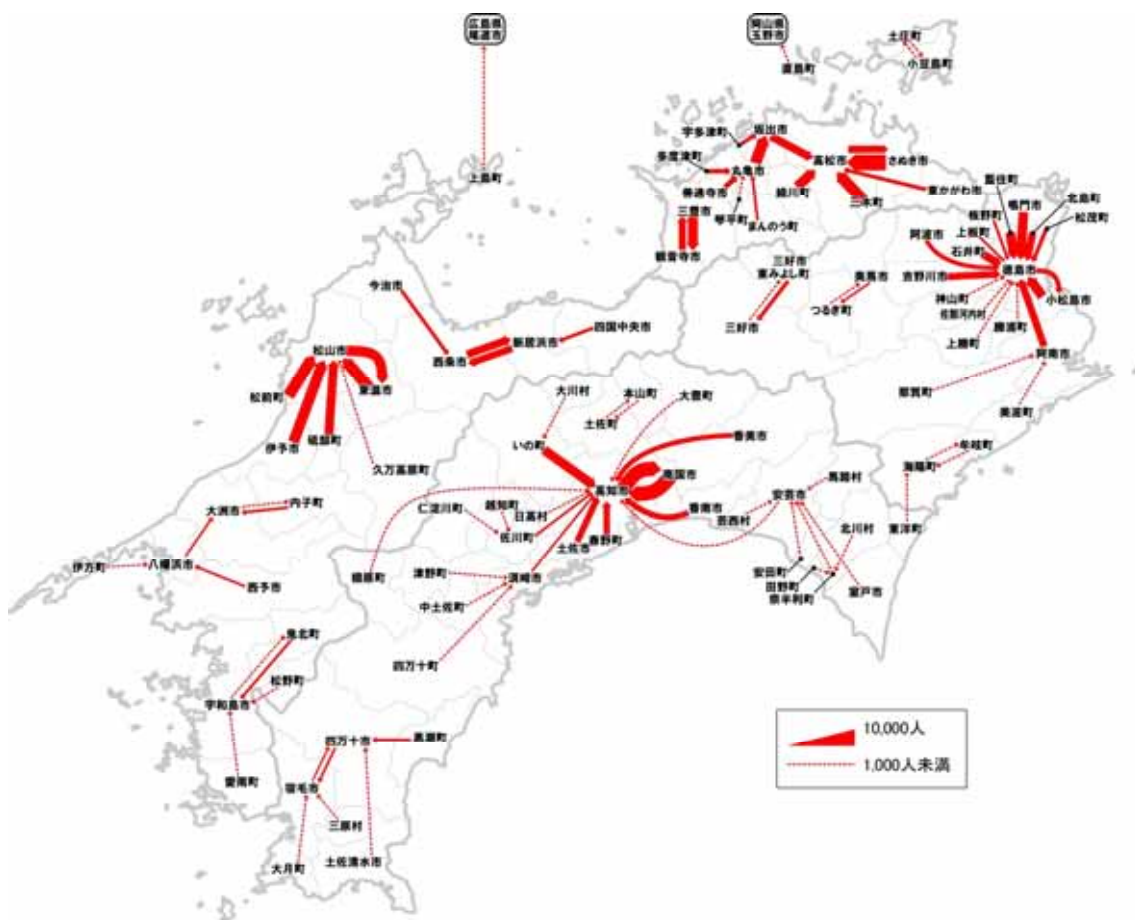
2. 単位的な地域区分の設定

- 単位的な地域区分については、交通流動データにより都市圏の県庁所在地と周辺都市との結びつきを整理し、県庁所在都市を中心とする圏域の設定を行うものとした。

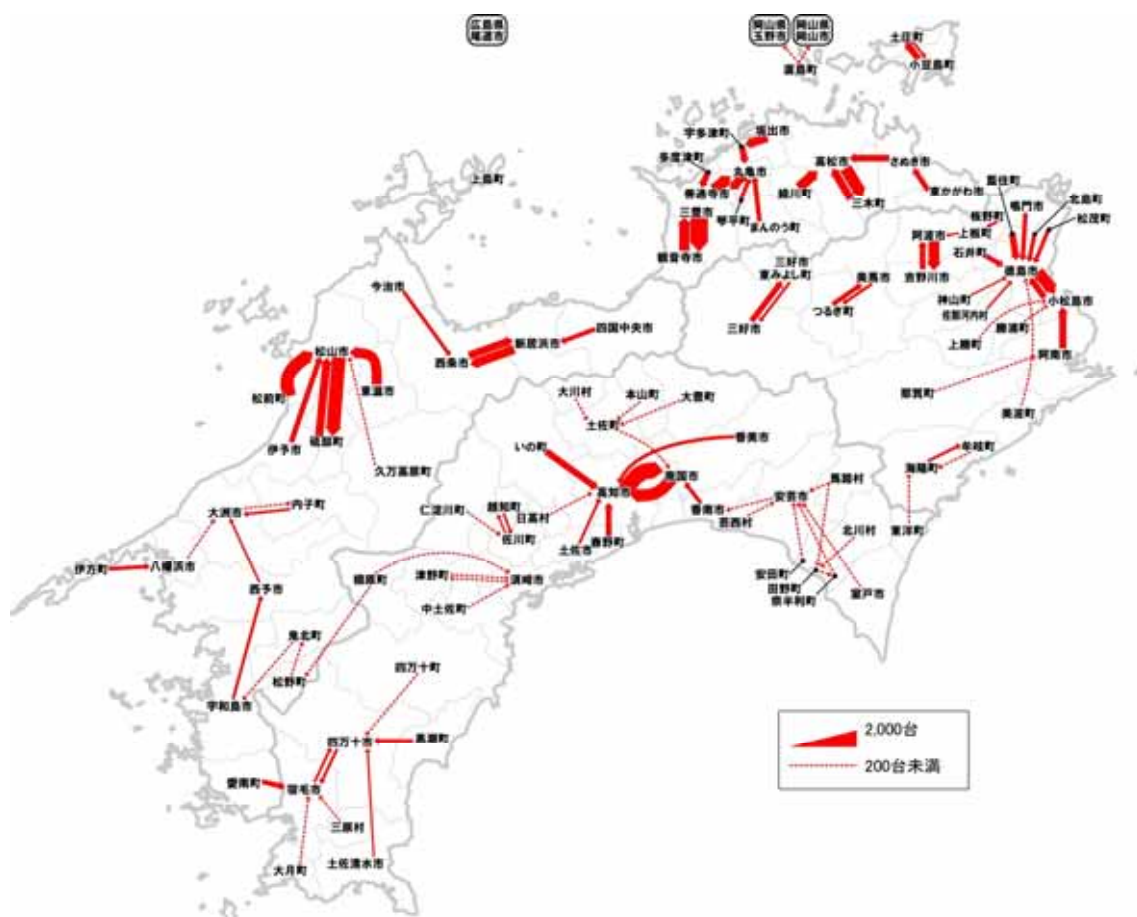
(1) 四国における交通流動の把握

- 生活行動に係る交通流動として、通勤・通学、買い物、娯楽・社交等の市町村別第1位流動を把握した。

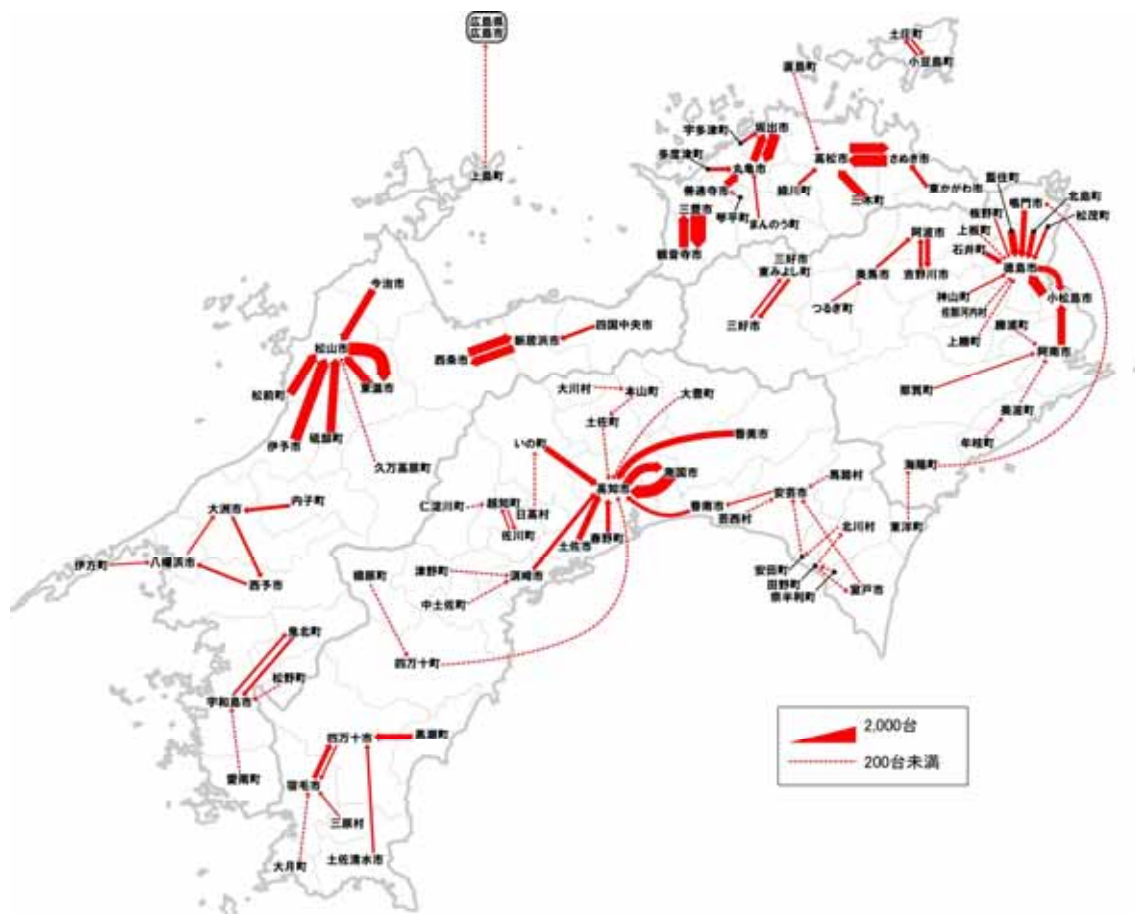
＜通勤・通学流動（市町村別第1位流動；H12 国勢調査）＞



<家事・買い物目的自動車流動（市町村別第1位流動；H11 道路交通センサス）>



<社交・娯楽・観光等目的自動車流動（市町村別第1位流動；H11 道路交通センサス）>

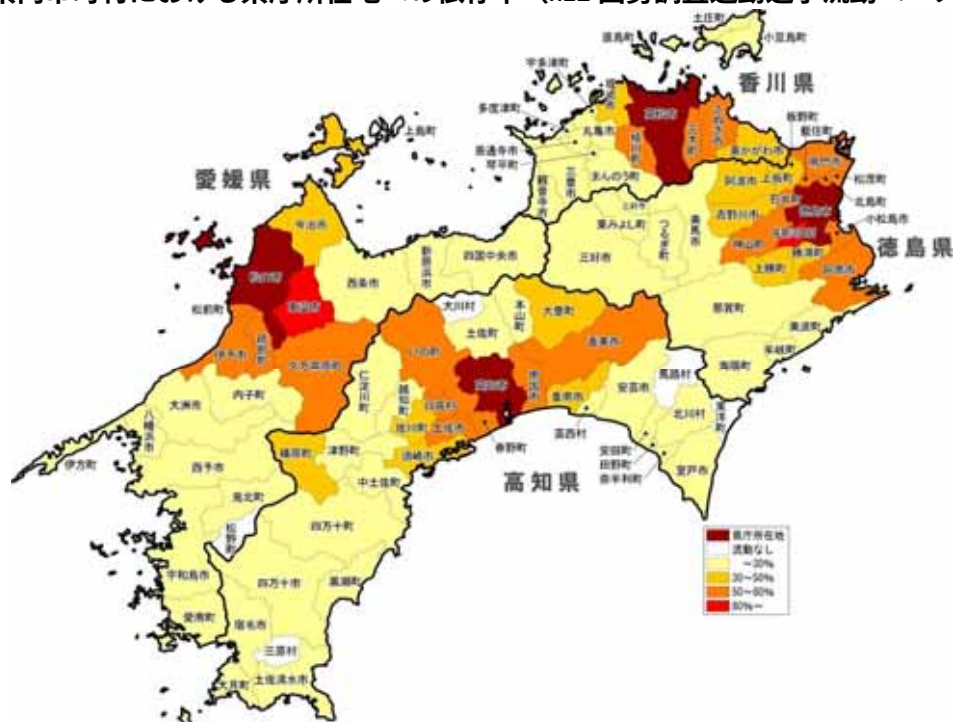


(2) 県庁所在都市への依存率の把握

- ・ 前述の生活行動に係る交通流動として、目的により若干の差異がみられるものの、概ね近い傾向にあることから、国勢調査通勤通学流動ベース（H12）で、各県内市町村における県庁所在地への依存率を算出のうえ、その依存率の大きさを色分け表現した。

$$\text{通勤通学の中心都市への依存率} = \frac{\text{中心都市への流出者数}}{\text{他市町村への流出者数の合計}}$$

<各県内市町村における県庁所在地への依存率（H12 国勢調査通勤通学流動ベース）>



注）各県において、県庁所在地への依存率を表現している

(3) 県庁所在都市を中心とする圏域の設定

- ・上記の依存傾向を踏まえ、以下の2つの条件を基本に、県庁所在地を中心とする圏域を設定する。

①30%以上の県庁所在都市への通勤・通学依存（圏域に一定の広がりを持たせるため）

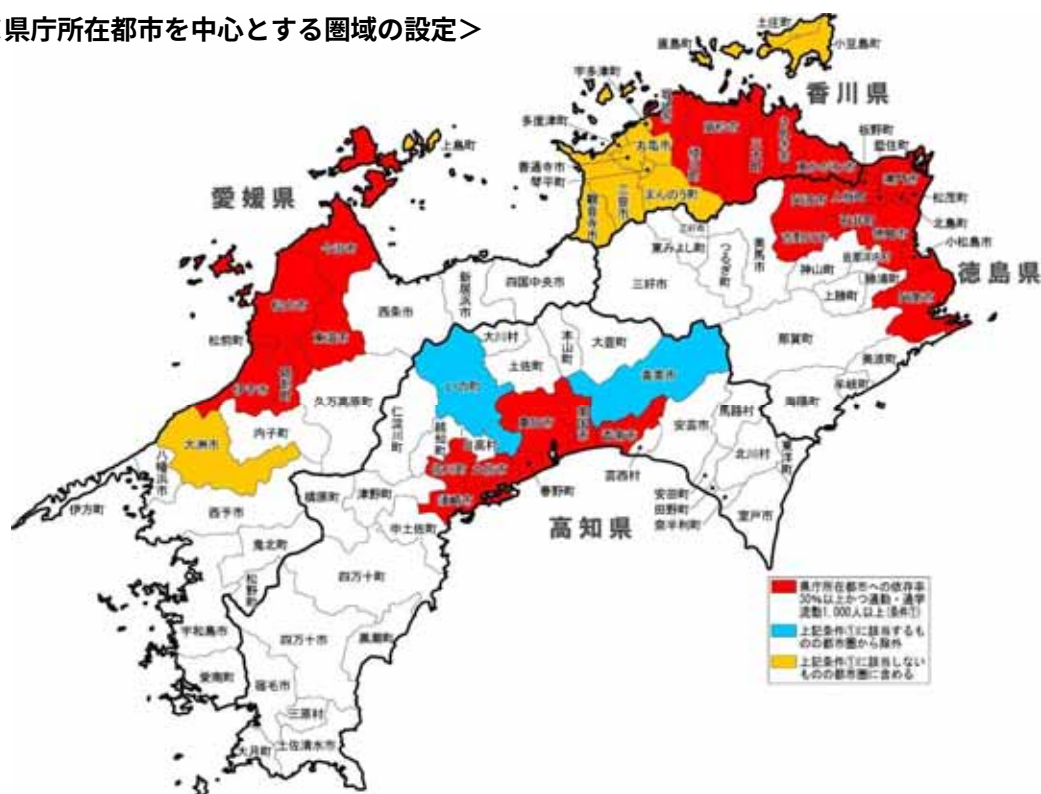
②県庁所在都市への通勤・通学流動が1,000人以上（流動量が少ない都市を除外するため）

- ・ただし、上記の基準に基づく圏域設定が、地域の状況等から妥当といえない箇所も存在しているため、このような箇所を特例箇所として考慮し、県庁所在地を中心とする圏域を下表のように設定した。

<県庁所在地を中心とする圏域の設定>

		特 例（条件に該当しない箇所）
松山圏	松山市、今治市、東温市、砥部町、伊予市、大洲市	【大洲市（圏域に含める）】愛媛県西部で大洲市等を中心とする圏域が形成されているが、大洲市は、松山市とのつながり（依存率）が非常に高いことから、松山圏として連担して捉えることが妥当と判断した。 ※なお、八幡浜市や西予市については、松山市との結びつき（松山市依存傾向）や集積の連担性を考慮し、松山圏に含めないものと判断した。 大洲市；松山市依存率 21.8% (758 人) 八幡浜市；松山市依存率 4.5% (149 人) 西予市；松山市依存率 4.2% (159 人) ※また、島嶼部（上島町）は、今治等とフェリー等でつながっており、生活・産業について一体的に検討すべきであることから、松山圏域に含めるものとした。
高松圏	香川県内全市町	【丸亀市以西の香川県内市町（圏域に含める）】丸亀市以西では高松市への依存傾向は大きいものではないが、通勤通学流動図をみると、坂出市、丸亀市を中心とする圏域、三豊市・観音寺市による圏域が連担している状況にあるため、高松都市圏と坂出市～丸亀市～三豊市～観音寺市の圏域を一体として高松圏と捉えることが妥当と判断した。 ※なお、丸亀市以西の香川県内市町と高松市との結びつきは以下の通り。 丸亀市；高松市依存率 26.6%(6,902 人) 宇多津町；高松市依存率 16.1%(928 人) 多度津町；高松市依存率 14.6%(1,056 人) 普通寺市；高松市依存率 13.2%(1,202 人) 琴平町；高松市依存率 16.1%(475 人) まんのう町；高松市依存率 15.4%(970 人) 三豊市；高松市依存率 8.6%(1,332 人) 観音寺市；高松市依存率 6.4%(729 人) ※また、島嶼部は、高松とフェリーでつながっており、生活・産業について一体的に検討すべきであることから、高松圏域に含めるものとした。
徳島圏	徳島市、松茂町、北島町、藍住町、鳴門市、板野町、上坂町、阿波市、吉野川市、佐那河内村、小松島市、阿南市	
高知圏	高知市、南国市、香南市、春野町、日高村、土佐市、須崎市、佐川町	【いの町（圏域から除外）】旧伊野町（高知市依存率 72.8%）、旧吾北村（同 12.7%）、旧本川村（40.9%；村外流出者 44 名のうち 18 名が高知市）の合併による都市。旧伊野町が高知市のベッドタウンで相対的に人口が大きいことから、高知市への依存率の高い圏域となっているが、旧吾北村や旧本川村は山間地域とすることが妥当と考えられるため、高知圏から除外した。 【香美市（圏域から除外）】旧土佐山田町（48.6%）、旧香北町（26.3%）、旧物部村（18.6%）の合併による都市。旧土佐山田町が高知市のベッドタウンで相対的に人口が大きいことから、高知市への依存率の高い圏域となっているが、旧香北町や旧物部村は山間地域とすることが妥当と考えられるため、高知圏から除外した。

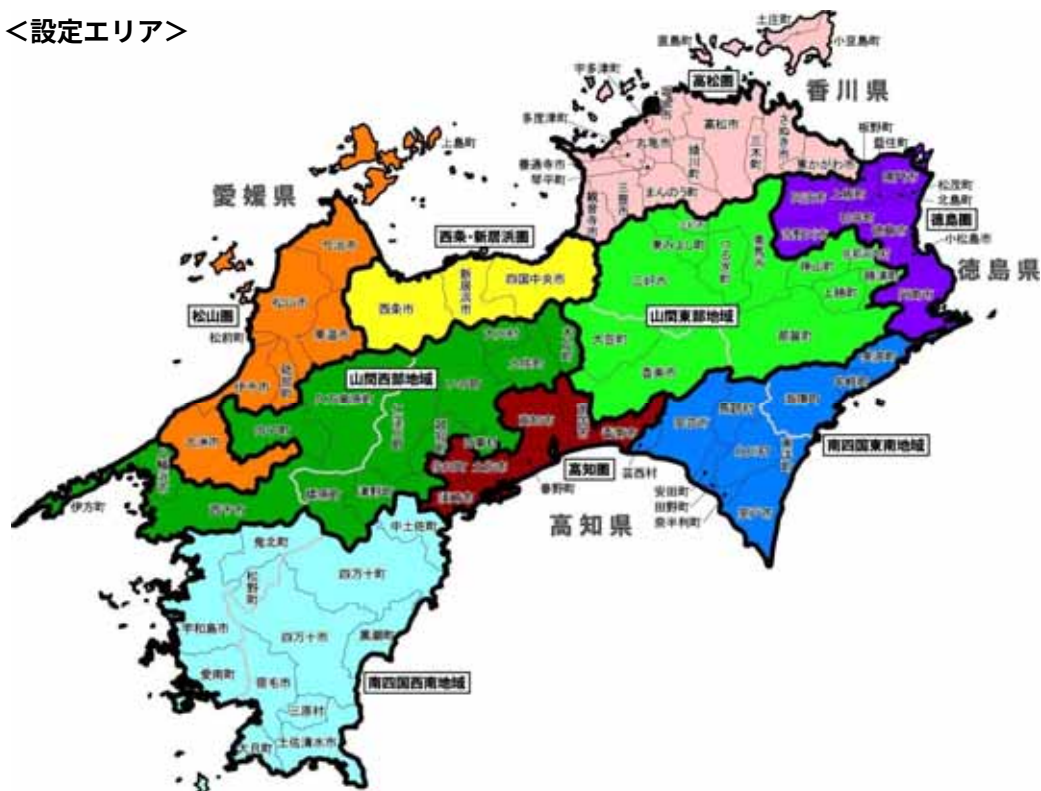
<県庁所在都市を中心とする圏域の設定>



(4) 単位的な地域区分の設定

上記の検討を踏まえ、単位的な地域区分を以下のように設定した。

<設定エリア>



3. 地域構造分析に係るエリアの設定

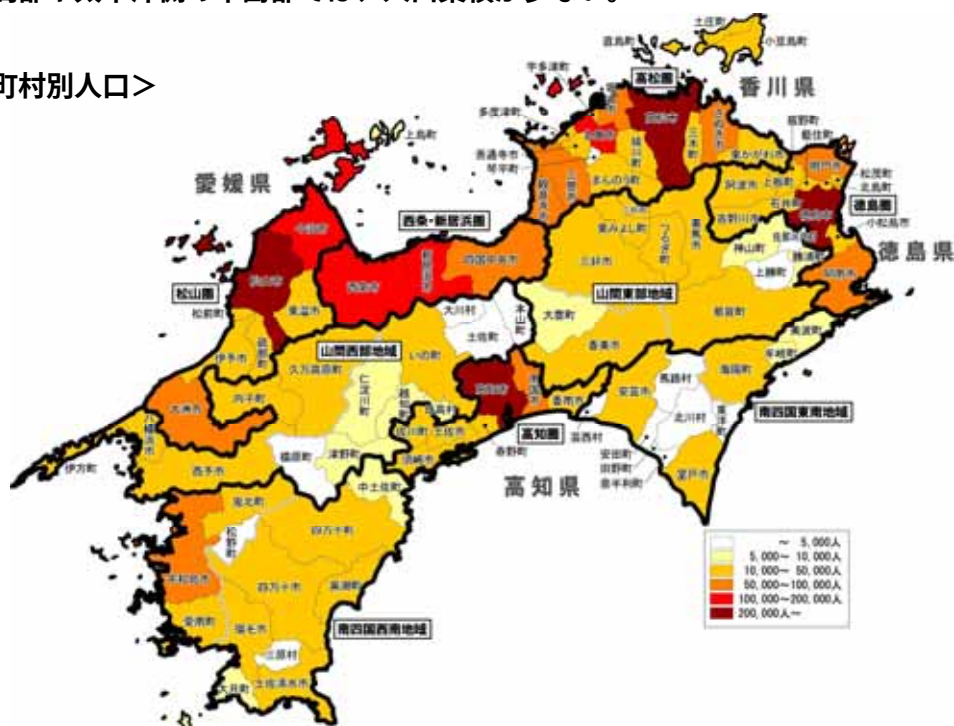
- 単位的な地域区分については、交通流動データにより都市圏の県庁所在地と周辺都市との結びつきを整理し、県庁所在都市を中心とする圏域の設定を行うものとした。

(1) 四国における生活関連集積

①人口

- 人口は、4つの県庁所在都市に多く集中しており、また、今治市、西条市、新居浜市、丸亀市といった瀬戸内側の主要市での集積も大きい。
- 瀬戸内側で広く分布し、太平洋側では高知圏で一極的に分布している。
- 山間部や太平洋側の半島部では、人口集積が少ない。

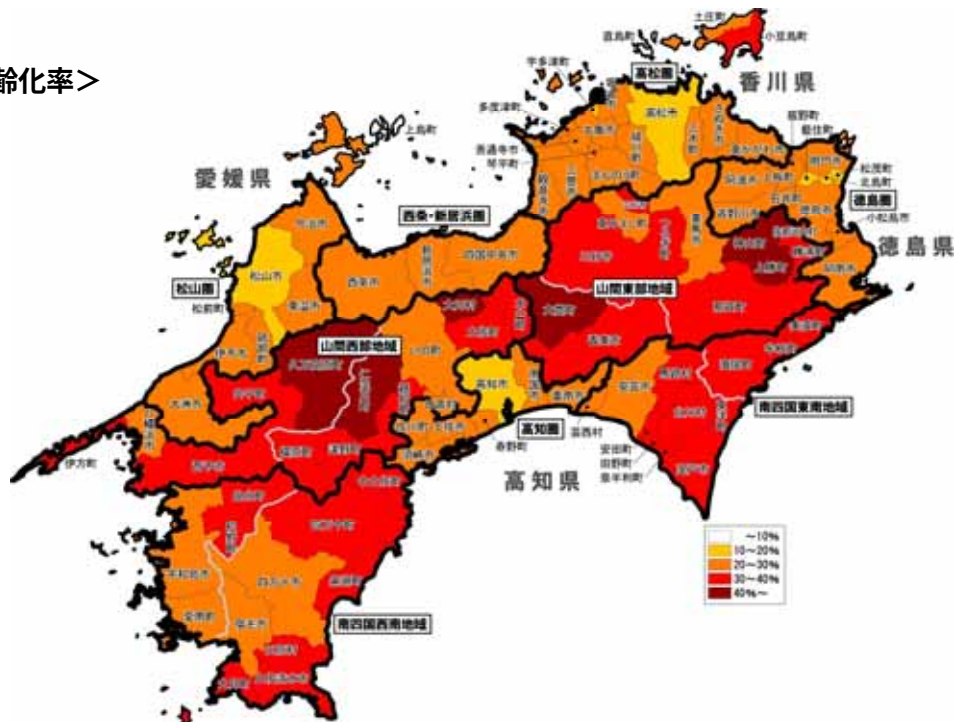
<市町村別人口>



②高齢化率

- ・高齢化の状況は、山間部や太平洋側の半島部で進行が顕著であり、特に山間部では、65歳以上人口が40%を超える市町村も多く分布している。
- ・瀬戸内側や高知圏では、65歳以上人口の割合が、他の圏域と比較して低く、15歳未満及び15～64歳人口の割合が高い。特に徳島圏での傾向が顕著である。

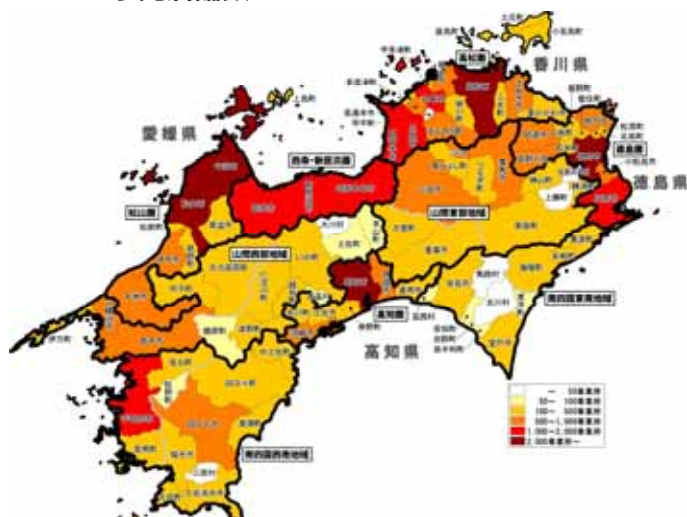
<高齢化率>



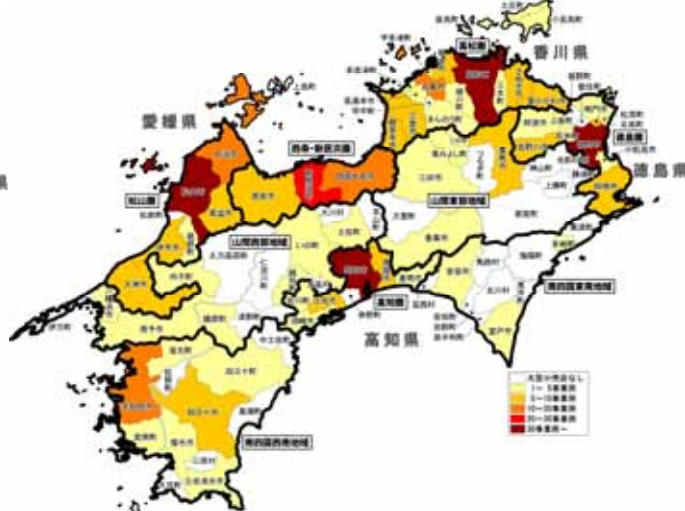
③商業店舗数

- ・小売店舗数は、4つの県庁所在都市や今治市で2,000店を超えるほか、瀬戸内側の市町を中心に多く集積している。
- ・大型小売店舗数は、4つの県庁所在都市のほか、新居浜市など瀬戸内側の市町に多く集積している。

<小売店舗数>



<大型小売店舗数>



資料) 2001事業所・企業統計調査報告

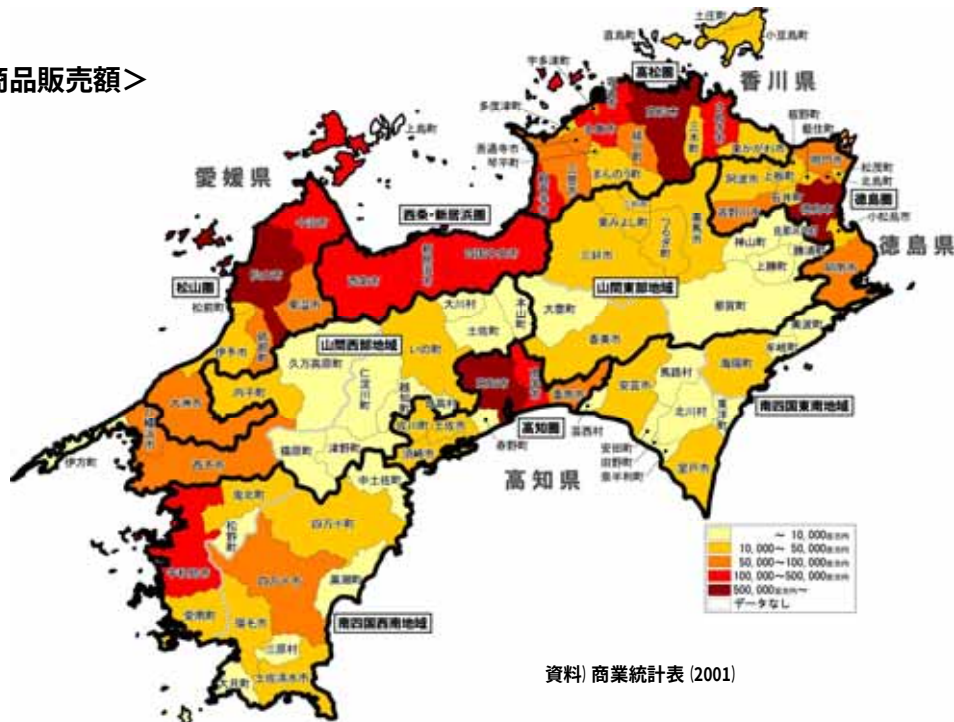
注) 大型小売店

飲食店以外の民営の小売業事業所のうち、50人以上の従業者を有する事業所をいう。したがって、百貨店などのほか、スーパーマーケットなども50人以上の従業者がいればここに含まれる。

④商品販売額

- 商品販売額は、高松圏で突出して高く、松山圏で非常に高い。また、徳島圏、高知圏でも比較的高く、4つの県庁所在都市を含む圏域で高くなっている。

<商品販売額>

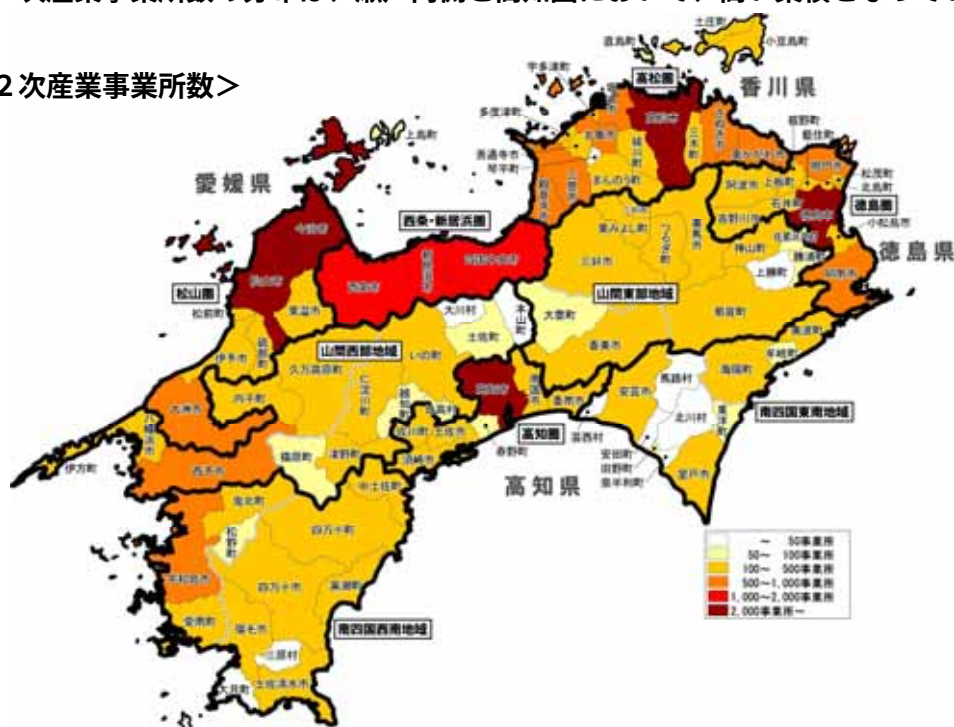


(2) 四国における産業関連集積

①第2次産業事業所数

- 第2次産業事業所数の分布は、瀬戸内側と高知圏において、高い集積となっている。

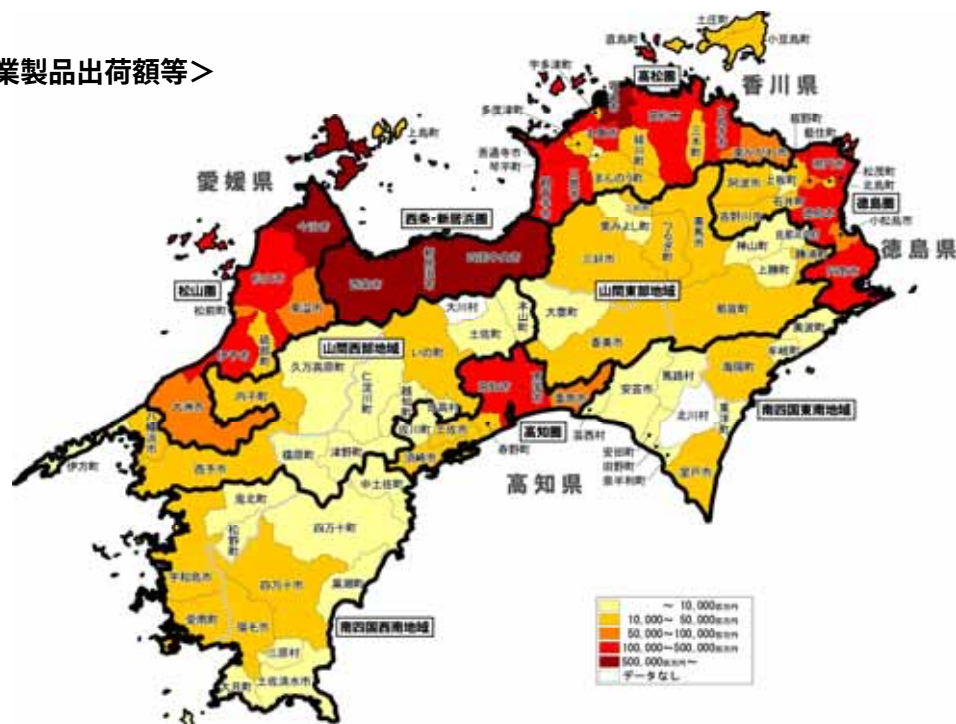
<第2次産業事業所数>



②工業製品出荷額等

- ・工業製品出荷額等は、高松圏、西条・新居浜圏で特に高く、次いで松山圏、徳島圏でも高くなっており、瀬戸内側に集中している。特に、西条・新居浜圏では、3市全てで高い額を示している。
- ・対照的に瀬戸内側以外の圏域は非常に低くなっている。

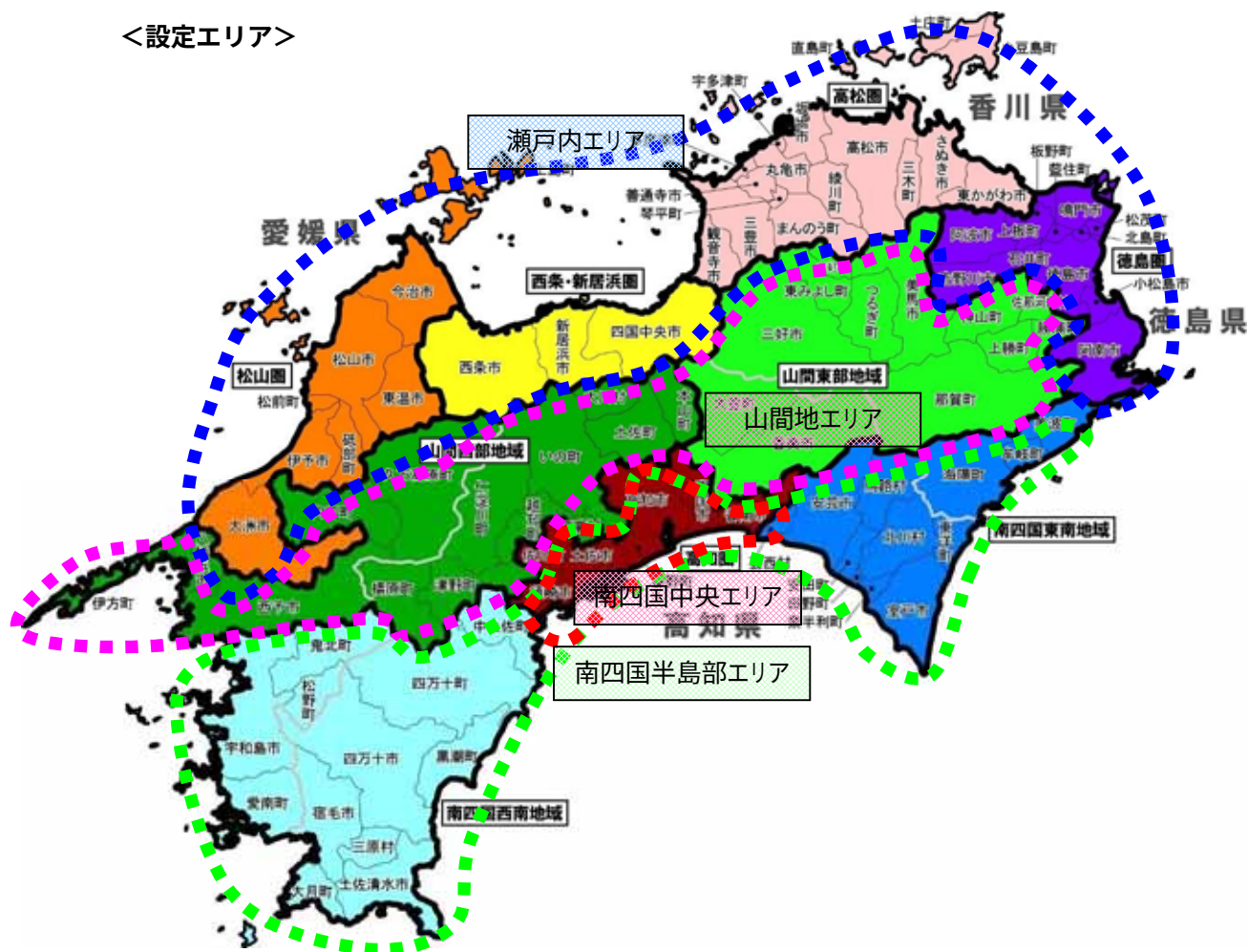
<工業製品出荷額等>



(3) 地域構造分析に係るエリアの設定

- ・生活や産業に係る集積を踏まえて、9つの単位的な地域区分を集約し、3つのエリアを設定した。

<設定エリア>



エリア	該当する地域区分	生活関連集積	産業関連集積
瀬戸内エリア	・松山圏 ・西条・新居浜圏 ・高松圏 ・徳島圏	高	高
山間部エリア	・山間西部地域 ・山間東部地域	低	低
南四国エリア	・高知圏	高	低
	・半島部西南地域 ・半島部東南地域	低	低

研究会でのこれまでの意見の整理

項目	キーワード	研究会での主な意見	WG会議での主な意見
1. 個性・特性を活かした地域を形成する	生活(定住魅力、ライフスタイル、余暇活動 等)	・ 四国は全国共通のものさしでは比較できない豊かさを持つ。(局長) ・ 豊かさ、ライフスタイルへのニーズに対する対応が重要。(局長) (那須) (井原 理) ・ 四国は、高齢者等にとって最高の環境を有する“住みよい土地”。(丸山) ・ シビル・ミニマムではなく、いわばシビル・マキシマムの方向での考えが重要。(井原 理) ・ 少子高齢化や災害への危機感を反映したディフェンスプランの議論が必要。(朝倉) ・ 全国に先駆けた少子高齢化のモデル(高齢者がいつまでも生きがいと満足感を持って参加できる社会)づくりが重要。(局長) ・ 生活重視、文化重視という生活形態では、地方はポテンシャルが高い。(望月) ・ 教育、少子高齢化対策なども一つの四国の課題。(竹内) ・ 四国外へ働きに出た人達が祭り等で戻り、地元とつながりが持てる関係作りに取り組むことが重要。(秋岡)	・ 四国は、人口縮小・経済縮小の先進地域としてのモデル的な姿勢が必要。(朝倉) ・ 経済圏と生活圏が一致しているイタリア型の圏域をめざすという発想が必要。(土井) ・ 豊かさには、「輝かしい豊かさ」と「ひなびた豊かさ」があり、前者のみの価値観からの脱却が不可欠。(井原 理) ・ 三洋電機の組合が徳島への移転に合意したのは、神戸-鳴門ルートの開通により神戸にすぐ遊びに行けるようになったという面が強い。(那須) ・ イタリアのライフスタイルや産業構造は、小さいモノの集合であり、参考にすべき面がある。(廣田) ・ 中山間地域では、職住近接で小さな産業基盤・生活基盤が整うことが重要。(廣田) ・ イタリアのような「生活の質へのこだわり」を四国においても考えるべき。(廣田) ・ 田舎から都市に出る最大の理由として教育があり、居住の観点からは教育への着目が不可欠。(豊田) ・ ライフスタイルについては、企業と結びついた形と企業から切り離された形(マルチハビテーション)の両面からの観点が重要。(羽藤) ・ 高齢者の移動手段としての公共交通の確保という観点が重要。(豊田) ・ 四国には、東京や大阪等とは異なる生活の質がある。(轟) ・ 地域に対してインフラ整備のアナウンスメントは重要。(羽藤)
	産業(クラスター、産官学連携、ニッチ型企業 等)	・ 学と官が強い方向性を示すことにより産官学連携が可能。(伊藤) ・ 1・2・3次産業の融合が重要。(伊藤) ・ ものづくりに原点を置くことが重要。(伊藤) ・ 地産地消が重要。(伊藤) ・ 四国を社会実験地域として、新しい取り組みに対して寛容で、官・学・民一体で後押しする地域にすべき。(望月) ・ 四国が率先して、外国人が働けるオープンの場所を提供すべき。(望月) ・ 大学を一つの産業と考えた、総合的なマネジメントが重要。(望月)	・ 四国は、人口縮小・経済縮小の先進地域としてのモデル的な姿勢が必要。(朝倉) ・ 地域ごとの強みを見出して、周囲がそれを支援するという連携の仕組みが必要。(廣田) ・ 中核的な都市のない四国では集積自体に意味はない。(土井) ・ 経済圏と生活圏が一致しているイタリア型の圏域をめざすという発想が必要。(土井) ・ 小さい企業の集合体である四国では、小さい企業がその特性を発揮して頑張るという発想が必要。(井原 理) ・ 地場産業は小さい存在だが、個々の存在を広域的に見れば大きいものとなる。(那須) ・ 地場産業は、モノを売るのみでなく、人が来ることも含めて考える必要がある。(那須) ・ 高知においては、港湾周辺の工業用地の坪単価が高い等のデメリットがあり、他との競合関係を踏まえた産業集積の戦略が必要。(土井) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 地域間で競走して独自に発展する際に、不足する部分を連携で補うという「競走ありき」の連携が必要。(轟) ・ 88ヶ所も個々は弱い企業であり、資源を組合せ機能分担することにより、商売が成立する。(那須) ・ 高知では、世界一やチャンピオンがなくても、少しでも儲かる付加価値の高い企業があれば成立する。(那須) ・ 四国ではホームランバッテリーとなる企業が少ないが、コンパクトにヒットが打てるバッテリーを多数創出していくべき。(廣田) ・ イタリアのライフスタイルや産業構造は、小さいモノの集合であり、参考にすべき面がある。(廣田) ・ フェラガモのように、小さいが質の良いモノを出していけば、世界的な企業となりえる。(井原 理) ・ イタリアのような中小企業が産業クラスターを形成しているという姿を目指すべき。(廣田) ・ 産業は、集積のみでなく、ソーシャルネットワークの観点も重要。(土井) ・ うるさい消費者が産業を育てたという観点が重要。(土井) ・ 優秀な人が大企業ではなく、地元に残ってビジネスを発展させているという面も重要。(羽藤) ・ 地域に対してインフラ整備のアナウンスメントは重要。(羽藤)
	文化(地域資源、祭り、食等)	・ 自然、歴史・文化、人情等地域特性を踏まえた独自の魅力のある地域づくりが重要。(局長) ・ 食、景色、風土、人間性など、四国の持つ資源の掘り起こしが重要。(望月) ・ 自分達の宝物(地域資源)に気付いて磨くことが必要。(梅原) (竹内) ・ 四国の魅力は立場、立場で異なる。(井原 理)	・ 四国に残りそうなものを支える体制を整えることが重要。(朝倉) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理) ・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田) ・ 中山間地域は農産品を中心とした産業に力を入れるべき。(那須) ・ 地域で、農産品等の付加価値を高めることができれば、地域での生活を確保することができる。(那須) ・ 中山間地域でも、地域資源を活かしてプラスに転じられる地域と、難しい地域があり、見極めが重要。(羽藤)

項目	キーワード	研究会での主な意見	WG会議での主な意見
2. コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに ～ コンパクト・リージョン四国の形成 ～			
①文化的、歴史的な一 体性を活かした連携	遍路道や歴史的港のネットワ ーク	・ 四国をつなぐのは、お遍路さん、お接待の文化。(梅原) (本庄) ・ 八十八ヶ所の世界遺産申請など、他の県を意識し、連携するような動きが見られ始めるなど、良い方向に向かっている。(梅原)	・ 歴史的な道のネットワークは四国のアイデンティティとして重要。(羽藤)
	郷土への愛着心	・ 四国の中で、お互いを競争相手としていくことが重要。(秋岡) ・ リーダーとして、地域に残り、貢献する人を育てることが重要。(梅原) ・ 自分達の宝物(地域資源)に気付いて磨くことが必要。(梅原) (竹内) ・ 四国の何が魅力か、土地に対する愛着を自覚することが重要。(井原 健) ・ 県内で消費をしない、魅力を感じられない若い者が多いなど、四国に対する認識が低い。(本庄)	・ 優秀な人が大企業ではなく、地元に残ってビジネスを発展させているという面も重要。(羽藤) ・ 四国では、文化面ではお遍路など、一体性の観点が重要。(羽藤)
	担い手の育成と継承	・ 大学における四国外に出て戻ってくる人材育成、やりがいのある仕事づくりにより、人口が減少しても支えられる地域づくりが可能。(秋岡)	・ 今は元気でも 20 年後には頑張れないという点に留意した考え方が重要。(山中) ・ 担い手の問題がある中山間地域では、エコライフという考え方を示していくなど、人を呼び込む上での工夫が重要。(山中) ・ 四国の地域スタイルを考える上で、住む人の生活と移住者の生活の観点から考えていくべき。(山中) ・ 限界集落では、高齢者が 6 割以上であり、人材育成まで至らないのが現状。(豊田) ・ 限界集落を保全しうる豊かさが重要。(土井)
	広域観光ネットワーク	・ 食、景色、風土、人間性など、四国の持つ資源の掘り起こしが重要。(望月)	・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田)
②多様な主体の連携・ 協働による個性ある 地域づくりの推進	新たな公	・ 地域づくりでは経済・人的・社会関係・文化・環境等の資本の観点からの個性発揮が重要。(小川) ・ 諸資本を効率的に動かす工夫が重要。(小川) ・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力) (伊藤) ・ 四国には熱心なボランティア活動の風土がある。コミュニティの価値を見直すことが重要。(局長) ・ 地域と行政が一体となった圏域づくりが重要。(局長) (小川) ・ 「自立」のみではなく「自律」も重要。住民自らが地域社会の実現について自己決定するという考えが重要。(小川) ・ 四国において、地域住民の自律に基づくコミュニティの形を提示することが重要。(小川) ・ ボランティアを自己増殖する活力と捉え、官は場を提供することが重要。(今井) ・ 官民協働の活動支援のための資金の流れ(地域内循環、地域ファンディング)が重要。(小川) (廣田) ・ NPO やオーソリティ等、権限を持った民間組織の構築により、行政との連携が可能。(望月) ・ コミュニティのエネルギーが高いところから、新しい後退局面のあり方を打ち出すことが重要。(西村) ・ 少子高齢化や国土保全の問題解決にはボランティア活動や地域コミュニティの再生が重要。(局長) ・ ボランティアなど四国の先進的な特性を重視し、依存の意識から脱却すべき。(廣田) ・ 高齢化は高齢者の人材が豊富な時代、力を終結すれば原動力とすることが可能。(望月) ・ ソフト先行の意識に目覚めれば、ハードが高い威力を発揮することが可能。(梅原) ・ 地域でリーダーとなれる人材の確保の問題が深刻(量より質)。(秋岡) ・ 人口の減少について、「量が落ちれば質も落ちる」ことに留意することが必要。(梅原) ・ モノ(道路・橋、人(人材、知識)等をデッドストックにしないことが重要。(伊藤)	・ 地域経営モデルの観点から、経済効果を高めるための公的支出のコントロールが重要。(廣田) ・ コミュニティビジネスを拡大するには、サポーターやコーディネイター等のネットワークが重要。(山中) ・ 産業は、集積のみでなく、ソーシャルネットワークの観点も重要。(土井) ・ 集落レベルで頑張っているところに投資するという発想は重要。(羽藤) ・ 頑張りたくても頑張れない地域に投資するという発想が重要。(豊田) ・ 中山間地域でも、地域資源を活かしてプラスに転じられる地域と、難しい地域があり、見極めが重要。(羽藤) ・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井)
	美しい四国づくり	・ 自然、歴史・文化、人情等地域特性を踏まえた独自の魅力のある地域づくりが重要。(局長)	・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理)
	循環と共生の社会	・ 山を守るという観点が重要。(局長)	・ 限界集落を保全しうる豊かさが重要。(土井)

項目	キーワード	研究会での主な意見	WG会議での主な意見
③都市相互の近さを活かした地域連携の強化	文化・スポーツ交流	・ 大学は、地元と密着した、スポーツ、芸術等の発信基地としての機能が重要。(望月)	・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井)
	余暇活動		・ イタリアのような「生活の質へのこだわり」を四国においても考えるべき。(廣田)
	経済活動	・ 学と官が強い方向性を示すことにより産官学連携が可能。(伊藤)	・ 小さい企業の集合体である四国では、小さい企業がその特性を発揮して頑張るという発想が必要。(井原 理)
	防災活動	・ 地産地消が重要。(伊藤)	・ 地場産業は小さい存在だが、個々の存在を広域的に見れば大きいものとなる。(那須)
			・ 地場産業は、モノを売るのみでなく、人が来ることも含めて考える必要がある。(那須)
			・ 88ヶ所も個々は弱い企業であり、資源を組合せ機能分担することにより、商売が成立する。(那須)
			・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田)
			・ 現在は弱い、産官のつながりが重要。(廣田)
			・ イタリアのような中小企業が産業クラスターを形成しているという姿を目指すべき。(廣田)
			・ 地域の活力がないまま、道路を整備しても、ストロー化が生じるだけであり、地域活力の向上が第一に重要。(土井)
			・ 地域に対してインフラ整備のアナウンスメントは重要。(羽藤)
	都市間の機能分担・連携	・ 県単位ではなく、生活圈という観点が重要。(岡村)	・ 中核的な都市のない四国では集積自体に意味はない。(土井)
		・ 四国の現状は1つ1つだが、連携を深めることで、大きな力が発揮できる。(局長)	・ 二次医療等は中心都市に行けばサービスを享受できるなど、機能的なコンパクトを発揮できる圏域形成が重要。(那須)
		・ 四国は1つ1つで互いを知らない。知らないが故に交流がない。(梅原)	
		・ 四国内で身近に一体感を感じるための観点が重要。(本庄)	
		・ 四国88ヶ所のように各々が自立しつつ、連携するという計画論が必要。(西村)	
		・ ハンディキャップを良い方向につなげることが重要。互いを知らないことは、今後知ることであり、ブーム創出が可能。移動の不便さは、ゆっくりした時間消費を楽しむ取り組みにつなげることが可能。(秋岡)	
		・ 四国4県の連携が必要。(梅原)	
		・ 四国を一つにするという考えではなく、動きを応援できるようなシステムづくりが重要。(望月)	
		・ 多様性を前提にしつつ、全体としての相乗効果を高めることが重要。(井原 健)	
		・ 「他の地域には負けられない」という敵対心を有しているように感じる。(本庄)	
		・ 8の字ネットワーク等、人々の活発な活動を支える仕組みづくりが重要。(柏谷)	
		・ 高速道路のETC割引(通勤割引)等の交流促進の取り組みが重要。(柏谷)	
④5つの都市と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化	流域圏の上下流交流		
	二地域居住	・ 四国は、高齢者等にとって最高の環境を有する“住みよい土地”。(丸山)	・ ライフスタイルについては、企業と結びついた形と企業から切り離された形(マルチハビテーション)の両面からの観点が重要。(羽藤)
		・ 全国的に先がけたマルチハビテーション(二地域居住)の取り組みが重要。(井原 健)	・ 四国は、都市と田舎が近く、2つの生活がしやすい条件にある。(羽藤)
			・ 担い手の問題がある中山間地域では、エコライフという考え方を示していくなど、人を呼び込む上での工夫が重要。(山中)
			・ 四国の地域スタイルを考える上で、住む人の生活と移住者の生活の観点から考えていくべき。(山中)
	都市機能集積	・ 四国の many to many の地域構造における望まれる方向性を明確にすることが重要。(朝倉)	
		・ 行政、産業と大学の距離が非常に近く、有機的に結びついているなど、過疎、小規模、島国であることを利点と捉えることが重要。(望月)	
	都市と中山間地域の連携	・ 1・2・3次産業の融合が重要。(伊藤)	・ “30万人都市圏域”と“それ以外の山間地域”を分けて、生活や経済を考えるべき。(羽藤)
		・ 都市部の問題と、地方部の農山村の問題を分けて考えるべき。(柏谷)	・ 地域の活力がないまま、道路を整備しても、ストロー化が生じるだけであり、地域活力の向上が第一に重要。(土井)
		・ 農山村は、都市部への通勤圏(都市部での産業、雇用を支援する地域)とそれ以外の地域(特色を活かした活動を行う地域)に分けるべき。(柏谷)	・ 四国は、都市と田舎が近く、2つの生活がしやすい条件にある。(羽藤)
		・ ヨーロッパで郊外以遠の地域で住む人々が増加している状況を踏まえ、四国において、豊かな農山村の文化、自然などを享受しながら交通等が便利で快適に利用するモデル地区を設けるべき。(柏谷)	・ 二次医療等は中心都市に行けばサービスを享受できるなど、機能的なコンパクトを発揮できる圏域形成が重要。(那須)
			・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井)
⑤安心・安全の確保	災害対策	・ 山を守るという観点が重要。(局長)	
		・ 四国の住民の絆を活かした、行政と住民が一体となった防災のモデル地域としての位置づけが重要。(柏谷)	
	災害に強い国土づくり	・ 少子高齢化や災害への危機感を反映したディフェンスプランの議論が必要。(朝倉)	
		・ 四国の豊富な木材を活かし、木製防犯による防災施策が重要。(伊藤)	
		・ 幹線、国土の確保上重要な箇所における防災対策に集中投資すべき。(柏谷)	
3. 四国外との活発な交流を促す			

項目	キーワード	研究会での主な意見	WG会議での主な意見
①環瀬戸内圏との連携強化	環瀬戸内圏連携	・ 環瀬戸内の考え方が重要。(伊藤) ・ 関西・中国・九州との協働を考える必要がある。(柏谷)	・ 交流の観点からは、環瀬戸内での交流の観点も重要。(羽藤)
	海洋・沿岸域の管理・利用・保全	・ 都市側から沿岸域を考えることが重要。(西村)	
	本四3架橋の活用	・ 他の財源確保による橋の無料化等、仕組みの転換による地域イメージの変革が重要。(西村)	・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田)
②全国との交流促進	交流人口	・ 交流をキーワードに、人口の質の向上、経済活動力の向上を進めることが必要。(小川) ・ 交流人口を増やすためには、名の通った食べ物が重要。(丸山)	・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田) ・ 地域を結ぶのは、ハードのみでなく、ソフトもある。(土井) ・ 三洋電機の組合が徳島への移転に合意したのは、神戸-鳴門ルートの開通により神戸にすぐ遊びに行けるようになったという面が強い。(那須)
	ゲートウェイ機能	・ 陸、海、空の交通網の活用により、四国は足下から良いものとなる。(伊藤)	・ 島国である四国ではゲートウェイを特徴付けることも重要。(羽藤) ・ 中山間地域でも四国外とのつながりは必要であり、空港や橋等のアクセスが重要。(廣田)
	四国ブランド	・ 四国のブランドの創出とその発信が重要。(丸山) ・ 社会資本の整備は、ハードの他、人々の力の結合としても考えることが重要。(今井)	・ 良質のものを産み出すことが四国の強みだという姿を目指すべき。(廣田) ・ 四国の農業においては、アメリカ型の大規模農業ではなく、イタリアのスローフード、スローライフ型の農業が重要。(井原 理) ・ 景観に配慮した地域はマーケットで高い評価を受ける時代が必ず来る。(井原 理) ・ 外から見た四国の魅力はスローライフ、スローフードだが、来てもらうためには最低限のインフラが必要。(廣田) ・ 地域で、農産品等の付加価値を高めることができれば、地域での生活を確保することができる。(那須) ・ フェラガモのように、小さいが質の良いモノを出していけば、世界的な企業となりえる。(井原 理)
	情報発信・PR	・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力) (伊藤) ・ 四国のブランドの創出とその発信が重要。(丸山) ・ 四国は情報発信能力が弱い。情報発信によって情報収集能力は何倍にもなる。(伊藤)	
③東アジア、世界との交流促進	国際ゲートウェイ機能	・ 陸、海、空の交通網の活用により、四国は足下から良いものとなる。(伊藤)	・ 島国である四国ではゲートウェイを特徴付けることも重要。(羽藤)
	国際観光交流		
	国際的な人材の育成・支援	・ 人材の発掘が重要。(情報発信力、実行力、コーディネート力) (伊藤) ・ 国際競争に勝つための人々の知恵と力の活用という視点が重要。(今井) ・ 地域でリーダーとなれる人材の確保の問題が深刻(量より質)。(秋岡) ・ 人口の減少について、「量が落ちれば質も落ちる」ことに留意することが必要。(梅原)	
	国際競争力のある産業		

新四国創造研究会 WG 会議検討結果概要

<四国の特徴>

- 1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ
- 2) 美しい自然と農漁村など人々の営み
- 3) 都市と田舎の近さ
- 4) 独自の歴史、文化の存在 等

<四国の課題>

- 1) 高度集積(100万都市)の不在
- 2) 人口減少と高齢化の進展
- 3) 厳しい自然環境
- 4) 地域活力の衰退
- 5) 四国内の結びつきの弱さ 等

<個性・特性を活かした地域の形成(各地域の活力向上)>

- 1) 5つの都市圏(30万都市圏)とその他の中山間地域
- 2) 個性的な3つの地域

①瀬戸内エリア

4つの都市圏(30万都市圏; 徳島~高松~西条・新居浜~松山)が連続して存在。
都市集積、産業集積が高く、ストックを活かした競争力向上を図る

②山間部エリア

急峻な地形により小規模な集落が存在。
集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る

③南四国エリア

【高知圏】インフラ整備等の推進と、それを最大限に活かした地域活力の向上を図る。
【半島部】地域資源を活かした特色ある地域づくりを図る。

四国の5つの都市圏と中山間地域の交流・連携強化のためには、拠点強化とネットワーク形成の相乗効果を生む地域構造の形成が必要

四国の少子・高齢化、人口減少傾向等を踏まえ、四国の個性を活かしつつ、四国の交流人口を増加させる多様な交流促進が必要

<望まれる地域構造の考え方(活力ある地域のつながりの強化)>

- 1) コンパクトな地域構造を活かして、四国をひとつに

- ①文化的、歴史的な一体性の確保
- ②多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進
- ③都市相互の近さを活かした地域連携の強化
- ④5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化
- ⑤安全・安心の確保

- 2) 四国外との活発な交流を促す

- ①環瀬戸内圏との連携強化
- ②全国との交流促進
- ③東アジア、世界との交流促進

「コンパクト・リージョン・四国」の形成

1. 四国の特徴

- 1) 多様な都市の存在、都市相互の近さ
 - ・個性的な5つの都市圏（30万都市圏）
 - ・県庁所在都市間が2時間で交流可能
- 2) 美しい自然と農漁村など人々の営み
 - ・中山間地域の集落における景観、歴史・文化の存在、日本の原風景
 - ・険しい四国山地の存在
- 3) 都市と田舎の近さ
 - ・中山間地域の集落からも、概ね90分で県庁所在都市まで交流が可能
- 4) 独自の歴史、文化の存在
 - ・お遍路やお接待文化などの歴史・文化、ボランティア活動

2. 四国の課題

- 1) 高度集積の無さ
 - ・100万都市の不在
- 2) 人口減少と高齢化の進展
 - ・全国に先かぎて人口減少、高齢化が進展
 - ・限界集落の存在
- 3) 厳しい自然環境
 - ・台風、東南海地震、渇水被害
- 4) 地域活力の低下
 - ・1次産業を取りまく厳しい状況
 - ・工業の好調な瀬戸内側と集積の少ない南四国の地域格差
- 5) 四国内の結びつきの弱さ
 - ・人・物の交流は、県外が第一位

3. 個性・特性を活かした地域の形成（各地域の活力向上）

- 5つの都市圏（30万都市圏）と4つの中山間地域
→9つの地域区分
- 個性的な3つの地域
→瀬戸内エリア、山間部エリア、南四国エリア

1) 個性的な3つの地域の今後のあり方

①瀬戸内エリア

●4つの都市圏（30万都市圏）が連たん。都市集積、産業集積が高く、ストックを活かした競争力向上が求められるエリア

- ・本エリアにおいては、徳島～高松～松山という3つの県庁所在都市が存在するとともに、高速道路等のインフラが整備され、これらを中心とする産業集積（2次、3次産業）が高く、都市化が進展している。
- ・また、国内、世界において高いシェアを獲得しているニッチ※企業が集積するなど、企業レベルの創意工夫による産業の発展が図られている。
- ・このため、都市化の進展に伴う交通事故や渋滞、渇水被害の多発等の問題に対応しつつ、既存ストックを活用した、四国を代表する集積エリアとしての競争力向上を図ることが必要である。

1) 「生活」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

【地域構造強化の方向性】

- ・中心市街地におけるコンパクトな範囲での都市機能の充実・強化を図るとともに、顕在化する交通渋滞や事故、環境の悪化、渇水等の課題を解消し、高質な都市サービスを提供する中心市街地と周辺の市街地との機能分担・連携を高め、圏域全体としての利便性や快適性の相乗的向上を図る。

【四国の独自性を発揮するための地域戦略】

～主要都市の多様な都市機能の集積を活かした定住魅力の創出～

- ・地域内の定住魅力を高めるため、圏域内に連担する県庁所在都市やその他中心都市におけるサービス機能を強化するとともに、地域の有する多様な資源を活用し、余暇活動の充実、地域活動の活発化を図る。
- ・さらには、四国の誇るべき文化である「おもてなし文化」等の付加価値を外部に情報発信し、定住の場としての地域ブランドを創出する。

2) 「産業」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

【地域構造強化の方向性】

- ・既存の産業集積を活かしつつ、四国の産業を牽引する圏域としての産業機能集積を強化する。
- ・四国内外、東アジアをはじめとした国外との連携を深め、産業における競争力の向上を図る。

【四国の独自性を発揮するための地域戦略】

～瀬戸内の産官学の集積を活かした地域に根付くものづくり風土を伸ばす仕組みづくり～

- ・様々な社会的ネットワーク（産官学連携、異業種分野間連携、環瀬戸内連携、大都市市場との連携等）の構築による、地域資源・人材資源・技術資源を融合したイノベーションを図るとともに、環瀬戸内や東アジア等の様々な連携・交流による、日本や世界のNO.1企業を育てる風土を支える仕組みを確立する。

②山間部エリア

●急峻な地形により小規模な集落が存在。集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア

- ・本エリアにおいては、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が低く、特に、少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・一方、急峻な地形により、インフラ整備や、人口・産業等の集積が難しいものの、豊富な自然、個性的な地場産業等の存在、地域活動に対する意識の高さ等の特色を有する地域であり、集積型ではなく、地域資源を活かした特色ある発展から、自立を図ることが必要である。

1) 「生活」と「産業」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

[地域構造強化の方向性]

- ・人口や産業等の高い集積を目指すのではなく、地域独自の取り組みにより、地域の魅力・活力（場としての機能）の向上を図る。
- ・中心的地区においては、基本的な生活サービス機能（ナショナルミニマム）の確保を図るとともに、瀬戸内等の都市的圏域との連携・交流を強化し、都市的機能を楽しむ。

[四国の独自性を発揮するための地域戦略]

～田舎暮らしニーズに応じたライフスタイルの提供や自然との共生を目指した安心・安全な定住魅力の創出～

- ・田舎暮らしやマルチハビテーション等に対するニーズに基づき、独自のライフスタイルを提供できる仕組みを構築し、地域活動と連携した新たな余暇魅力を創出する。
- ・また、地域の誇れる自然資源等の保全、自然を活かした地域魅力の創出を都市と山村、河川の上下流域交流を通じて推進するとともに、自然災害被害の最小限化による安心できる環境づくりを推進する。

～地域資源を活かした特色あるビジネスの創出・展開～

- ・上勝町のはっぱビジネスなどの先進的な取り組みをモデルとし、都市部住民等をターゲットとした、自然資源、地場産品、人材等を活用した新たな付加価値を高めた特色あるビジネスモデルの創出・展開を図る。

③南四国エリア

<高知圏>

●インフラ整備等の推進と、それを活かした地域活力の向上が求められるエリア。

- ・本エリアにおいては、高知市を中心に、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が比較的高い圏域（高知圏）と、それを挟み込むように、集積の低い東南地域と西南地域の半島部が存在しており、特に半島部においては少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・瀬戸内エリアと比較して、高速道路等のインフラ整備が遅れ、相対的に産業集積が低いものとなっていることから、インフラ整備等の推進と、それを最大限活かした地域の活性化を図っていくことが必要である。

1) 「生活」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

[地域構造強化の方向性]

- ・高知市を中心とする生活に係る機能集積の高さを活かし、コンパクトな範囲での都市機能の充実・強化により都市内居住の快適性を向上させる。
- ・圏域内外との交流・連携を図ることにより、都市・生活利便性の向上を図る。

[四国の独自性を発揮するための地域戦略]

～土佐の自然と歴史、文化が育むおもてなしの定住魅力の創出～

- ・南四国における中心都市圏としての定住魅力を高めるため、高知市を中心に様々な拠点的な生活サービス機能の拡充を図るとともに、地域の有する多様な資源（海や山、祭りや歴史、食等）を活用し、心のゆとり、豊かさ、励みとなるような地域への愛着の高まる生活拠点の形成を図る。
- ・さらには、高知特有の様々な文化や外部の者をもてなす「おもてなし文化」等の付加価値を外部に情報発信して、定住の場としての地域ブランドを創出する。

2) 「産業」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

[地域構造強化の方向性]

- ・インフラ等産業基盤の充実・強化及びアクセス機能の向上により、四国の新たな産業の核として、産業の集積を図る。
- ・新たな独自産業を展開し、産業における競争力の向上を図る。

[四国の独自性を発揮するための地域戦略]

～人や情報の交流ネットワークや道路交通のネットワークの形成による特色ある産業の発展～

- ・地域の産業集積の弱さを克服するため、産業・食料産業・知的の3つのクラスターによる人や情報のネットワークにより特色ある産業を発展させるとともに、南四国圏と東アジア、世界とを結ぶ港湾ゲートウェイ機能を強化や、本四3橋への道路ネットワークの強化等を図る。

<半島部(西南・東南)>

●地域資源を活かした特色ある地域づくりが求められるエリア。

- ・本エリアは、高知圏を挟み込むように形成されている東南地域と西南地域の半島部のエリアであり、人口や産業、生活サービスに係る各種機能の集積が低く、特に、少子高齢化や人口減少の進展等が著しい状況にある。
- ・瀬戸内エリアと比較して、高速道路等のインフラ整備が遅れていることから、インフラ整備等の推進に応じた、地域資源を活かした特色ある発展地域の活性化を図っていくことが必要である。

1) 「生活」と「産業」に着目した地域構造強化に向けた方向性と地域戦略

[地域構造強化の方向性]

- ・地域独自の取り組みにより、地域の魅力・活力(場としての機能)の向上を図る。
- ・中心的地区においては、基本的な生活サービス機能(ナショナルミニマム)の確保を図るとともに、南四国中央との連携・交流を強化し、都市的機能を楽しむ。
- ・四国内外とのアクセス機能の向上により、地域資源を活かした特色ある地域の活性化を図る。

[四国の独自性を発揮するための地域戦略]

～山・川・海の自然とふれあい、自然と共生した多様な暮らし方を実感できる安心・安全な定住魅力の創出～

- ・田舎暮らしやマルチハビテーション等に対するニーズに基づき、広域的な交流基盤の形成により、自然の恵み、あたたかな人のもてなしによって、独自のライフスタイルを提供できる仕組みを構築する。
- ・また、地域の自然の尊さ、暮らしの喜び、人のあたたかさなどに会い、心のゆとり、豊かさを感じるにより、新たな定住魅力につながるような展開を図る。
- ・さらに、地域の誇れる自然資源等の保全、自然を活かした地域魅力の創出を都市と山村、河川の上下流域、沿岸部との交流を通じて推進するとともに、自然災害被害の最小限化による安心できる環境づくりを推進する。

～半島部における地域資源を活かした特色あるビジネスの創出・展開～

- ・広域的な交流基盤の形成を図るとともに、馬路村ゆずビジネスや室戸市の海洋深層水ビジネス等に代表される1次産品等の地域資源を活用した特色ある地場産業に加え、観光や癒し、食等の付加価値を高めたビジネス展開、情報発信し、南四国のブランド力を強化する。

4. 望まれる地域構造の考え方（活力ある地域のつながりの強化）

1) コンパクトな地域構造を活かした、「四国はひとつ」

四国の5つの都市圏と中山間地域の交流・連携強化のためには、拠点強化とネットワーク形成の相乗効果を生む地域構造の形成が必要

①文化的、歴史的な一体性の確保

- ・ 遍路によるつながり、歴史上のつながり等、内包する独自性の高い文化等を活用した一体化

②多様な主体の連携・協働による個性ある地域づくりの推進

- ・ 活発なボランティア活動等の住民活動の拡大による個性的な地域づくりへの取り組みの推進

③都市相互の近さを活かした地域連携の強化

- ・ 都市圏相互の経済・産業面での結びつきの強化、新たな文化の創造（アイランドリーグなど）、余暇活動、経済活動、防災活動等、多面的な交流・連携の促進、都市圏相互が連携した水資源の有効活用の推進、隣接都市間における機能分担等による地域レベルでの機能強化

④5つの都市圏と中山間地域の近さを活かした連携強化・相互活性化

- ・ 高規格幹線道路と国県道の強化による交流・連携の強化や定住促進、二地域居住、相互交流等の推進

⑤安全・安心確保

- ・ 水害や渇水被害、発生が予測される地震への対応等、安全・安心に向けたまちづくりの推進

2) 四国外との交流促進

四国の少子・高齢化、人口減少傾向を踏まえ、四国の個性を活かしつつ、四国の交流人口を増加させる多様な交流促進が必要

①環瀬戸内圏との連携強化

- ・ 歴史的、生活・産業などにおける連携強化
- ・ 本四架橋を活かした連携強化
- ・ 環瀬戸内圏の交流を活用した地域活性化

②全国との交流促進

- ・ 空港や重要港湾、本四連絡橋等のゲートウェイ機能の強化による全国との交流促進
- ・ 四国ブランドの全国発信

③東アジア、世界との交流促進

- ・ 空港や重要港湾、本四連絡橋等のゲートウェイ機能の強化による世界との交流促進
- ・ 東アジアとの貿易・交流の重点的な拡大

5. 新四国の創造イメージ

●「コンパクト・リージョン・四国」の形成

- ・四国は、都市・産業集積の高い都市圏と中山間地域の距離が近く、マルチハビテーションや田舎暮らしを行う「理想の空間」としてのポテンシャル向上を図りうる可能性を有する国内有数の圏域と捉えることができる。
- ・このため、歴史的・文化的なつながりやネットワークを形成し、地域間の交流・連携の強化を図ることにより、高度集積のメリットを享受できないというデメリットを補い、ひとつの四国としてコンパクト・リージョン（小型で充実した地域）の形成を図る。